

仮面ライダーデモンズ Re:Make

SoDate

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※1

この作品は、世界観など完全オリジナルとなっているのでご注意ください
ださい

※2

この作品は作者が書きたいと思ったので書き始めた作品です
なので好き勝手書いてます

※3

多少の無理、矛盾はご容赦して生暖かい目で見守ってください

※4

リメイク前から大幅に設定変更がされています、ご容赦ください

追記：作者欄にリクエスト掲示板を設けてあるのでリクエスト、質問がある方はお気軽に

目次

デモンズRe 用語まとめ | 1

1クール目

第1話,	事件記録D—仮・面・戦・士—(A)	8
第1話,	事件記録D—仮・面・戦・士—(B)	12
第2話,	事件記録D—契・約・遂・行—(A)	19
第2話,	事件記録D—契・約・遂・行—(B)	23
第3話,	警備記録I—新たな依頼は警備依頼—(A)	32
第3話,	警備記録I—新たな依頼は警備依頼—(B)	38
第4話,	警備記録I—門原ヒロトの流儀—(A)	45
第4話,	警備記録I—門原ヒロトの流儀—(B)	53
第4話,	警備記録I—門原ヒロトの流儀—(C)	58
第5話,	追跡記録H—恋愛・パニック!—(A)	67
第5話,	追跡記録H—恋愛・パニック!—(B)	73
第6話,	追跡記録H—友人の真実・悪魔の真実—(A)	78
第6話,	追跡記録H—友人の真実・悪魔の真実—(B)	84
第7話,	遭遇記録K—季節外れの幽霊—(A)	93
第7話,	遭遇記録K—季節外れの幽霊—(B)	99
第8話,	遭遇記録K—契約者探し—(A)	106
第8話,	遭遇記録K—契約者探し—(B)	111
第9話,	配信記録B—動画と欲望と新ライダー—(A)	121
第9話,	配信記録B—動画と欲望と新ライダー—(B)	127
第10話,	配信記録B—無茶と欲望と仮面ライダー—(A)	

第10話、 配信記録B―無茶と欲望と仮面ライダー―(B)

141

第10話、 配信記録B―無茶と欲望と仮面ライダー―(C)

149

第11話、 祝祭記録J―祭りの準備―(A) | 156

第11話、 祝祭記録J―祭りの準備―(B) | 163

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側―(A) | 170

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側―(B) | 175

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側―(C) | 181

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側―(D) | 189

2 クール目

第13話、 邂逅記録M―懐かしの母校へ―(A) | 196

第13話、 邂逅記録M―懐かしの母校へ―(B) | 200

第14話、 邂逅記録D―学校に潜む影―(A) | 207

デモンズRe 用語まとめ

【作中用語】

・睦葉島

本作の舞台となっている人工島

政府が新しい才能の発掘、将来有望な人材の育成を目的に作った場所であり人口の4割が学生

島内に住んでいる人たちは身分証明用端末端末として“ガンデフォン”が支給される

島の管理は中央にそびえる“セントラルタワー”で行われており島の代表も基本は本島にいるが月に一回定期監査で来訪する

・ガンデフォン

島の住人に支給されているスマートフォン型の連絡用端末であり身分証明書

住民全員に支給されるものであり基本カラーは固定だがカラーカスタマイズは可能であり自分の好みのカラーにカスタムが出来る

警察や警備会社にはガンモードに切り替え可能な端末が与えられているが、上層部の許可が無ければガンモードへの切り替えは出来ず。個人や私怨での使用は出来ない

―ガンデフォン カラーリング公開―

・基本 ↓メインカラー：シアン 差し色：マゼンタ

門原ヒロト ↓メインカラー：レッド 差し色：シルバー

狩谷ミサキ ↓メインカラー：シルバー 差し色：ブロンズ

八乙女リサ ↓メインカラー：レイトレモン 差し色：ホワイト

鳥野フタバ ↓メインカラー：ブラック 差し色：ターコイズグ

リーン

【各組織】

・狩谷相談所

現在は狩谷ミサキが所長を務める民間企業

猫探しく悪魔関係の仕事まで請け負う仕事は千差万別であるのだ

が、知名度があまりない上基本的に依頼人を待つ受け身体制であるため、定期的にお財布事情が火の車になることがあるため、定期的に仕事を回してくれるよう多方面に頭を下げることも多い

現在の従業員は 所長“狩谷ミサキ”、正社員“門原ヒロト”、アルバイト“八乙女リサ”の3名

・高梨警備保障

睦葉島に存在する大手の警備会社

表向きには警備員の斡旋や島内で開催されるイベントの警備を行っている会社だが、それとは別に今回のように規模の大きい企業を対象とした悪魔関係の事件からクライアントを警備する仕事もしている

・D・D・C・U

正式名称は“Devil・Disaster・Countermeasure・Unit”

高梨警備保障の悪魔災害対策部隊であり、主に企業から依頼された悪魔関連事件の解決や警備を請け負っている。依頼の際には5人1組の部隊に割り振られ、事件解決を行う

狩谷マナミは烏野フタバの前任者であり、数年前はD・D・C・Uの隊長を務めていた

・クリスパール

悪魔と契約出来る魔のアイテム“バイスタンプ”を売買している組織

組織の規模がどれほどのものなのか、構成メンバーはどうなっているのかは現状謎に満ちており唯一判明しているのは門原ヒロトの前に現れたスタンプバイヤーの少女“國本キミ”のみ。しかし彼女が特殊なスタンプを使用し怪人態になっていたことから全員が特殊なスタンプを持っていることが予測されている

【その他用語】

・バイスタンプ

悪魔との契約の際に使用するスタンプ型のツール

前回紹介した量産型スタンプとは異なり、一つ一つに生物の遺伝子が組み込まれている。このスタンプを用いて悪魔と契約した場合スタンプに内蔵されている生物に適応した悪魔が生まれる

バイスタンプには二種類あり、上述している通常のスタンプの他に生物のレリーフが彫られていない量産型スタンプも存在する

バイスタンプの値段は量産型スタンプが1つ5000円前後、レリーフありのスタンプでも生物の種類によるが100000〜200000円ほどで購入できる

また、通常のバイスタンプ以外にもクリスパーの構成員が使用する特殊なスタンプも存在している

・契約

人間がバイスタンプを用いて悪魔と行う行為

基本的には契約者が自身の差し出すものを指定し、スタンプを押印することで契約は完了となる。対価として差し出すものは契約者の自由

そして悪魔は契約者の望みを叶える為に動き、契約者のとの契約が満了となった時、悪魔に対して対価は支払われる

【仮面ライダー関連】

・仮面ライダー

睦葉島で悪魔と戦っていると噂されている仮面の戦士

仮面を被りバイクを駆る、怪物に襲われた時にどこからともなく現れ怪物を倒して去っていく……という都市伝説

・デモンズドライバー

門原ヒロトが仮面ライダーデモンズへの変身に使っているベルト型のアイテム

元は狩谷ミサキの姉である狩谷マナミが製作したドライバーであり、内部には悪魔“ベイル”が封じられている

このベルトとスタンプの力を使用することで門原ヒロトは仮面ライダーとなり、その強大な力を扱う事が出来る……のだが、仮契約状態の彼ではその力を十分に扱う事は出来ていない

現在のデモンズドライバーはシステム中枢に存在する悪魔“ベイル”にデモンズの力の殆どが依存している状態になっており、それを改善するために狩谷ミサキは人体強化エンジン「O・V・E・R」及び、もう一台のデモンズドライバーを開発している

・人体強化エンジン—O^{オー}・V・E^{バー}・R^ー

狩谷ミサキが開発しているもう一台のデモンズドライバーの中枢を担うシステム

人間の体内に存在する悪魔の持つエネルギーを引き出し、人間の身体能力を飛躍的に高めることが出来る

この人体強化エンジンを使用することで現在ヒロト使用しているデモンズドライバーよりも高い汎用性と安全性を手に入れることが出来る

【悪魔関連】

・悪魔

人間の心に潜む存在、本来ならば表に出てくることはないがスタンプを使用することで外の世界へと解き放たれる

人間は悪魔に対して代価を支払い、悪魔は人間の契約内容を完遂する為に行動する

支払う代価は人それぞれであり、軽いモノから重いモノまで千差万別

後に悪魔の正体が人間の内側に潜み負の感情を喰らうエネルギー生命体である事が明かされた

— 詳細 —

悪魔は人間が物心つく際に切り離した不要な感情から生まれる存在であり、本来であれば人の内面で負の感情を食糧にしているだけの存在

本来であれば固有の形を持たない存在であるがバイスタンプを用いて契約することでスタンプを通路として現実世界に出現する。この際にスタンプの中に存在する“生物の遺伝子”と“スタンプのエネルギー”を使い肉体を形成している為、スタンプに彫られているレリーフを模した化け物の姿で現れる。

また、現実世界に現れた悪魔は大抵の場合スタンプの中に内包されている膨大なエネルギーに耐え切れず凶暴化した状態になる

また、この世界の二重人格やイマジナリーフレンドは自身の中に内包された悪魔が宿主を守るため表層に現れた存在だという説もある

— 悪魔の種類 —

・ S型悪魔

Soldier Type、兵士型と呼称されている悪魔

量産型スタンプを使用することで召喚され、量産型スタンプが通常のスタンプよりも安価で手に入ることから最も出現することの多い

生物の遺伝子を取り込んでいないある種素体ともいえる存在

見た目は原作におけるギフジュニア

・ C型悪魔

Creature Type、生物型と呼称されている悪魔

生物のレリーフが彫られているスタンプを使用することで召喚される、通常のスタンプも量産型に比べれば少々高価だがそれでも十分民間人が買う事の出来る金額で販売されている

S型とは異なり、生物の遺伝子を取り込んで召喚されるため、悪魔の見た目にレリーフの生物の特徴が反映される

見た目は原作におけるフェーズドレッドマン

・ I型悪魔

Irregular Type、異常型と呼称されている悪魔

基本的にはS型、C型悪魔と更に契約をする、もしくは特殊な要因が原因で自身が悪魔と融合し、出現する。S型やC型と比べてもその力は強力であるのに加え早急に対処しなければ契約者は消滅し、悪魔が更に進化する可能性もある

見た目は原作におけるギフテリアン、しかしC型の悪魔がI型に変化する場合はギフテリアン+レリーフの生物の特徴が追加される

・I2型悪魔

Irregular Type IIと呼称されているI型とか異なる状態になった悪魔

基本的なI型は上位契約によって人間が主導権を握った状態で悪魔と一体化するが、I2型の場合は悪魔にスタンプを押印し契約することで悪魔が主導権を握った状態になることが殆どであるのに加え、通常のI型同様に早急に対処しなければ契約者が消滅する可能性がある。ある他、悪魔に主導権が握られている状態であるため分離できないまま倒すと契約者がどうなるのかわからないというリスクも存在する
見た目は原作におけるフェーズ2デッドマン

・クリスパー

スタンプ売買組織“クリスパー”のメンバーが特殊なスタンプを用いて変身する怪人態の総称。通常の悪魔と比較しても単体の能力がかなり強力でありその力は仮面ライダーを凌駕する。また國本キミの変身したバタフライクリスパーのように、鱗粉などをはじめとする様々な能力を持っているのではないかと予測されている

・ベイル

デモンズドライバーの中に存在する悪魔

本来の宿主は別におり、門原ヒロトは仮面ライダーの力で悪魔から人間を守るため、ベイルは本来の宿主を見つけ出すため、互いの目的の為に現在は仮契約の状態にあり。その対価としてベイルは“デモンズの力”の力を貸し、ヒロトは“1か月につき1年分の寿命”を支

払っている

門原ヒロト契約する以前は、狩谷ミサキの姉である狩谷マナミと共に仮面ライダーベイルとして戦っていたことが明かされた

・クロハ

烏野フタバの悪魔

悪魔としてはかなり特殊であり、幼い頃から烏野フタバの中のもう一つの人格として存在しており、高校時代から悪魔と戦っているヒロト達から見ても存在としてはかなり特殊

宿主であるフタバはクロハの事をずっと一緒にいてくれた友人だ
と思っっている

1クール目

第1話、事件記録D―仮・面・戦・士―(A)

新たな才能の発掘という目的のために建造された人工島”睦葉島

“
そこに住む多くの人が日々自分の才能を活性化させるために日々努力をしている……なんてことは一切なく、日本本島と変わらない日常が続いている

そんな睦葉島には悪魔を崇拜する組織が裏で暗躍しており、その組織と戦う戦士を――

「――島の住人は仮面ライダーと呼んだ……だつてよ」

「そんな事どうでもいいから仕事しなよ、ただでさえ今月は収入少ないんだから」

「世知辛いこと言わないでくれ……」

ここは狩谷相談所、住人のちよつとした相談事を受けたりする簡単に言うとも何でも屋よりの探偵事務所みたいなどころ。元々はこの現所長である”狩谷ミサキ”の姉さんが作った事務所だったんだけど二、三年前に消息不明になつちまったから現在は妹の現所長が運営しているらしい

「世知辛いつて言うかそもそも依頼取りに言つてないよね？ 宣伝とかしないと来るものも来ないし入ってくるものも入つてこないよね？」

「……ごもつともです」

と、そんな感じで書類整理で若干イラついている所長のお小言爆撃を喰らっている俺はこの相談所の唯一の職員でもある”門原ヒロト”、薄給で日々極貧生活を送っている……という訳ではなくしっかりと給料貰つて仕事が殆ど入らないこの事務所で殆どお茶入れ係と化している探偵役

「というかさつきから何やってるの？ 遊んでるの？」

「いや、どうせならウチの現状を記したボイスメモリーでも作ろうか

と——」

「そんなことする暇あつたら普通に仕事取りに行くなりホームページ作るなりしてよ」

駄目だ、ウチの所長様は書類整理で心が荒み切ってる、というか心なしか目の下に隈が出来てる気がする……これは更に祟られる前に外に出て——などと思つたところで事務所のチャイムが鳴る

「——お客さん?」

「みたいだな」

一瞬の静寂……そして動き出す、とっ散らかった机を片す方向に

「門原君机早く片付けて!」

「片付けるからちよつと待ってつてつか何で普段から片付けておかないかなあ!」

「仕方ないでしょ最近書類仕事で手いっぱいだったんだから! とうかビン用のゴミ箱どれだっけ!」

「えーつと左から燃えるゴミ、燃えないゴミ、ペットボトル、缶、ビンだから一番右!」

「了解! それとコレお願い!」

「ちよ、この書類何処に戻せば——」

ガチャリ、と事務所の扉が開き制服姿の少女と俺たちの視線が交差する……両手に書類を抱えた俺と栄養ドリンクのビンをゴミ箱に捨てていた所長、言葉を失った俺たち三人の耳に届くのは現在進行形でゴミ箱に捨てられているビン同士のぶつかる音だけだった

「間違えました」

「まつてまつて!!」

それから数分の間答の後、どうにか制服姿の少女——今回の依頼人と話を聞けることになったのだが

「……」

すつごい疑いの目で見られている

「えーつと、それで今回はウチにどういう——」

「……ここつて、怪物関係の依頼も請け負ってくれるつて聞いたんで

すけど」

“怪物関係”という言葉聞いた俺たち二人は姿勢を正し、改めて依頼人の話を聞く

「はい、怪物関係の依頼と言うのは？」

「……実は——」

依頼人の名前は“八乙女リサ”、依頼内容は自分を狙う怪物をどうにかして欲しい……簡単に言えばそんな感じだ

「八乙女さん、制服って事は学生だよな……どっかしらで誰かの恨み買ったりしたか？」

「……わからないです」

「わからない……か」

一般の学生が怪物関係に手を出せるほどの恨みを買う事なんてあるのだろうか

「確かに、何処で恨みを買っててもおかしくないかもね」

「どういうことだ？」

「これ見て」

狩谷からガンデフォンの画面を見せられると、そこに映っていたのは雑誌の表紙を堂々と飾っている八乙女さんの姿

「八乙女さんって、芸能人？」

「芸能人って言うか、モデルです」

「モデル……」

依頼人はモデル……確かにそう考えると何処で恨みを買ってるかわからないな、どんな規模で仕事してるのかわからないが不特定多数の人間と触れ合う仕事柄明確に誰と特定するのは難しいか

「現状だと俺たちが出来るのは限られそうだな……とりあえず出来る範囲での身辺警護と情報収集か」

「そうだね、とりあえず身辺警護は私が……って言いたいところだけど怪物関係なら門原くんの方が適任か……八乙女さんは、大丈夫？」

「えっと……はい、大丈夫です」

そう言うわけで身辺警護は俺が行うことになったので八乙女さんと一緒に事務所を出る……最初にやる事は予定確認か

「八乙女さん、これからの予定は？」

「えっと、雑誌の撮影が一件と取材が二件ですね」

「時間は？」

「ある程度余裕はあります」

「それなら、歩きながらで良いからちよつと話を聞かせてくれ。具体的に言うところ初めて怪物に襲われた時の事を」

「はい」

そこから仕事現場に向かうまで、俺は八乙女さんから初めて怪物に襲われた時の話を聞いた

彼女が初めて怪物に襲われたのは雑誌の撮影で遅くなってしまった時らしい、早めに家……というか寮に帰るために近道をしたらその道中で襲われた

「成る程、因みにその近道を知ってる人って八乙女さん以外に居るか？」

「同じ学校の人なら大体は、バイトで遅くなった時とかに使ってる子もかなりいるので」

「多少絞れても学校関係者か、生徒総数どれ位かわかるか？」

「大体200人くらいですかね」

「それって生徒教師合わせてか？」

「いえ、生徒だけで」

生徒だけでも容疑者200人は洒落にならないな、だが――

「相手が尻尾を見せるの待つかないか」

「何か言いました」

「いや、別に……それより時間、大丈夫か？」

「あつ、いけない」

どうにも話し込みすぎたららしい俺たちは、早足で現場まで向かった

第1話、事件記録D―仮・面・戦・士―(B)

「いいよ、理沙ちゃん。それじゃあ次のポーズもお願い！」
「はいっ！」

八乙女さんの身辺警護で撮影所まで付いてきて撮影風景を見学させてもらっている訳だが……成る程、これが雑誌撮影か。初めて見たあの……」

「はい？ えっと……」

などを見学していると見知らぬ男性から声をかけられる。ぱっと見た感じ頼りなさげな雰囲気だがこの場においてスーツということは……芸能関係の人間か

「あつ、私は八乙女リサのマネージャーをしている草尾と申します」

「草尾さん、俺……私は門原ヒロトって言います」

「はあ……あの、それで門原さんはウチの八乙女とはどういう関係なんですか？」

どういう関係……か、一応依頼人とそれを受けた探偵……何でも屋？ って感じだけど一体全体なんて説明するか、怪物に襲われるって依頼を受けて怪物から護衛するためにいますって言ったところで変な目で見られるってのは予想できる

「えっと……」

「あつ、すみません。私は八乙女さんから依頼を受けて身辺警護をする事になったんです」

「身辺警護？」

流石に怪物の所は隠しておくか

「はい、どうにもストーリーカー被害を受けてるらしくて」

「そ、そうなんですか!？」

「え、ええ。でもあまり大事にしたいくないみたいで……とりあえず今の所はご内密にお願いします」

「わ、わかりました」

適当に誤魔化している間に八乙女さんの撮影が終わったらしくこつちに向かってきた

「マネージャー、それに門原さん」

「ああ、リサちゃん。お疲れ様」

「お疲れ」

マネージャーから手渡された水を一口飲み終えたタイミングでこちらに話しかけてきた

「そういえば、私の仕事中に何か変わった事とかありましたか？」

「いや……ぱっと見特に変わったことはなかったな」

特に視線を感じるとか不審な動きをしている奴もいなかった……というか撮影所内に不審者が入ってくるとも思えないしここで気にする必要はない気もする

それから特に変な事もなく、八乙女さんの仕事が終わわり学生寮まで送っていく。明るかった繁華街から離れていくにつれ人通りや明かりが少なくなっていく

「八乙女さん、なんか変な視線とか感じるか？」

「いえ、今は特に……それにいつも変な影を見るのはもっと先なので」
もっと先って事は襲ってくるとしたら人通りのなくなつた所って訳か

「いつも帰るのは大体この時間になるのか？」

「はい、大体この時間に」

「それを知ってる人は？」

「ルームメイトとか友達には話しています」

となると学園関係者の中でもかなり人数が絞れる……が、彼女の友達彼女を狙っていると言うのは流石に酷な話だな。などと考えていると彼女の足が止まる

「どうした？」

「……………」

足を止めた彼女の顔色は少し悪く、小さく震えている。そんな彼女はゆっくりと目の前に指をさすとそこに立っていたのは一人の人間。ぱっと見の背格好から男だと仮定しながら八乙女さんの前に立つ

そのまま目の前にいる男から視線を外さずにいると男はゆっくり

とこちらに歩いてきた。背格好から男だと考えていたがそれは当たりだったようで光に照らされハッキリと見えたのは八乙女さんと同じ校章の制服、そして手に持っているスタンプ

「動物レリーフはなしって事は量産型か……」

「えっ?」

「いや、何でもない。それよりあの男子生徒知り合いか?」

「えっと、同じクラスの牧瀬君……だったと思います」

「思う?」

「実際に話したことはないので……顔見知りってだけです」

てことは正体はアイツが彼女を狙ってるストーカーってことか

「八乙女くん、一人で危ないじゃないか」

「え?」

「何か危ない目に遭ってるんだろう? 僕が助けてあげよう」

少しずつこっちに近づいてくるが、顔がハッキリ見えるようになって気付いたが。あの牧瀬とか言う生徒正気じゃない

「逃げるぞ」

「えっ?」

「今のあいつは正気じゃない、だから……ここは逃げる」

「待てえッ!!」

八乙女さんの手を取って急いでその場から離れると怒号と共に牧瀬もこちらを追ってくる、流石に今回は急を要するので目くらましの為にガンデフォンをガンモードに変えて地面を乱射して土煙を発生させる

「うおっ!」

「隠れるぞ」

「は、はい」

木の影に隠れていると男子生徒は自分たちがまっすぐ行ったのだと考えてその場から離れて行った……やっぱスタンプの所為で判断力も下がってるみたいだな

「あの……どういう事なんですか?」

「あーっと、そうだな。とりあえず八乙女さんを狙ってる怪物のこと

とか色々話しておくか——と言いたいところだけど少しだけ待って
てくれ。あの男子生徒と少し話つけてくる」

「えっ？　でも危ないんじゃない？」

「大丈夫、慣れてっから」

こつちに戻ってきた男子生徒の前に出ると、ビツクリするほどの敵
意を向けてくる……初対面の人間にここまで敵意を向けられるのは
スタンプの影響もあるんだろうが一周回って凄い、尊敬すら覚えるほ
どだ

「お前え……ッ！」

「それしか言えねえの……ってそりやそうか」

まともに話すのは無理だっと思っていたが何とか案の定って
感じだな

「お前、彼女の何なんだっ！」

「彼女の何って……彼女は俺の依頼人だよ。それ以上でもそれ以下で
もない」

「嘘だっ！　お前も彼女の子と狙ってるんだろ！」

「狙ってねえよ」

目の前にいる奴は八乙女さんに好意でも持つてたんだろうな、そん
であのスタンプ使っちゃまったからその好意が暴走してるとって感じか
「彼女に纏わりつく悪い虫は……僕が消してやるっ！」

目の前にいる今回の犯人（仮）がスタンプを押印すると契約書のよ
うなものが周囲に散らばり一体の怪人の姿を形作る、目の前に現れた
怪人は俺らの所属している界限で“S型悪魔”って呼ばれてるタイ
プ。因みにS型のSは兵^{Soldier}隊のSである

「やれー！」

『……ッ！』

S型は手に持ったナイフみたいな武器でこつちに攻撃を仕掛けて
くるが早々簡単には当たらない。伊達にこつちも色んな怪人被害に
対処してない訳じゃないからな

「そっつー！」

S型の隙について手に持ったガンデフォンで射撃をする、S型は他

に比べても耐久力は低い……つまるところこっち側の切り札を使わなくても十分対処可能であるとされている

「……とは言え、やっぱ倒しきるのはスタンプ使わないと駄目か」

正直あんまりスタンプ関連を依頼人の前で使いたくないんだが流石に仕方ないか、S型の攻撃を避けつつ懐からスタンプを取り出して天蓋のボタンを押してガンデフォンに背面を押し当てる

『スパイダー』

『CHARGE』

独特な電子音声と共にガンデフォンの銃口にエネルギーがチャージされていく。その後すぐにギリギリまでS型に接近する、振りかぶられるナイフを避けてS型の腹に銃口を押し当てると、そのまま引き金を引く

『スパイダー CHARGE BLAST!』

その電子音声と共に放たれた紫色のエネルギー弾がS型悪魔を貫く、すぐにS型から距離を取ると貫かれた箇所から火花が飛び散り爆散する。男子生徒は悪魔が爆散してすぐに意識を失って倒れ、それを見たからか物陰に隠れていた八乙女さんが出てくる

「門原さんっ!」

「八乙女さん、もうだいじょう——」

「上ッ!」

大丈夫、と言おうとしたところで八乙女さんからそう言われ上を見ると、俺に向かって何かが降ってくる。それを見た上でギリギリ反応することのできた俺は急いでその場から退くと地面が陥没して土煙を巻き起こした

『ウ、ウウウ……』

現れたのはゴリラのような見た目の怪物、二連戦つてのも流石にキツいがまだ何とかなる。それよりもキツいのは目の前の怪物はさっきのS型じゃないって事だ

「門原さん、大丈夫ですかっ!」

「あ、ああ……大丈夫。それよりもちよつとマズいことになった」

「さつきから何なんですか、牧瀬君の持ってたスタンプとか目の前の

怪物とか」

「詳しい話は事務所に戻ってから——」

八乙女さんにそう言っている間に、ゴリラの悪魔はこちららに向かって火球を放ってきた

「この場は仕方なしかっ！」

『スパイダー』

火球がこちららに着弾する直前、俺は懐からベルトを取り出しそこにスタンプを押印する

【Decide up】

悪魔の放った火球は二人に着弾し、爆発する。それで二人を始末したと思いきその場から去ろうとした瞬間、悪魔の身体に衝撃が走りそのまま近くにあった木に身体を叩きつけられた

『ウ、ウ、ッ!?』

「間一髪、ギリギリセーフ」

悪魔が目を向けた先には、八乙女リサを庇うように立つ一人の戦士がいた。人間の筋肉を思わせるアンダースーツに、蜘蛛の巣を思わせる鎧と仮面を身に纏った戦士

「えっ——?」

「八乙女さん、さっきも言ったけど説明は後。今はこの場を片付ける」
背後で困惑する八乙女リサに対しそう言った戦士は、青の複眼を輝かせゴリラの悪魔に接敵する。戦士から繰り出される技を防ごうと腕をクロスした悪魔だったが戦士は蹴り上げ無理矢理ガードを崩すと思いきり踏み込み、八極拳の貼山靠てんざんこうのような技で悪魔にダメージを与える

『……ッ!!』

ここで悪魔の取った行動は逃走、眼前にいる未知の敵に対して初撃の不意打ちで失敗しその後手も足も出ずにダメージを受け続ける。このままでは自身を滅ぼされると本能で感じその場から逃げだした

「逃げたか……」

悪魔が逃げたのを見送った俺はベルトを腰から外す、身に纏っていた鎧やアンダースーツは紫の粒子となって霧散する

「あの……」

「今日の所はとりあえず寮まで送る……何度も言ってるけど詳しい話はまた明日事務所で」

その後、少し不安そうな表情の八乙女さんを見送った俺はガンデフォンを取り出してとある人に連絡を取る

「もしもし、はい。実がスタンプ使った生徒の保護を……ええ、場所は——」

さっきの男子生徒の事を話し終えた俺は、事務所への帰り道を進んでいく

第2話、事件記録D―契・約・遂・行―(A)

今から一週間前、怪物に襲われた私、八乙女リサは狩谷相談所という場所に相談に行き、そこで事務所の所長“狩谷ミサキ”さんと職員“門原ヒロト”さんの二人と出会った

怪物関係の事件に手慣れているらしい二人は私の依頼を受けてくれた後、門原さんが私の護衛をしてくれるという話になった、簡単な身辺警護だって本人も言ってたし私一人じゃないから大丈夫だと安心しきってたけど、結局怪物には襲われるし門原さんはよくわからないクモ男みたいなのが変わっちゃうし……もう何が何だかわからない

「はあー……」

「リサちゃん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよやよいちゃん。気にしないで」

余りにも現実離れた光景を目撃してすんごい疲れてベッドに突っ伏している私に話しかけてきたのはルームメイトで幼馴染の“星川 やよい”ちゃん。小学校からの付き合いで今まで高校二年になるまでの付き合いで、一番の親友だと思ってる

「本当に大丈夫？ 何かあったらいつでも相談に乗るからね」

「うん、ありがとおやよいちゃん」

「……あつ、そうだ。クッキー食べる？」

「クッキー？」

「うん、今日少しお出かけした帰りに見つけたんだ。本土からの出店販売だって」

「食べるー！」

私たちが学生つてのもあるけど案外長期休みとかじゃないと実家……というか本土に戻る時間が取れないし、店舗限定のお菓子買うために半日かけて本土に戻ってる子もいるけど、仕事はじめてからそう言う時間も取れなくなっちゃった

まあ、そんなことは置いておいて。私はやよいちゃんの用意してくれたクッキーと紅茶をひとまず楽しむことにする

翌日の狩谷相談所、状況説明……というか彼女が何に狙われていて俺たちが何をしているのかという説明のため八乙女さんには事務所までやって来てもらった

そして、いま事務所の中にいるのは俺と所長、八乙女さんの三人で現在はもう一人の到着を待っているところだ

「あの、それで今はどういう状況なんですか？」

「人を待つてるところだよ、これから話す内容に関しては昨日のことも踏まえないといけないから」

「昨日のことって……もしかして牧瀬君のことですか？」

「そうだよ。はい、お茶どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

八乙女さんにお茶を出してから程なくして、事務所の扉が開いて一人の男が入ってきた。少しくたびれたスーツを着て目の下に隈を作ったその男性は手に持った紙袋を俺たちに見せながら気軽に声をかけてきた

「お待たせ、時間通り……だよね？」

「はい、時間通りです。それよりその手提げ袋は……」

「ちよつとしたお土産」

そう言いながら紙袋の中から取り出されたのは一冊のファイル、多分今回の事件に関係する事かスタンプを使ったあの男子生徒の調書あたりだと思う

「それよりも、まずは自己紹介した方がいいんじゃないですか？ 八乙女さんも困惑してる」

「ああつと、そうだった。君が今回の依頼人かい？」

「は、はいっ！ 八乙女リサです」

「八乙女さんね、俺は新見真人にいみまさと。この島にある警察署で巡査をしてる」

「刑事さん……ですか」

八乙女さんに挨拶をした男性、改め新見真人。自己紹介の通りこの島にある警察署の巡査で主にスタンプ関連……というよりも悪魔犯

罪の取り締まりや注意喚起を行っている部署に所属してる刑事さん。そして俺たちの協力者でもあるありがたーい人

「とりあえず込み入った自己紹介は後！ 早速話を始めちゃいませう」

所長の言葉を聞いた新見刑事も席に座ると、部屋の中が暗転し天井からスクリーンが降り、プリンターで情報が表示される。そこに映っていたのは昨日の生徒に関する基本情報と使ったスタンプの情報

「やっぱ使ってたスタンプは粗悪な量産品か」

「ヒロト君はそれわかってた感じか、昨日戦ったんだっけ？」

「まあ戦った直感ですけど。普通の量産品ならもうちよつと契約者にも言葉通じるんで」

「……でも、昨日はS型以外に確かC型も出たんだよね」

「ああ、ゴリラみたいなやつ……正直S型よりC型の方が本命って感じだったな」

俺らが話している間、近くにいた八乙女さんはなんのこっちゃやって顔してるからそろそろそつちにも会話振った方がいいか

「八乙女さんは、一応聞けど話付いてこれてる？」

「全くついてこれてません」

「だよね……」

正直かなり面倒な分類だったりするので完全に把握するのは無理だけど色々端折って話を進めていくとするか、この事務所のこととか俺の……仮面ライダーのこととか話さないといけないだろうし

「とりあえず、所長に新見刑事、八乙女さんに基本情報の共有だけしといて良いですか？」

「俺は構わないよ、今日は非番だし」

「私も基本的には暇だからね……まあ書類仕事はあるけど」

新見刑事の方は問題なし、所長に関してはいつものことながら放っておいて……最初は悪魔のことから初めていくか

「それじゃ八乙女さん、まずは昨日襲ってきた怪物——悪魔について説明するぞ」

——悪魔、人間がバイスタンプって言うスタンプを使って契約する

ことで現れる怪物。基本的にはS型って言う量産型ばかり出てきて極稀にC型って言うS型の上級個体が出てくることがある、実はそれ以外にももう一種類あるんだけどそっちは基本的に出てくることがないから今は省く

「じゃあ、牧瀬君が契約したのがS型で私たちに襲い掛かってきたゴリラみたいのがC型って事ですか？」

「そう言うこと」

「それなら、スタンプって言うのは何なんですか？」

「ああ、スタンプって言うのは……これだ」

俺が取り出して机の上に置いたのは昨日変身に使ったスパイダーバイスタンプ。一応彼女にはスタンプに触らないように言ってから説明を始める

——スタンプ、正式名称はバイスタンプで悪魔と契約するためのアイテム。八乙女さんの前に置かれてるのがそのスタンプ。契約者がスタンプを自分の身体に押印することで契約完了。悪魔は自分の契約を遂行するために行動する……因みに昨日の男子学生が使ってたスタンプは目の前にあるスタンプの量産型、そのコピー品って言うかなり面倒な立ち位置のやつ

「とりあえずここままでどんな感じ？」

「正直頭がこんがらがってます」

そりやそうだ、時間も丁度いい感じだな、俺は何やら話し込んでいる所長と新見刑事の方に声をかける

「所長、新見刑事。時間もいい感じなんで八乙女さん連れて少し出てきます」

「少して……ああ、了解」

新見刑事はなんのこっちゃって感じだが所長の方は何処に行くのかを理解したらしく了承してくれた

「それじゃあ、少し息抜きにでも行こうか」

「えっ？…はい」

困惑している八乙女さんを連れて、事務所の外に向かった

第2話、事件記録D―契・約・遂・行―(B)

「えっと、それで何処に行くんですか？」

「腹ごなし、ばあつと話して頭使っただろうからな」

「あれ、リサちゃん？」

そう言つて俺が八乙女さんが昼食に手をつけようとしたところで俺たちのほうに近づいてきた少女が声をかけてくる。私服姿だが声をかけてきたつて事は八乙女さんの知り合いか何かなんだろう

「やよいちゃん!? 今の時間つて学校じゃなかったっけ？」

「実は少し用があつて学校休んでたの」

「そうなんだ、大丈夫？ 体調悪いとか？」

「ううん、そう言うんじゃないから大丈夫……それより、そつちの人は？」

何やら友人と話し込んでいるとこつちに矛先が向いた、そりやそうだよな

「俺は門原ヒロト、八乙女さんとは仕事関係で打ち合わせをね」

「星川やよいです。それより仕事関係の打ち合わせ……ですか？」

「そう、まあ打ち合わせは丁度終わったところなんだけどね」

そうは言っているものの疑われるのは当たり前だろうし案の定疑われてるのは何となくわかる

「あの、それなら私がご一緒しても大丈夫ですよね？」

「私は大丈夫だけど……」

「俺も問題なし、ちよつと聞きたいこともあつたしね」

「訊きたいこと……ですか？」

「そう、良かったらで良いんだけど二人の通つてる学校のこととか教えて貰えないかなつて」

「学校のことつて、どうしてですか？」

やっぱりそこは突っ込まれるよな、けどその返答は用意済み

「実は従妹がこつちの学校気になつてるみたいだね。とりあえず情報収集をと思つて、こういうのは学校説明会以外に実際に通つてる生徒の意見つて参考になつたりもするから」

「門原さんって、従妹居たんですね」

「居るよ、歳は君らの二つ下くらいかな」

因みにこれは嘘ではない、実際に本島で生活をしている従妹は居る。ただしこっちの学校が気になっているという話は嘘だ、従妹は既に志望校を決めてるし滅多なことがない限りこっちの学校に入学してくることはないだろう……が、今回はそれを使わせてもらう

そこから二人に聞かせて貰ったのは、彼女たちの通っている学校は特に進学校とかではなく校則もそこまでキツくないということ、それ以外にもこの学校は全寮制の学校であり在学中の居住費は基本的に学校側が負担するらしい

「学校側が居住費負担してくれるって、卒業したら返済って形になるの？」

「いえ、私たちが返す分は居住費の1割くらいだそうです」

どうやらその学校はよっぽど儲かってるらしい、とりあえずどういう学校なのかはわかったがから次は生徒の事だな。正直学校そのものことよりも重要なのはこっちだ、もしかしたら契約者に関する情報が手に入るかも知れない

「それじゃあ、学校生活とはどうなの？ トラブルとか多いかどうかは知りたいんだけど」

「トラブルとかは特にないよね」

「そうだね、これと言って何か大きなことが起こるってのはないと思いますよ」

まあそりゃそうか、これで大きなトラブルが何度も起こってるようだったらそれはもう立派な不良高校だ

「成る程ね、そういえば二人は大丈夫なのか？ 特に八乙女さんは色々仕事してるみたいだし、変な勧誘とかなかった？」

「特にないよね」

「……私も、特には」

「やよいちゃん？」

「どうかした？」

「い、いえ、別に……あつ、そろそろ時間が、私はこれで」

「えっ、ちよつとやよいちゃん!？」

急に立ち上がった彼女はカバンを持って出て行ってしまった。少し雑にカバンを取った所為かわからないが少しでも中から猿のようなレリーフが見えたような気がした

「まさか」

「門原さん、どうかしたんですか？」

「八乙女さん……彼女が向かいそうな場所、教えてくれないか？」

「いいですけど、どうして——」

「悪魔の契約者が、彼女かも知れない」

俺がそう言うと八乙女さんは何を言われたのか理解できないと言ったように目を丸くした後、目を鋭くする

「門原さん、その冗談は流石の私でも怒りますよ」

「冗談かどうか判断する為に彼女に確認を取りたいんだ」

「ありません、やよいちゃんは私の一番の親友です、なのに私を襲わせるなんて——」

「八乙女さん。人の心つてのちよつとしたことで歪んじゃうもんなんだ。たとえどれだけ相手を思っている、その思いが転じてしまう場合もある」

「ふざけないでくださいッ！ 第一どうしてやよいちゃんが契約者だなんて——」

「彼女のカバンの中に、スタンプ二刻まれてる生物のレリーフが見えた」

俺がそう言うと、八乙女さんは軽く息を吐いて席を立ちあがった

「依頼の件はもういいです、途中終了ですけど報酬もお支払いします

……それじゃあ」

「彼女を探すのか？」

「はい、仮にやよいちゃんが悪魔の契約者だったとしても。私が説得します」

それだけ言い残すと、八乙女さんも店を出て行ってしまった

門原さんに言われたことがどうしても受け入れることのできない私は、一人でやよいちゃんの事を探す

「そんな訳ない……だってやよいちゃんは私の——」

やよいちゃんは私の一番の親友。小学校の頃からずっと一緒に、私の事を引つ張って来てくれた、応援してくれた……だから……だからっ！

「やよいちゃんっ！」

私がやってきたのはこの島に始めてきた時、やよいちゃんと一緒にやってきた高台公園。今までも何かに悩んだ時とかはここに来てたから。絶対にここだって思った

「リサ……ちゃん」

少し身体をずらしてこちらに視線を向けてきたやよいちゃんの中には少しだけ涙が溜まつてる

「リサちゃん……私……」

「どうしたの、やよいちゃん？」

「ごめんね、私……私……」

やよいちゃんの様子が少しおかしい、よく見ると少し目の焦点が合っていないようにも思える……それに、やよいちゃんがこつちに振り返ってわかったけど、手に持つてるのって——

「——スタ……ンプ」

「ごめんね、私……最初は少し怪我すればって……でも、どんどん心の中が真っ黒になっていって……」

「そんな事どうでもいいっ！ それは使ったらダメなものなの、だからそれを捨てて！ いつもみたい二人で——」

「無理なのッ！ もう……無理なんだよ……」

無理？ ……無理って、どうして……そんな私の疑問に答えるように、やよいちゃんは話始める

「もう私は戻れない、どれだけ捨てようと思っても……駄目だった、だから……」

『コング』

やよいちゃんは、その言葉のすぐ後自分の身体にスタンプを押してしまった。スタンプを押された場所から契約用紙のようなものが溢れ出し人の形を形作ってる。それが終わると紙の塊はこの前襲われたゴリラの化け物になった

「リサちゃん、逃げてッ！」

やよいちゃんの言葉と裏腹に化け物は私に向かって襲い掛かる……寸前で投げつけられたゴミ箱に当たって少し怯んだ

「大丈夫か、八乙女さん」

そう言いながら私に手を差し伸べてきたのは、ついさっき別れたばかりの門原さんだった

八乙女さんと別れた後、なんとか向かった場所を探して辿り着いたのは高台公園。場所的にはここに住んでる学生の憩いの場……というか悩みが来ると必ず来る場所だからか案の定二人もここに居た

「門原……さん」

眼前に居るのはゴリラのC型悪魔と契約者である星川さん。あの様子から見ると自分で契約した悪魔の制御が出来なくなってるんだろう。悪魔と契約をしても尚自分の中にある正気を失わずにいる。それどころか後悔の念すら見える辺り本当に今の状況を悔いてるんだろう

「八乙女さん、今の彼女はスタンプの呪縛に囚われる状態にある」

「スタンプの呪縛？」

「そう、今の彼女は正気を保った状態でスタンプに魅了されてる状態だ」

「助けられるんですか？」

「ああ、つっても契約者自体は悪魔を倒せば助けられる……ただ、その後どうするかは彼女次第だ」

悪魔と契約した者は悪魔を倒した後でもスタンプの呪縛から逃れられない場合がある、そして呪縛から逃れられなかった人が一生苦しむなんて事例も少なくない

「八乙女さん、君は彼女を支えていけるか？ 親友として、彼女を赦せるか？」

「当たり前です！ やよいちゃんは私の親友、この程度で赦さないって言うほど私の心は狭くありません！」

「それなら、俺と契約だ」

「契約？」

「ああ、俺はあの悪魔を必ず倒す……だからその対価として、君は何があっても彼女の友であることを貫いてくれ」

契約書も只の口約束、それでも俺にとってこれは重要な事であり、一種の決意表明でもある

「わかりました、何があってもやよいちゃんは私の友達……いや、親友です！」

「契約成立だ」

立ち上がったゴリラのC型悪魔を真つすぐ見据え軽く息を吐き、ベルトを腰に巻くと、取り出したスタンプのボタンを押す

『スパイダー』

【Deal】

「変身！」

自分の心を切り替える言葉と共に、構えていたスタンプをベルトの液晶へと押印する

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

小さな蜘蛛によって紡がれた糸が俺の身体を覆い、インナースーツとアーマーを形作られ、仮面ライダーデモンズ スパイダーゲノムへの変身を完了させた

「さあ、契約執行の時間だ」

目の前に現れた俺を脅威だと認識した悪魔はこちらに向かって拳を振りかぶり攻撃を仕掛けてくる。普通の人間なら避けることが難しい速さの攻撃でも変身した状態の俺なら問題なく避けられる。少し後ろに下がって攻撃を避け、反動でがら空きになった悪魔の腹に拳を叩き込む

『ウッ!!?』

「もう一発!」

続け様に蹴りを悪魔の脇腹に打ち込んで少し後退させる、やっぱり攻撃力が高い代わりにそこまで防御力は並みかそれより少しだけ高い程度……デモンズでも十分攻撃は通る

『ウッウッウッウッ——ウッアッアッ!!』

「まずっ!」

手をクロスさせて防御態勢を取った瞬間、衝撃波で思いつきり後方まで飛ばされる

「衝撃波……ダメージはそんなでもないけど近づきづらいのはちよつと厄介だな」

それに、あんま乱発させたら他の所にまで被害が行くのは避けたい……とりあえずさっさと決めることに決めた俺はデモンズ……というかスパイダーゲノムの能力で糸を使って上空まで移動する

上空に移動した俺に対して悪魔はもう一発衝撃波を放ってくるがここなら特にこっちは大丈夫、そのままスタンプをベルトの液晶に押しベルトの両サイドを押し込む

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

エネルギーが右足に集中していくのを感じながらライダーキックの体勢に移行する。悪魔に向かって降下していく中で右足に纏われたエネルギーが肥大化し、悪魔に直撃すると同時にそのエネルギーを悪魔の体内に流し込んだ。火花を散らしはじめた悪魔にもう一発蹴りを入れ離れた瞬間悪魔は爆散し、赤い粒子をまき散らしながら消滅した

「はあー……一件落着」

「やよいちゃんっ！」

意識を失った星川さんを抱きかかえて一息ついていた俺の所にやってきた

「大丈夫、気を失ってるだけ」

「そうですか……良かった」

それから、新見さんや病院に連絡を取ってもらって色々と事後処理に追われ一日を終えた

そしてこれからはその後のちよつとした話、意識を取り戻した星川さんからバイヤーについての情報を聞いたけれど本人はそこら辺の記憶は曖昧らしい

「結局、スタンプを売ってた組織への情報はなしか」

「そうだねえ、結局どの契約者からも詳しいバイヤーの情報はなかったもんね」

「公的機関も手に入れた情報はなし……得るものはなし、か」

「そうでもないよ、門原くん」

そう言う所長がこつちに差し出しての一枚の紙、受け取ってみてみるとそれは――

「履歴書？」

「うん、採用することにしたんだ。なので、ウチの事務所に新メンバーを迎えることにしました！ という訳でどうぞ！」

「は、はい！ 失礼します！」

事務所の扉が開き入ってきたのは、この前の依頼人である八乙女さんだった

「八乙女さん、仕事があるんじゃない……」

「一時休業させて貰いました。今は誰がやよいちゃんにスタンプを渡したのか……知りたいんです」

今まで一般人だった彼女がこつち側の事情に踏み込む、正直こつちとしては勘弁してもらった方がいい気もするが所長が決めた以上こつちが何を言えない

「わかった、これからよろしく……と言っても基本的にウチの事務所は暇だから何をするでもないけどね」

「はい！ よろしくお願いしますっ！」

今日、この事件をきっかけに一人事務所のメンバーが増えて、狩谷相談所は二人から三人になった

第3話、 警備記録Ⅰ―新たな依頼は警備依頼―(A)

狩谷相談所のメンバーが二人から三人になってから数週間の時が流れた。最初の頃は慣れない仕事に四苦八苦していた八乙女も今や事務所の一員となったわけだが……

「先輩、最近仕事来ませんね」

「悪魔関係の仕事がそんなバンバン舞い込んで来たら困る以外の何物でもないけどな」

「それはそうですね、やっぱり仕事がないのにバイト代貰うのは少し気が引けるといいますか……」

「それなら、そんな二人に仕事だよ」

ソファアに座っていた俺と八乙女の二人に書類を渡してきたのはウチの所長こと狩谷ミサキ。彼女から渡された書類に目を通すとそこに書いてあったのはこの島にあるスタジアムの警備の仕事。

「アイドルがやるライブの警備依頼？ 随分と物珍しい依頼だな」

「ウチに舞い込んできた新しい仕事、大手と共同で」

「大手とも共同って、ウチって主に悪魔関係の依頼をメインで受けますよね。確かにそれ以外でも色々受けてたりしてますけど……流石に今回は――」

「八乙女、大手ってのはウチと同業だからな」

「同業って、悪魔関係の仕事って事ですか？」

「ああ、ウチも国から認可されて事務所やってるが、アッチは本格的に国からの支援あり、もっと言うところとは非にならないレベルの解決実績ありで活動してる老舗だな」

「へえ……って事は、その老舗とウチ以外にも色々あるんですか？」

「悪魔関係の仕事を請け負ってる会社って」

そこら辺はどうなんだろうな、俺個人だところとアッチ以外で明確に悪魔関係の依頼を請け負っている会社は聞いたことないな

「どうなんだろうな、俺は聞いた事ねえけど」

「確かなかったはずだよ、一応企業とか大きめの依頼はアツチ、個人とか言い方悪いけど比較的小さめな依頼はコツチって割り振られてるわけだし」

まあウチは一応民間でやってるからな、国からは許可下りててもあくまで運営やらなにやらはコツチで回さないといけないわけだし、それでいまいちネームバリューが無いというかなんというか、まあ普通の事務所よりも多少収入が言い分かなり恵まれてる部類ではあると思うんだが……つと、それを考えるより今は仕事か

「それで所長、仕事の詳細に関してはあるつちで聞くのか？」

「うん、本格的な打ち合わせは向こう側の本社でやるんだって、それまでに二人は資料に目を通して置いて」

「了解」

「わかりました」

所長はそれだけ言うとう自分の席に座って目の前のパソコンを操作し始めた。俺は俺でとりあえずどういう依頼を受けたのかを確認するため資料に目を通す

「今回の依頼主は……ウインドミルレーベル？ 音楽会社か」

「超大手ですねえ、ストーリーミング配信が当たり前になった昨今でもCDの売上はかなり良いみたいです」

「ほーん……ってそれはひとまず置いておいて、成功報酬の額も随分とデカいな」

「それだけ成功させたいんだと思います、なんせ今回のライブをやる人が人ですから」

「どういうこった？」

俺は芸能人に疎いというか、テレビは見たりするがあんまり芸能人とかには興味ないからな。正直今回の芸能人……というか歌手か、それもあんま記憶にない。そこら辺は俺より八乙女の方が知ってるだろうし聞いておくか

「そんなにな有名なのか、この“エスアイエヌエー S I | N A”って歌手。ってかこれ何て読むんだ？ シナ？」

「それでシーナって読むんですよ。にしてももしかして先輩あんまり

テレビとか見ない人ですか？」

「見ないっていうか、基本的にラジオ感覚でかけっぱなしにしてると言うか……」

「動画とかも見ないんですか？」

「料理系の奴か、配信者の切り抜きくらいしか見ないな。あとはカードゲームのプレイ動画」

「なんとも言えないラインナップですね……それじゃあ、この八乙女リサ。S I — N A について少しだけ説明させていただきます」

そこから八乙女によって S I — N A という歌手についての説明が始まった

—— S I — N A は、ウインドミルレーベルが絶賛売り出し中のアーティストです。CDとストリーミングの両方で楽曲配信をするともに本人も月に1回のペースでライブ配信などでの活動を続けてきたことで人気急上昇中の人気アーティストになったという訳です

「成る程な、じゃあ今が人気絶頂の真っ最中って訳か。そりゃあ会社側も気合い入れて警備依頼をしてくるわけだ」

それでどうして悪魔関係を主に請け負ってるこつちにまで仕事が回ってきたのか、それに関しては書かれてないからわからないが。悪魔を警戒する程に気合いを入れているのか……それとも明確に悪魔が絡んでくると依頼主側が確信を持っているのか

「どつちにしろ、打ち合わせで詳細を聞くまでは何とも言えないか……それで所長、打ち合わせってのはいつあるんだ？」

「明日の午後からアッチの会社で、だから早めに向こうに着くようにしてね」

「了解」

「あのー、私その会社の場所わからないんですけど」

「俺はバイクで向かう予定だったし、アレなら乗っていくか？」

「……そうですね、そうします」

そして時は進み翌日、八乙女を拾った俺はバイクで向こうの会社――高梨警備保障の前までやってきた。因みにアルバイトの八乙女だが現在は連休中だから問題はない、一足先に到着していた所長と合流した俺たちが会社のエントランスで待っているとスーツ姿の女性がやって来る

「お待たせしました、高梨警備保障悪魔災害対策部隊”D・D・C・U”隊長の烏野フタバです」

「狩谷相談所所長の狩谷ミサキです……お久しぶりです、フタバ先輩」
「そうね、久しぶりミサキさん。それに門原くんも」

「はい、お久しぶりですフタバ先輩」

俺たちの前にやってきた女性は烏野フタバ。俺と狩谷の高校時代の先輩で高校時代に彼女が悪魔関係の事件に巻き込まれてからの付き合いだ。それ以降は何かとサポート等をしてくれていて卒業後はここに就職、今の地位まで上り詰めたらしい

フタバ先輩は俺たちに目を向けた後に横で固まっていた八乙女に目を向けた

「貴方が八乙女リサさん？ ミサキさんから話は聞いてるわ、よろしくね」

「は、はい！ よろしくお願いしますー！」

「ふふ、そんなに畏まらなくてもいいのよ……それじゃあ、行きましようか」

フタバ先輩に案内されてエレベーターに乗った俺たちが向かったのは地下5階、そこにあるらしいオフィスから更に進んで会議室までやってくるとそこには既にメンバーは揃っていた

「連れてきたわ……それじゃあ全員揃った事ですし、会議を始めましょうか」

俺たちも席に着席したのを確認した先輩はスクリーンとプロジェクトターを使って今回の依頼についての話を始める

「まず初めに、今回の依頼は我々D・D・C・Uと狩谷相談所の共同で行います……狩谷さん、前に」

「はい、狩谷相談所所長の狩谷ミサキです。今回はよろしくお願い致します」

挨拶もそこそこに早速会議を始める

「それでは、今回の仕事について再度説明をします——」

——今回の仕事はウインドミルレーベルから請け負った依頼になります。内容はライブ会場内の警備及び人気アーティストS I | N Aの警護

その言葉と共に始まったのは今回の仕事での割り振り、具体的に言うと規模が大きく人海戦術をすることの出来るD・D・C・Uが部隊分けをした後ライブ会場の内外を警備、更にその中から選抜した人員十俺たち狩谷相談所のメンバーでS I | N Aの警護に当たるとの事らしい

「部隊分け及び護衛に当たる人員の選別は既に行っています。相談所の皆さんはミーティング後の警護スケジュールについて確認があるので会議室に残ってください」

「わかりました」

流石に元生徒会長をやっていただけあってフタバ先輩の進行力には目を見張るものがある、その後は特に目立った質問等もなく選抜メンバーの発表に移る

「それでは選抜メンバーの発表に移ります、こちらに人員を割き過ぎると逆に目立ってしまうと社長から通達があり、狩谷相談所の三人を含めた五人で警備に当たります。メンバーは八代と青柳の二名。残りの隊員は部隊表を元に各自ミーティングを行い、当日に備えて訓練を行ってください。以上でミーティングは——」

「ちよつと待ってください隊長！」

選抜メンバーの発表が終了し、ミーティングを終わろうとしていたフタバ先輩に対して一人の隊員が食ってかかる

「納得いきません、どうして自分が警護の人員から外されているのですか！」

「鏑木、個人の納得ではなく仕事が成功する可能性の中で最も高い人員の選出を行ったのです、それに今回の人員配置は既に社長にも許可は得ています」

「しかし！ 今回は特に重要な依頼です、我々だけならともかく民間の素人を組み込むくらいなら私が――」

鏑木と呼ばれた隊員がその言葉を続けようとしたタイミングでフタバ先輩は資料を丸めてスクリーンに思い切り叩きつける。唐突な行動に怯んだのか鏑木隊員も言葉を詰まらせる

「彼女たちの実績は私と社長が保証済みです……それでも不満があるというのなら、鏑木、貴方は今回の仕事に参加する必要はありません」
「っ！――すみませんでした」

かなりの圧をかけていた先輩に怯んだのか鏑木隊員は納得いかないと云った様子を見せつつ謝罪の言葉を口にして席に座り直す。その後の会議は特に不平不満が出ることなく終了し、選抜された人員二人とフタバ先輩、そして俺たち三人で情報確認を終了しD・D・C・Uのオフィスを後にする

その途中、フタバ先輩は俺たちに謝罪の言葉を口にする

「先ほどは申し訳ありません。ウチの隊員が不謹慎なことを」

「仕方ないですよ、実際民間なのは事実ですから。ね、門原くん」

「まあ、そうですね。あくまで俺たちが解決してるのは個人の依頼が大半で企業の依頼は受ける方が稀ですからね」

「……でも、なーんか嫌な感じでしたね。あの鏑木って人」

「彼はこれまでの仕事実績は部隊の中でも群を抜いています、自分の持っている力を過信している節がありますから……本当に不快な思いをさせてしまい申し訳ありません」

「あーいえいえ、私も本当に大丈夫ですから！」

そんな会話をしたのち、フタバ先輩に見送られながら俺たちは高梨警備保障の本社を後にする……それから数日の時が経ちライブの前日、俺たちは会場へとやってきた

第3話、 警備記録Ⅰ―新たな依頼は警備依頼―(B)

ライブの開催前日、俺たち狩谷相談所一同はライブの行われるスタジアムまでやってきた。ここに来た理由はシンプルで現在リハーサルと各機材のチェックを行っているS I I N Aへの挨拶及び、警戒すべきポイントの洗い出しだ、もちろんここに来ているのは俺たちだけではなくD・D・C・Uもやってきている

「門原くん、八乙女さん。私はフタバ先輩たちと打ち合わせに行ってくるから。S I I N Aさんへの挨拶はよろしくね」

「了解、任された」

「私たちにお任せくださいー!」

という訳で、所長と別れた俺たちはS I I N Aさんのいるらしい楽屋まで向かっているとその途中で地図の挟まったバインダーを持っている鎬木隊員とすれ違う。彼は俺たちの方を少し見た後に苦々しい顔をしながら軽く頭を下げてその場からそそくさといなくなる

「なーんか嫌な感じですね」

「あつちはあつちで色々複雑な感情持つてんだろ、触らぬ神に祟りなしだ」

「まるであの人に触ったら祟られるみたいな言いぐさですね」

「こちとら伊達に悪魔関係の事件に関わってないからな、面倒そうな人間は結構見てわかる」

まあ面倒そうな人間が全員スタンプを持って悪魔を生み出す加害者になるとは限らないのがこの手の事件の怖い所ではあるんだよな。案外自分らに協力してくれる人が悪魔生み出した張本人だったり、全く面識の無い奴が悪魔を生み出してる場合だってある

「そう言う所が、この事件の面倒な所ではあるんだよな」

「そうなんですねぇ……あつ、控室ここじゃないですか?」

「みたいだな」

色々と話している間に控室の前まで辿り着いていたらしい、二人そろって扉の前で服装を整えてから控室の扉をノックする……因みにだが現在の服装は俺と八乙女揃ってカジュアルスーツ、動きやすい素

材で作られているので少々手荒な動きをした所で問題はない

などと言っていると扉の向こう側からどうぞと返事が返ってきたから、扉を開けて中に入る。中にいたのはいかにもマネージャーと言った風の男性とヘッドホンをしている少女

「高梨警備保障からの依頼で共同警備を行うことになりました、狩谷相談所の門原です」

「八乙女です」

「S I — N A のマネージャーをしている倉橋陽平です」

倉橋陽平と名乗った S I — N A のマネージャーから名刺を受け取る

「いまヘッドホンをしている彼女が S I — N A です。ほら S I — N A、挨拶をして」

「……………よろしく」

思った以上に表情の変化が乏しい少女の口から挨拶の言葉が紡がれたわけだが……………何というか、感情表現が苦手なのか？

「すいません、彼女あまり人付き合いが得意な性格ではなくて……………それで早速警備の話なんですが」

「ああ、はい。今日は万が一のことを考えて我々が警護につきます、明日のライブ本番は我々二人に加えてもう三人、追加で警護が——」

「警護なんていらんよ」

「え？？」

「警護なんていらん、別に誰に狙われてる訳でもないし……………みんなちよつとしたことでもいいいち神経質になり過ぎ」

ちよつとしたことってのはどういう意味だ？　もしかしてこつちに何かしら隠している事でもあるのか？

「ちよつとしたことって、何かあったんですか？」

「いや、それは——」

「少し痛い手紙が届いただけで、みんな何をピリピリしてるんだか」

何かを隠そうとするようにしていたのをぶっ壊すように S I — N A は言葉が続ける。流石にこれは追及しておくか

「痛い手紙って、どういうことですか？」

「……実はS I — N A宛てにとある手紙が届いたんです」

そう言つて倉橋マネージャーの取り出した手紙を見せて貰うとそこには週刊誌や新聞の文字を切り抜いて作ったであろう脅迫文のようなものが書いてあった

——○月×日のライブにて、貴方を私だけの歌姫にする。抵抗は無駄だ、私には悪魔の加護が付いている。不要な犠牲を出したくないのなら大人しく私だけの歌姫になる準備をしておけ

「これは……何というか……」

「確かに、傍から見たら冗談としか思えない内容だな」

「でしょ？」

気が付くとS I — N Aはヘッドホンを外して俺たちの方に視線を向けていた。相変わらずその表情が変わる様子はないが……とりあえず今はそれを気にしている場合じゃないか、とりあえずこの手紙についてを所長たちに共有したいほうが良いか

「成る程、それでマネージャーさんは悪魔関係の仕事を請け負つてる高梨警備保障に依頼を？」

「私……というよりはウチの事務所と今回のライブのスポンサーであるレーベル会社ですね」

成る程、とりあえずこの手紙の内容が真実だと受け取ったならD・

D・C・U——高梨警備保障に依頼を出すのは当たり前か

「この手紙、お借りしてもいいですか？」

「はい、構いません」

「ありがとうございます、八乙女。今から俺はこの手紙を所長たちに見せに行つてくるから二人の事任せた」

「あつ、はい。任せました」

手紙を持つてその場を後にしようとする扉に手をかけた所で、S I — N Aからジツと視線を向けられていることに気付いた

「あの、何か？」

「……別に」

何処か釈然としない感覚を覚えつつ、とりあえず駐車場に止めてあ

るワゴンに足を向けつつ連絡をする

『門原くん、どうかしたの?』

「マネージャーさんから犯人っぽい奴から送られてきた手紙を借りた、一応そつちに持つていこうと思うんだが」

『犯人からの手紙か……あつ、ちよつと先輩に代わるね』

「ああ、わかった」

『鳥野です、門原くん聞こえていますか?』

「はい、聞こえています」

『良かった、手紙の件ですが、こちらまで持つてくる必要はありません。写真を送ってくだされれば解析作業自体は出来ますから』

「わかりました、それなら今から写真撮って送ります」

『はい、お願いします』

先輩はそう言うてからすぐに電話を切る。とりあえず近くにあるベンチかどこかで写真を撮って先輩たちに送るか。丁度近くにベンチもあるし

「よし、とりあえずこれで写真は撮ったし後は送って……って、なんだ?」

俺の今いる場所の近く、具体的に言うスタジオムの外に一人の男が立ってるのを見つける。見るからに一般人と言った風の男で特に一見すると特に違和感はないが俺はどうしてもあの男に対する違和感を拭いきれなかった

「とりあえず写真を送っておいて……一応話を聞きに——」

話を聞きに行こうとした瞬間、自分が来た方から悲鳴が聞こえてきた。何かあったのは目で見なくてもわかった急いで引き返すとS I—NAを連れてこつちに走ってくるマネージャーと八乙女の姿が見えた

「八乙女! マネージャーさん! 何があつたんですか!?!」

「先輩、出ました! 化け物です化物!」

八乙女の指をさしている方に目を向けると、そつちから歩いてきたのは鳥男と言った風の異形の怪物。間違いない……悪魔だ

「八乙女は二人を連れて逃げろ、そこで所長たちに連絡」

「わ、わかりました!」

「門原さんはどうするんですか!?!」

マネージャーの言葉に対して俺はガンデフォンをガンモードにして鳥男——イーグルデッドマンに銃口を向ける

「俺はとりあえずここであの化け物を食い止めます。だからマネージャーさんも安全な所に——」

言葉が続けようとしたところでイーグルデッドマンは翼をははためかせながらこちらに向かってくる。俺はガンモードの引き金を引いて目の前にいる敵の翼を狙って撃つが回避される——が、それでも僅かながらの隙は出来た

「早く逃げてー!」

「は、はいっ」

マネージャーとS I I N Aを連れてその場を離れる。イーグルデッドマンは彼女たちを追おうとするが流石にここを通すわけにはいかない——

「——それに、これでようやく人目がなくなった」

『デモンズドライバー』

懐から出したベルトを腰に巻く、このベルトがどういったものなのかを本能で気付いたらしいイーグルデッドマンは警戒態勢を取った後、こちらに向けて大きく翼を振るう

それをローリングで回避しながらスタンプを取り出して天蓋のボタンを押す

『スパイダー』

『Deal』

スタンプをドライバー上部のスタンプ台に一度押印したのち、全速力で相手に向かって突撃をしながら液晶にもう一度スタンプを押印する

「変身!」

『Decide up』

『仮面ライダーデモンズ』

蜘蛛の糸が身体に巻き付きながら赤と紫の光を放ち、俺の身体はデ

モンズへと変身する。そのまま突撃した俺はイーグルデッドマンの胴体に抱き着くとそのまま少しでもこの場所から離れられるように後退させる

『——ッ！』

「ぐう——ッ!?!」

イーグルデッドマンは抱きついていた俺を引きはがすと足の爪を使ってこつちに攻撃を仕掛けてくる。流石に振りほどかれてからすぐに回避行動をすることは出来ずそのまま胴体が切り裂かれ火花が散る

「この野郎ッ！」

吹き飛ばされそうになった体勢を手から蜘蛛の人を発射し壁や天井に貼りつかせて無理矢理蹴りの体勢に移行する……けど流石に当たらない。使われてるスタンプはデッドマン悪魔の見た目で判断できるから今回の敵は鳥つてのは分かる

「流石に、すばしっこいか……ならッ！」

取り出したガンモードのガンデフォンを使って敵に対して銃撃をする。当たるとは思っていないが少しは行動の制限になる筈だ、少し後方に下がり銃撃を避けたのを確認した俺は蜘蛛の糸をイーグルデッドマンの身体に巻き付かせて思い切りこちらに引っ張る

【Charge】

真っ直ぐこちらに向かってくる敵を確実に倒すため、ベルトの液晶にスタンプを押印し右足にエネルギーをチャージし両サイドを押し込む

【デモンズフィニッシュ】

眼前まで来たイーグルデッドマンにエネルギーの集中した右足で蹴りを入れる——直前で敵は翼から羽根状の弾丸を放ち砂埃を起こした。それに構わず蹴りを入れるが手ごたえはなく、土煙が晴れたころ敵の姿はそこにいなかった

「——逃げたか」

変身を解いてベルトをしまうと、フタバ先輩をはじめとしたD・D・C・Uの隊員たちがこちらに走ってきた。その中には八乙女や

S I | N A 達の姿もある

「無事ですか？」

「ええ、何とかしようと思ったんですけど逃げられてしまいました。申し訳ない」

「警護対象を守れただけでも十分です。今回襲ってきた敵に対してはこちらも調査を進めていきますので……門原くん、八乙女さん、襲ってきた怪物の特徴を知るためにお話しを訊きたいのですが」

「俺は大丈夫です」

「わ、私も大丈夫です！」

「わかりました。それではついてきてください」

フタバ先輩はS I | N A 達の警護を一時的に他の隊員に任せて、俺たちを駐車場に止めてある指揮官車両に改造したワゴンまで向かう

第4話、 警備記録Ⅰ―門原ヒロトの流儀―(A)

D. D. C. Uの所有するワゴン車の内部、ちよつとした電子機器や武器ラックなどが装備されている車内に俺たちは入る

「早速で悪いんだけど、門原くんたちの見た悪魔の特徴とかどんな状況で襲われたのか教えて貰える?」

「わかりました……って言っても、俺は悲鳴を聞いてから向かったんで襲われた直後の状況とかは八乙女の方から話して貰えると助かる」
「わかりました、えーつと――」

そう言う俺が控室から出て行ったあとの話についてを話し始めた

「――門原先輩が手紙の事で席を外してから少しして、S I I N Aさんも飲み物買いに行くとかで席を外したんです。最初はマネージャーさんが買いに行ってくるって言ったんですけど自分で行くの一点張りで」

「もしかしてお前、それで警護対象一人にしちまったのか?」
「いやいや、まだ新入りですけど一人にするのはマズいと思ったんで何とか同行させて貰いましたよ」

流石に警護の仕事が初って言っても最低限そこら辺は分かったか……それにしても、今回みたいになつた時の為に最低限の対処術くらいは教えといたほうが良いかも知れないな。今回は比較的早く到着出来たけど毎回そうとは限らないわけだし

「八乙女さん、話を続けて」

「わかりました。それでS I I N Aさんに同行して飲み物買いに向かつて、その帰り急にあの怪物が襲ってきたんです」

「それじゃあ、マネージャーさんはどうして一緒に?」

「怪物に襲われた時に悲鳴を上げちゃって、それで駆けつけてきたんだと思います」

「成る程」

悪魔に遭遇した時の悲鳴を聞いて駆け付けた、となるとあのマネージャーが契約者の可能性も浮上してきた。現に一番S I I N Aに近

くに居て今回の事件の事も知っている、それに加えて俺が離席してS
I—N Aと八乙女が二人になったタイミングで起こった悪魔の襲撃
……正直最有力候補になった気がする

「……それで門原くん、戦った悪魔どんな感じだった」

「アイツか、見た感じは鳥、戦った感じはすばしっこい感じだった」
「鳥って、どんな感じの鳥だった？」

「カラスとかじゃなくて、ワシとかの猛禽類って感じだったな」

俊敏だったのもどっちかって言うとかラスとかよりもワシとかタ
カとかの攻撃の仕方だった。脚部の爪を使った斬撃に加えて羽根を
投げナイフのように使った攻撃

「正直、こっちも手札を増やすか短期決戦で一気に決着をつける……
どっちかで決めに行きたいところではある」

「となると、変に私たちが増援を送らない方がいいみたいだね」

「ですね、相手が猛禽類だとすると変にターゲットを増やすと無駄に
犠牲が出る可能性がありますから」

正直、こっちが短期決着で一気に決めるのが良いんだろうけど、悪
魔の契約者がわからない以上まずは契約者を見つけるのを最優先事
項にせざる得ない

「とりあえず、まずは契約者探しをした方がいいかもね……八乙女さ
ん、飲み物を買に行く間に誰かとすれ違ったりしなかった？」

「スタッフの人とはよくすれ違いましたけど、特に怪しい人は居な
かったと思います」

「門原くんは？」

怪しい奴って言っても、俺が控室を出てから八乙女たちの所に戻る
まで特に怪しい奴は——

「——そう言えば、手紙の事を電話し終わった後、こっちをジッと見て
る人が居ましたね」

「ジッと見てる人。その人の特徴とかはわかる？」

「見た感じは普通にこっちを眺めてる男って感じだったんですけど。
妙に違和感があるというか、雰囲気が違うというか」

もしかしたらアイツが今回の悪魔の契約者かも知れない……のだ

が、流石に何処の誰とも知れない人間を特定するのは無理がある、写真の一枚でも撮っておけば何とかなったんだがそれも無いから単純作業だけだったら砂場から一粒の砂を探すようなもんだらう

「当日は契約者も会場に来る可能性が高いので、やっぱり本格的に探すのは当日になりますかね」

「そうですね、当日は身体検査もしてから入るように連絡をしておきます……もし観客の中にいたら一度その場は素通りさせて複数の部隊で監視、人の少なくなった所で確保という流れで行きましょう」

「わかりました」

「……あのー、私はどうすれば？」

「八乙女さんは今までと同様にS I I—N Aさんの警護に当たってください」

とりあえず聴取をまとめたフタバ先輩は俺たちを解放する……そう言えば、さつきから所長の姿が見えない

「フタバ先輩、所長ってどこに行っただんですか？」

「狩谷さんですか？ 彼女なら少しやる事があると言って事務所に戻りました」

フタバ先輩がそう言ってくるが、今回の依頼でわざわざ事務所に帰ってまでやる事があるとは思えないのだが……何をやってるんだか

そこからは、特に目立ったことも問題も発生することなくリハーサルは終了、当日に備えて解散という流れになり俺も帰る

「ねえ」

「……どうかしました？」

振り向いた先にいたのは今回の警護対象ことS I I—N A、控室の反応を見る限りあまり自分から話しかけてくるタイプには見えなかったのだが、伝え忘れてもあつたか

「少し話せる？」

時間を見ると時刻は18時少し前、まだ日も高いし問題はなさそうだがマネージャーやらなにやらは大丈夫なのか

「俺は問題ないですけど、送りの車とか待たせてるんじゃないですか？」

「それなら大丈夫、許可は取ってる」

「……なら問題ないか、良いですよ」

「そう、それじゃあ付いてきて」

SIINAの後に続いて向かったのは会場の近くにあるファミリーレストラン。人気アーティストと言えど変装をしているから問題ないのかどうかは分からないが、まあ騒ぎにならないに越したことはないか

「それで、わざわざ呼び止めてまで一体——」

「丁寧に喋る必要はない、堅苦しいのは苦手」

「……ああそう、それじゃお言葉に甘えて。呼び止めてまでの話ってのは何なんだ？」

「別に大したことじゃない、ただ話がしたかっただけ」
「えっ？」

本当に話をするためだけに呼び出したのか、今回の仕事に関わる重要な云々ではなくて？ 普通に話がしたかっただけ？

「マジでどういうことだった、そこまで弾む話もないでしょ。音楽の事とかよくわからんし」

「話したいのはその事じゃない……少し荷物を借りる」

「は？ ちょ、それは——」

猫とかおもちやを必死に守る時の犬みたいなスピードで俺のカバンをひったくったSIINAさんはごそごそと俺のカバンを漁り始める

「あつた」

そう言って彼女が取り出したのはデモンズドライバーとスパイダーのスタンプ、仕事の時は基本的に懐とかに携帯しているがそれ以外の時はカバンに突っ込んでいる。だからか漁られた時は流石に焦らざる得なかったのだが……案の上バレた——

「ってちよつと待て、何で俺がカバンの中にそれをしまってることを知ってる?」

「昔助けられた時、カバンの中にこのベルトをしまってるの見た」

「昔……助けられた時?」

「どういう事だ、何かの事件で昔助けたことあったか? というか有名人からウチの事務所に直接来る依頼なんてのはないから有名人が来れば少なからず覚えてる筈なんだが……」

「すまん、思い出せん。俺が君を助けたってのはいつ頃の話だ?」

「4年前」

「4年前、って言う……俺が大体高校生の頃か、そのいつ頃とか覚えてるか?」

「春頃」

「4年前の春頃って言うと、確か俺が所長——狩谷と知り合ってたすぐだったよな。丁度そのころに狩谷が持ってたこのベルトとスタンプについて聞いてる所で悪魔に襲われて俺が変身したんだっけか。懐かしいな……って事はそのころに解決した問題の中にこの子がいたのか」

「駄目だ、全然覚えてねえや」

「あの時は色々と酷かったら仕方ない」

「……それで、もしかして俺がそのベルト持ってるか確かめる為に声かけたのか?」

「そう」

「あのなあ、正解だからよかったものをこれで外れてたら一体どうするつもりだったんだ」

「その時は普通に謝ってそこでさよなら」

「何というか、こうして話している間もずっと表情が変わらない辺りマジで何を考えているのかよくわからん」

「……まあアレだ、ファミレス来て何も頼まないのも店に迷惑だしなんか適当に食うか」

「うん、そうしよう」

SI—NAにはベルトとスタンプをしまった上で丁重に荷物を返

してもらい、適当に注文。料理が運ばれてくるまでの間に改めて二人で話を続ける

「そう言えば、わざわざ探して何するつもりだったんだよ」

「……別に何をするつもりもなかった。助けてくれてありがとうって、伝えたかった」

「ただ感謝を伝えるために、探してたのか？」

「うん、でも闇雲に探してたわけじゃない。仕事の片手間に探すくらいだった……けど、脅迫状が送られてきて会社とマネージャーが警備を頼んで……申し訳ないけどチャンスだとも思ってた」

動かない表情筋のわりに随分と義理堅い性格だったらしい目の前の少女に対して内心敬意を表しつつ、運ばれてきた食事を食べ始める

そこからは、あまり会話のなくなった食事を終えファミレスを出た俺たちは、会場に続く道を歩き始める

「流石に一人で帰らせる訳にはいかないし、送る」

「大丈夫、今日は会場に近いビジネスホテルを取ってるから」

そう言っただけで彼女が指さしたのは確かに会場からかなり近いところにある……というより、ここから徒歩10分前後と言った場所にあるホテルだった。確かにこれなら送らなくても問題はなさそうだが

「そう言うわけにはいかないな、いくら近くてもそこで襲われちゃこっちの信用が下がる」

「……そう」

それだけ言うとホテルに向けて歩き出した彼女の横に並ぶよう歩きながら、暇つぶしの雑談にでも興じる

「そう言えば、S I — N Aさんはどうして歌手として活動を？」

「これと言った理由があったわけじゃない、ただやってみたいと思っただけがコレだっただけ」

「それで何とかなっちゃうんだから、凄いいもんなだろうな、S I — N Aさんの歌は」

俺がそう言うと彼女は足を止めた、何かマズいことでも言ったか？

「しいな」

「えっ？ 急にどうした？」

「私の名前、S I — N Aじゃなくてシイナ、風待かざまちシイナ」

「ああ、そう……そんなじゃ風待さん、とりあえず歩いたほうが良いんじゃない——」

「しいな」

何だろこの感じ、とりあえず罅があかなくなる気がする……仕方なし

「そんなじゃシイナ、風邪ひくと大変だからホテルに急いだほうが良いんじゃないか？」

「ん」

どうやら当たりの選択をしたらしい。再び足を動かし始めたシイナと他愛の無い話をしながらホテルの前に到着すると、とりあえずここで俺の仕事は終了だ

「それじゃ、俺はこれで」

「待って」

「……まだ何か？」

「あの怪物……何とかなるよね？」

「確約は出来ないが、こつちも最善を尽くす」

「最善を尽くすなら、確約して欲しい……さっきはこれと言った理由がないって言ったけど。私の歌を聴きに来てくれた人たちの思い出を壊す事だけは、したくないから」

……成る程

「それじゃあシイナ。契約だ」

「契約？」

「ああ、契約内容は俺がああ悪魔を絶対に倒す。対価は、観客に最高の歌を届けること……どうだ？」

「わかった、貴方と契約する」

「それじゃ契約成立だ……明日、頑張れよ」

「うん」

ホテルの中に入っていく彼女の事を見送ると、俺は星の輝く空を見上げて気合いを入れ直した

第4話、 警備記録Ⅰ―門原ヒロトの流儀―（B）

翌日の早朝、具体的に言う朝の4時過ぎ、俺こと門原ヒロトは一人事務所で片手に持った資料と睨めっこをしていた

「明確にこれと言った犯人候補がない……一番怪しいのがマネージャーである事には間違いないんだが」

それもなんか違う気がするんだよな。あくまでも俺の直感でしかないんだがあの人は契約者ではない気がする

「ここで睨めっこしても仕方ないか」

時間的には微妙だがもしかしたら早めに入ってるスタッフさんがいるかも知れない。昨日変わったことが無かったかとか、そこら辺の事を聞くために会場に向かうか

事務所で見えていた資料をカバンに纏めた俺はバイクを走らせて会場の前までやってきた、事務所から会場までそこそこ時間がかかったこともあり現在時刻は朝の5時

「流石にまだ人は少なそうか」

だがまあ今の俺には都合がいい、昨日受け取っておいた関係者用のカードを首からかけて俺は裏口の方から会場の中に入る。やはり準備の最終確認が必要と言うこともあつてか僅かではあるがちらほらとスタッフの姿が見える

「あつ、すいません少し話を訊きたいんですけど大丈夫ですか?」

「はい? 何ですか?」

とりあえず近くに居たスタッフに話を聞く

「突然なんですけど、昨日不審な人とか変なモノを持つてる人見たりしてませんか」

「不審な人はともかく、変なモノって何ですか?」

「大体手のひらサイズのスタップなんですけど」

「スタップですか……申し訳ないですけど見てはないですね」

「そうですか、ありがとうございます」

俺は話を聞かせてくれたスタッフさんに軽く頭だけ下げると次のスタッフに話を聞きに行く……が特に目立った情報もなく時間だけが過ぎていく。話を聞くだけでかれこれ30分、特に目立った情報を得ることが出来ない

「流石に手詰まりか？」

「なーにが手詰まりなんですか、先輩？」

「ああ、契約者探し何だが流石に目立った情報が手に入らなくてな………つて、八乙女？」

「はい、八乙女リサです。おはようございます」

「随分と早いな」

「まあ、流石に遅刻するわけにはいかないと早く起きてここに来た次第です……早起きしすぎましたけど」

まあ開場が午後1時からだから確かにだいぶ早い……というよりも早すぎるってのが正直な所ではあるが折角早く来たんなら丁度いい。少し別のベクトルから調べて貰うことにする

「八乙女、突然で悪いんだがS I — N Aの熱狂的な信者とかSNSで探せたりするか？」

「多分できると思いますけど、それが何か関係あるんですか？」

「……あるとは言い切れないんだが、少し別ベクトルから物事を見るのも必要だと思ってるな」

「とりあえずやるだけやってみます」

「任せた、俺はもう少しだけ聞き込み行ってくる」

「了解です」

そう言った八乙女はガンデフォンを取り出して画面を操作し始めた。俺は俺でもう一度スタッフさん達に聞き込みをする……前に少しだけ思考をする

——S I — N Aに近づくならどのタイミングで襲い掛かる？

『ライブの前が一番妥当な所ではある……がそれなら昨日襲えばよかった』

——いや、昨日襲い掛かった時にはマネージャーや八乙女がいたのに加えて俺が邪魔をしたから失敗した

『そもそも、あんな脅迫状を送るような人間がああタイムングで襲うのか』

——手紙の感じからして、正体の特定を恐れているが自己顕示欲は強そうだ。それに執着心も並みじゃない気がする

『そんな奴が誰にも見られないタイムングで襲うか?』

——欲しいものを手に入れたくてたまらない奴が、それを手に入れる力があるのにわざわざ待つかと聞かれたら否だ

『我慢できなくなつて襲つた。そしてその上で彼女を監視できる場所は何処だ?』

——ステージ裏に常駐するスタッフ……そこから契約者を特定する条件は

「昨日の夜、シイナと同じホテルに泊まっていたスタッフであること……後はそこから片っ端に当たつていくしかないか」

とりあえず特定の方法は大雑把になつちまうがそれでもバカみたいな人数のスタッフを片っ端から当たるより多少の負担は減る。とりあえずその条件にも当てはまつてる最重要容疑者であるシイナのマネージャーさんに話を聞きに向かう

「昨日の一件で控室が使えなくなつたから新しい控室になつたんだっけか」

正直時間的に来てるかまだ微妙な所ではあるが——

「——つと、フタバ先輩からだ。どうかしたんですか?」

『門原くんですか? 今どこに居ます?』

「契約者のこと色々調べたかつたんで会場ですけど」

『そうですか、それなら少しお願いがあります……今から会場近くのビジネスホテルに行つてもらつていいですか?』

「……急ぎの用っぽいですね」

普段の口調とあんま変わった様子はないがそれでも声の感じからわりかし焦つてるのは分かる

『はい、鏑木がS I I N Aさんのマネージャーに対して独断で身柄拘束の手続きを行いました』

「身柄拘束つて、上が受理してなかつたら問題ないんじや……」

『ええ、受理していないので問題はありませんが独断専行をしている
鏑木は勝手に身柄拘束に動くと思います』

「それを止めればいいんですね、了解です」

勝手な行動をする奴は何処にでもいるが流石に今回ばかりは面倒な事態になったな。というか鏑木隊員いくら自分の力を過信しているからってそこまでやるのか……そうなるともう大馬鹿野郎としか言いようがないぞ

そんなことを考えながら全力疾走でビジネスホテルまで向かうと、しつかりと装備を固めた鏑木隊員がホテルの中に入ろうとしているところだった。悪魔関係はかなり面倒な部類に入るんだからあんなあからさまに動くなよ

「ちよつと待った!」

「ツ! お前……確かあの民間の……」

「門原ヒロトね……とりあえずちよつと待った」

「わざわざ邪魔をしに来たのか?」

息を整えつつ鏑木隊員の方を見るがこの男の目には見覚えがある……あの目は完全に自分が正しいと信じ切ったのに加えて自分より下を見下している目。相手にするときには少しだけ荒っぽくなることを覚悟した方がいいタイプの目だ

「俺は身柄拘束願いを提出した上でこの場に来ている。俺と事を構えるという事はD・D・C・Uと事を構えるのと同義だぞ」

「……さつきフタバ先輩——あんたらの隊長さんから連絡を受けましてね。身柄拘束願いは不受理、だからアンタがやろうとしているのは独断専行とクライアントに対する迷惑行為なんだってよ」

「馬鹿なツ! 状況証拠から見てもあのマネージャーが契約者なのは確定のはずだ!」

「確定じゃなくて疑惑の段階だよ、とりあえずこの場は一旦引いて、上司から話を聞いた方がいいと思うけど?」

とは言ったものの、目の前にいるのは完全に自分の行動が正しいと妄信している奴の目だ。強硬手段を取ることに決めた俺は悟られな

いようにガンデフォンをガンモードに変形させて内側にスパイダースタンプを構えておく

「……そう言うことか、お前達の会社は俺が手柄を立てるのが悔しいのだろう、民間企業ならば当然だな……だが悪いな、俺はこの仕事を完遂させて貰う」

そう言った鏑木隊員が俺から目を離した隙についてガンデフォンを構えてスタンプの天蓋を押す

『スパイダー』

『CHARGE』

「なっ!? 貴様それは——」

電子音声を聞いた鏑木隊員がこつちを向いて何かを言おうとするがもう遅い、スタンプを認証させた瞬間にこつちの装填は完了してゐる。あとは引き金を引けば

『スパイダー CHARGE BLAST!』

電子音声と共に放たれた蜘蛛の巣が鏑木隊員の身体に絡みつきその動きを止める。それから程なくして後ろに見慣れたマークのワゴンが見えた

「門原くん」

「フタバ先輩、お疲れ様です」

「隊長! そいつはスタンプを所持しています! 契約者です! 今すぐ拘束を!」

「……基本的には公表しないように厳命されていますが仕方ありませんね。鏑木、彼と彼の所属する狩谷相談所は限定的な武装の行使及びバイスタンプの使用が許可されています」

「そ、そんな! どうして民間企業にそんなことがッ!」

「詳細をここで話すのは契約違反です。鏑木、貴方の処分は追って伝えます……連れて行きなさい」

連れていかれる鏑木隊員の姿を見ていると、俺たちの元にS I I N Aのマネージャーが走ってきた

第4話、 警備記録Ⅰ―門原ヒロトの流儀―(C)

俺たちの元に走ってきたシイナのマネージャーの息はかなり乱れている、その様子を見ても何かあったというのは一目瞭然であった
「何かあったんですか？」

「し、シイナを……見ませんでしたか？」

「見てませんが、もしかして彼女の身に何か――」

「いないんです」

「いない？ いないってどういう事だ？」

「彼女が、部屋にいないんですッ！」

それは、俺に……いや、俺たちにとって衝撃的な事実だ。本番の当日になって彼女が部屋から姿を消した、昨日の彼女の発言を考えるに本番直前でいなくなるなんてことは考えられない気がするがそれはあくまでも俺にとつての主観に過ぎない

「……どこかで不安を紛らわしているのではないですか？」

「彼女はどちらかと言うと本番直前まで控室や部屋でじっとしているタイプなんです、急にどこかにいなくなるなんて……」

「とりあえず、そこら辺は置いて。マネージャーさん、彼女が何処に行つたのかとかわかりますか？」

とりあえず、今考えるべきはどうしていなくなつたかじゃなくて何処に行つてしまつたのかだと思う。誘拐されたのか、それとも自分の意思でいなくなったのかは彼女の事を見つければ理由は分かる。それよりも今怖いのは居なくなつた彼女の身に何かが起こる事だ

「流石に何処に行つたのかは私も」

「それじゃあ、本番前のルーティーンとかないんですか？」

「そう言われても……」

「門原くん、私たちは彼女の泊まっていた部屋を見に行きます」

「わかりました」

フタバ先輩はそう言うと同行していた隊員を二人連れてシイナの泊まっていた部屋まで向かった。何処でいなくなつたのかはわからないが正直部屋にも手がかりが無かつたら完全に手詰まりだ……と

どうかあんな脅迫状を出しておいて一番注目を集める場所で攫わなのは流石に我慢できなさすぎるだろ、今回の犯人

「あの」

「何ですか？」

「電話……なってますよ？」

マネージャーさんの言葉で俺も自分のガンデフォンがなっていることに気付いた。画面を確認すると八乙女からの電話

「八乙女か、どうした？」

『良かった、少し気になる事があつたんで電話したんですけど繋がりました』

「気になる事？」

『はい、SNS使ってSINAさんの熱狂的なファンを探してたんですけど少しだけ毛色の違うものがあつたんそれが気になって』

少しだけ毛色が違うって、どういうことだ……とりあえずこっちの目でも見ておいた方がいいか

「とりあえず、そのアカウントこっちでも確認したいから送ってもらっつていいか？」

『わかりました、すぐ送ります』

電話が切られた後、すぐに八乙女から話題に上がったアカウントが送られてくる……それを確認すると確かに少し違うというか、なんとどうかかなりポエミーな感じだ

「これは……何というか」

「随分と痛い感じのファンですね」

履歴を遡ってみると風景写真&ポエミーな言葉を綴った投稿にSINAに関連した投稿が交互にされている。その内容はどれも独創的と言うか……何とも言えない、傍から見たら完全に意味の分からない文章の羅列みたいになつてる

「……あれ、この場所」

「どうかしたんですか？」

「さっきの、少しだけ戻ってもらっつていいですか？」

「わかりました」

マネージャーさんの言葉に従って遡っていた投稿を少しだけ戻る

「ああ、そこです。ストップ」

「えっ、はい」

大体今から1か月ほど前の投稿で止めてくれと言ったマネージャーさんは自分のガンデフォンを取り出して何かを確認すると、俺の方に画面を見せてくる

「これ、見てください」

「アングル違うけど、同じっぽいですね」

マネージャーさんの見せてくれた画像と、このポエミー投稿者の上げている画像はアングルこそ違えど同じ場所……マネージャーさんの見せた場所を特定して写真を撮ったと言うことになるのだろう

「よく見るとこれ、何処もかしこも私たちの知ってる場所だ……ブログに載せてたり、公式サイトに上がっている場所ばかり」

その言葉を聞いた限り、只のポエミーな投稿の数々もビックリするくらい不気味なものに見えてくる。写真から場所を特定すること自体は出来るのだろうがそれを抜きしても同じ場所、同じアングルで写真を撮るという行為……それにこの不気味なポエム

それだけなら良いが、アカウントの持ち主はそれを絶えず行っている……ここまで来ると恋慕とかの領域ではなくもはや執着とかそこから辺に到達してるところ

「……絶えずこんな投稿をしてるって事は——」

最も新しいツイートに戻ると、昨日の夜、場所は俺はシイナと話したファミリーストラン……あの場所で話したことは公式サイトは愚かブログにすら載せる筈のない情報、それを突き止めていたって事は、あの近くに契約者はいた

——今回の一件は、そこまで考えが至らなかった俺のミスだ

こうして考えていても埒が明かない……もしかしたらゆつくりと待っていればいずれされる投稿で場所の特定自体は出来るのかも知れない。けれどそれを待っている余裕はない、悠長に待った結果何があるかわからない以上、片っ端から探しに行くしかない

結局、彼女の泊まっていた部屋から明確な手がかりを見つけることが出来なかった。それどころか荒らされた形跡もないじょう部屋の中よりも部屋の外、ホテルの外でいなくなっている可能性が高い……せめてアニメとかスパイ映画でもあるサポートガジェットでもあれば違うんだろうがない以上頭で考えるしかない

どこに行つたのかわからない以上、俺たちがずっとホテルの前にいたら不審がられてしまう。ひとまず会場の控室まで戻つたわけなのだ……

「一体、どうすれば……」

「可能性が高いのはスタッフの中に犯人がいる……それは貴方も犯人の可能性が高い……という事です」

「それは、そうですよね」

マネージャーも犯人の可能性も高い、けれど今回ばかりはそれは違う気がする……というよりも犯人がこんな事をするのか、その思い込みが足を踏み外す原因になるのかも知れないがそれでもいい。リハーサルの時間までに彼女を見つけるのが最優先事項

「もし犯人がスタッフさんだったら、案外安直な所にいたりするかもしれないですね」

「安直な所とは、どういうことですか？」

ふと呟いた八乙女の言葉に疑問を抱いたであろうフタバ先輩がそう訊き返すと、八乙女の方は少しだけあたふたしたような態度を見せた後に話始める

「えつと、ほら。推理小説とか基本的にミステリーを難しくしがちじゃないですか。でも普通の人ってそこまで頭回らないんですよ……多分」

「そこは自信を持った方が……」

「自信とか持てませんよ、ともかく普通の人ってそこまで頭回らないと思うんでわかりやすい場所にいるんじゃないかなと」

そうなつたら随分と拍車抜け以外の何物でもない……けれど引つかかる所はかなり多い

——昨日襲い掛かったのはS I — N Aを攫うためじゃなかった？

八乙女の考察を紐づけるなら可能性として高いのは会場の一角を潰すため……そして、監禁場所を作り出すため？

「八乙女、悪魔はどのタイミングで襲ってきたんだっけか？」

「えっと、飲み物を買に行ったとき急に……」

「どこから来たとか覚えてるか？」

「それが、音もなく急に」

音もなく急につて事は、やっぱり内部の犯行であるのには間違いない、それにあの戦いで色々な場所に被害が及んで……具体的に言う最後の攻防やらなにやらで廊下はボロボロ。立ち入り禁止状態になっっている——

「——そうか、案外拍車抜けの場所ってそう言うことか」

「何か分かったんですか？」

「多分ですけど……はい。とりあえず行きましょう、化物は俺が何とかします」

そして俺たちが向かったのは昨日俺が悪魔と戦った場所、少し足場が悪くなっている所を進んでいくと一室だけあまり傷のついていない扉があった。鍵がかかっているその部屋ではあるがそれに構って余裕はない、ガンデフォンを使って扉の金具を破壊して扉を蹴破る「な、何だッ!？」

「……ホントに、拍車抜けもいいところか」

「あの人が、犯人ですか？」

「見たいんだな」

扉の先にいたのはタオルで口を塞がれているシイナと手にスタンプを持った一人のスタッフの姿、拍車抜けする結末ではあったシイナが見つかったのならやるべきことは一つだけ

「お、お前ら……一体なんで……」

「理由を話すのは後だ、まずはスタンプを渡して自首してくれ」

「い、嫌だッ！ せっかくここまで来たのに……こんなところでッ！」

『イーグル』

目の前にいる男はスタンプを押し付けると、俺たちの目の前に先日戦った鳥男が姿を現す……けれど、契約者の男はそこで止まらなかつた。男が悪魔を呼びだしてすぐにもう一度自分の身体にスタンプを押し付けた

悪魔はその姿を無数の契約書へと変え、契約者の身体に纏わりついていった。纏わりつかれたそばから黒煙を放ち、姿を人間と鳥類の骨格を雑に組み合わせたような意匠と刺々しい鱗で覆われた爬虫類のような怪物へと変える

「な、何ですかアレ……」

「I型……イレギュラータイプの悪魔だ、正直かなり面倒なタイプ。ひとまず三人はシイナを……俺はあの悪魔を何とかする」

襲い掛かろうとした悪魔に対してガンデフオンの銃撃でこちらに意識を向ける。あの両手になつてる剣みたいなのに加えて鳥の特徴まで加わつてるとなると、流石に厄介以外の何物でもないな

「門原さんッ！」

「アンタたちは今やるべきことを！ こいつは絶対に近づけさせないから……それにシイナ、契約の内容忘れんなよ」

それだけ言い残して、俺は目の前にいる悪魔を引き付けたまま、会場の外に出る……向かう場所はここから割と離れたところにある森の中、正直広い所で戦いたくないって気持ちもあるが背に腹かえてらんねえ

【デモンズドライバー】

「契約遂行の時間だ」

『スパイダー』

【Deal】

「変身ッ！」

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

デモンズの姿へと変身した俺はまっすぐ飛んでくる悪魔に対して蹴りを入れて地面へと叩き落す。飛ばれると厄介でしかないからこのまま飛ばれる前にささっと倒す、悪魔の振るってくる剣を避け、掴み、相手に拳を叩き込む

「……体表が固すぎてまともにダメージが入らねえ」

『ジャマフ……スルナアアアッ!』

「それを言われて邪魔をしねえのは無理だよッ!」

拳でダメなら至近距離でガンデフォンをぶっ放す。それでも体表を少しだけ削った程度、致命傷にはならない……そしてこっちはこっちで至近距離で動いたのがまずかったのか鉄のように硬化した羽根の弾丸が俺に向けて放たれる

「ぐっ——あああぁッ!?!」

想像以上のダメージを受けて思わず膝をつく。硬度だけで見ても昨日の攻撃の非じゃない——本当に厄介以外何物でもない

「マズいな……このままじゃジリ貧だ」

相手方もこっちの攻撃がろくに通らない事は察したのだろう……というかパツと見た感じでも悪魔側に吞まれて契約者の意識は喪失している可能性がありそうなのが厄介だ、やっぱ狩谷に頼んでた数は増やしておいて貰うべきだったか

「ぐううッ!」

こっちのそんな考えを見透かしたように、悪魔は加減の無い攻撃を続ける、あと一撃喰らったらヤバイ——と言ったところで悪魔に向かって銃撃が飛ぶ

「門原くん! 大丈夫ッ!」

「狩谷、どうしてここに……」

「門原くんのガンデフォンの位置情報を辿って、新しい手札、届けに来たよ」

そう言いながら狩谷の渡してきたのは深い青色の銃、どうやら先端がスタンプのようになっておりそこには悪魔の顔のようなレリーフが彫られている

「これって、銃?」

「なんとか仕上げてきたよ、オーインバスター50!」

「何故50?」

「何となく、使い方は……説明してる時間はないか」

「みたいだな……でも、有り難く使わせて貰う」

立ち上がった悪魔に向けてオーインバスターの引き金を引く、放たれた光弾は敵の身体に当たり火花を散らす……威力も問題はなし、相手の体表を十分削れる

「反転させると斧としても使えるよ!」

「了解」

斧にしたオーインバスターを使って相手の悪魔に斬撃を放つ、体表が破壊されると共に地った火花を見ながら斬撃を続ける。先程の劣勢から一転、こっちの攻撃が通るようになったなら十分決めに行ける「銃口になつてるスタンプを外して、武器に着いてる台座に押印して!」

「わかった!」

「スタンプバイ!」

斧の刃の部分に集中するエネルギーを見ながらスタンプを銃口に戻し、引き金を引く

「オーイングスラッシュッ!」

深い青色の斬撃を放ち悪魔を思い切り後退させる、一撃で貫いて……決める

「スタンプバイ!」

今度はスパイダースタンプを台座に押印し、斧から銃に持ちかえる。何をしようとしているのか気付いたであろう悪魔は翼から羽根を打ち出してくるが、その狙いは今までに比べると散漫

「必殺承認!」

鋼鉄の羽根がこっちに放たれ、火花を散らすのが問題はない。エネルギーのチャージが完了したことを確認し——引き金を引く

「スパイダー! スタンプピングストライク!」

銃口から放たれた一撃は眼前に存在する悪魔を貫き、爆発を引き起こした……爆発の中から出てきた契約者を回収し、変身を解除する

「良かった、完全に同化はしなかったか」

今回はかなり疲れたがひとまずは報告をしない事には始まらないだろう

今回の顛末

あの後、俺たちは契約者をD・D・C・Uへと引き渡しライブ会場に戻った。今回の被害者であるシイナも最初は同様していたものの俺との契約はしっかりと守ってくれたらしくライブは大盛況のうち幕を閉じた

「お疲れ、大変だったみたいだな」

「……ん、そっちも大変だったみたい」

終わった直後にシイナと一言だけ、そう声をかけたがまあそれに関しては置いておくとして、無事今回も依頼を達成できた。そこからは諸々の後処理で大変だったこともありシイナ本人と話す機会もなかったが、まあ機会があればそのうち会うこともあるだろう

何はともあれ、今回の依頼は無事終了——ただ一点、気になる事は俺が見たあの男は何だったのか、あの違和感が何だったのか、それを突き止められなかったこと。その違和感がどこで解消されるのか……この時の俺には、何もわからなかった

第5話、 追跡記録H―恋愛・パニック!― (A)

高梨警備保障―D・D・C・Uとの共同依頼が終わってから数日後、普段とは非にならない程の報奨金が入った我ら狩谷相談所は久々の定休日……久々に俺は狩谷の家までやって来ていた。正確には狩谷の家ではなく家の地下にある研究室なのだが

だが、決して遊びに来たわけではなくわざわざここに来たのは狩谷の研究に付き合うためだ

「それじゃあ門原くん、お願い」

「おう」

今回やるのはデモンズドライバーの持つてる機能の一つ、デモンズに変身した状態で複数のスタンプの能力を行使するシステム―ゲノミクスの検証だ

「狩谷、ゲノミクスってのは最大でスタンプの力を何個まで使えるんだ?」

「システムの説明によると最大で4つ、その状態をフルゲノミクスって言うみたい」

「フルゲノミクスか」

この前の契約者が使っていたI型悪魔、ただでさえイレギュラーな形態であって毎回あのタイプの敵が現れる可能性もなくはない……もしかしたらもっと強い存在が現れる可能性も高い可能性が捨てきれない以上こっちも使える機能は全部使えるようにしていた方がいい

「それじゃあ一つずつ検証していこう」

「わかった、まずは一つ目だな。何を使えばいい?」

「まずはこれからお願い」

そう言つて狩谷が渡してきたのはモグラのレリーフが彫られているバイスタンプ―モグラバイスタンプか。軽く渡されたスタンプを確認した後にも通り天蓋のボタンを押す

『モグラ』

【Add】

【Decide up】

【モグラゲノミクス】

スパイダーバイスタンプを使う時とは違う動きでモグラバイスタンプを読み込ませると、右腕に緑と赤、そして若干のオレンジの意匠が入った少し毒々しいドリルのようなアイテムが武器が装備される
「まず一つ目は問題なしで使えるっばいな」

「そうだね、それじゃあ二つ目使ってみよう」

「次は……バツタか？」

「うん、お願い」

続いて渡されたバツタバイスタンプをさっきのモグラと同じ手順を使う、これも問題なく使用することが出来た。足は普通の脚ではなくバツタ特有の脚へと変化した。しかし単独使用に比べると身体にかかる負担は相当だから長時間の使用は無理っばいな

「門原くん、次は……って大丈夫？」

「あ、ああ……大丈夫だ、頼む」

「わ、わかった。次はこのスタンプを使ってみて」

そう言っただけで渡してきたのはサソリのレリーフが書かれているバイスタンプ、それを使おうとしたが台座に一度押しし液晶パネルにもう一度押ししようとしたが、エネルギーが反発し押しすることが出来ない。それでも無理に押ししようとしたがスタンプそのものが反発しその際に発生したエネルギーによって変身が強制で解除された

「門原くん！ 大丈夫!？」

「あ、ああ……大丈夫……」

『今の貴様では二つ使うのが限界だ』

腰に巻かれていたベルトの液晶に目のようなドットが出現し、言葉を発しはじめた。言葉を発した主はベルトの中に潜み、今の俺と“仮契約”をしている悪魔——ベイルだ

「久々に声を聞いたと思ったら、わざわざ小言でも言いに来たのか？」

『俺が貴様に小言を言う必要はない、俺たちは利害の一致で契約をしているだけだからな』

「そりやそうだ……でも、それじゃあわざわざ今の俺が二つで限界な

んて言いに来るのはどういう要件だ」

「あつ、門原くん。ベルト貸して」

狩谷の言葉を聞いた俺はベルトを渡すと、彼女はデモンズドライブとパソコンのケーブルを接続して解析を始めた……のだがベイルはそれを気にした様子はなく言葉を続ける

『貴様に無謀な真似をされたらこつちの目的が達成できなくなるからな。忠告をしておく——』今の“貴様では二つのスタンプを使うのが精一杯……いや、一つのスタンプの能力を引き出すのが関の山だろうな』

「つまり、二つ使うのは危険ってことか？」

『その通りだ、無駄に自分の寿命を削りたくなかったら精々使うスタンプは制限する事だ』

それだけ言い残すと液晶の中へと消えていった。狩谷もそれを見た後に軽く息を吐いて俺の方に目を向けてくる

「ごめんね、ベイルがあんな言い方して」

「別に、口が悪いだけで案外俺の身を案じてくれてるみたいだし、コッチに関しては完全に俺の問題だから……コーヒーでも入れてくるよ」

ベイルの発言を謝罪してくる狩谷に対してそう返事をする、コーヒーを入れる為に研究室を出て地下から1階に上がる……その途中で、俺はスパイダーバイスタンプを自身の身体に押印した

「……………」

しつかりとスタンプは押印している筈なのに、他の契約者と同じように悪魔が出てくる気配はなかった。これがベイルの言っていた“今の”俺という言葉の正体

——今の俺には、悪魔が存在しない

翌日の狩谷相談所、土曜と言うこともあり学校が休みな八乙女も含めて俺たち三人、書類仕事に従事しながら新しい依頼を待っていた……と言っても、依頼が来る方が稀ではあるのだが——

「そう言えば、ずっと気になってることがあったんですけど」

「気になってること？」

「はい、何だかんだ私もこの事務所で働き始めて数週間。並大抵の事には慣れてきましたけどまだまだ聞いてない事多いんですよね、特に悪魔の事とかまだまだ分からないこと尽くしですから」

そう言えば、確かに悪魔の事については八乙女に対してしっかりと話したことはなかったな

「悪魔の種類については話したんだっけか」

「はい、えーっと確か兵士型、生物型、それとこの前の異常型ってのがいるんでしたっけ？」

「そうだな、書類とかでの表記はSoldier, creature, Irregularの頭文字を取って表記されてたりするな……まあ現場だと生物型とか兵士型って呼ぶことの方が多いけど」

この二つ、基本的な扱いは一緒でどっちで書いても問題はないっばいんだけど、いざ報告書とかで書くとなるとS型とかで書いてるのが当たり前になってるから結構面倒なんだよな

「まあそこは聞きましたけど、そもそも悪魔って何なんですか？」

「……そうだな、とりあえず悪魔についても説明しておくか」

良い機会ではある、ということもあって八乙女に対して悪魔についてを説明しておくことにする

「そんじゃ、悪魔についての説明を始めろぞ」

——悪魔、人間の内面に存在するエネルギー生命体。普通に生活するだけであれば人間の持つ負の感情を食糧にしている無害な存在だがバイスタンプを用いて契約をすることで現実世界に出現する

「エネルギー生命体って、どういうことですか？」

「ああ、人って必ず物心つく時期があるだろ」

「ありますね」

「人間は物心つくときに自分の中に入ってくる情報の濁流を無意識のうちには精査して不要だと思った部分を切り離す。その切り離れた部分が悪魔になるんだ」

まあここら辺の話は所長の受け売りなんだが説明をするだけなら

まあ問題はない

「でも、それってなんか怖いですね……小さいときからずっと化け物と一緒になんて……」

「化物って呼び方は、少しだけ違う」

「違うんですか？」

「ああ、悪魔が化物の姿で現れるのは基本的にスタンプが原因なんだ——」

——悪魔は本来固有の形を持たない、でもバイスタンプを使って契約するとスタンプを通路にして現実世界に現れる。それで現実世界に現れるときにスタンプの中にデータとして保存されてる生物の遺伝子が混入するから現実での姿が人型の化け物って訳だ

「一応説明したけど……わかったか？」

「正直さっぱりです」

「あはは、まあ正直難しいことだからね、そこら辺は」

言葉を挟んできた所長は俺と八乙女にココアの入ったマグカップを渡してきた。まあ俺も最初に聞いた時はこんがらがってたから仕方ないっちゃ仕方ないけど

「でもね八乙女さん、悪魔って必ずしも怖い存在じゃないんだ」

「そうなんですか？」

「うん、二重人格ってあるでしょ」

「虐待とか受けたら自分の中にもう一つの人格が生まれるっていうアレですよ？」

「そう、私思うんだ……アレは悪魔が守ってくれてるんじゃないかって」

「悪魔が……守る？」

「うん、悪魔ってみんな人間以上の力を持つてるけどそれ以上に不安定な存在なんだ……大抵の人は大人になると同時にその存在を知できなくなる」

そう、人間の中に存在する悪魔は力以上に存在が不安定。小さい頃にイマジナリーフレンドとかそういう形でその姿を認識することが出来ても成長していくうちにその存在を認知できなくなっていく

……そして、大抵の悪魔は心の片隅でひっそりとその存在に幕を閉じる

「そうは言っても、現実に現れた悪魔はスタンプの影響で凶暴化して、内側にいるときは無害でも外に出て凶暴化しちまったら倒すしかない……端的に言うると暴走した悪魔は危険だから倒してると感じだな」

「成る程……でもやっぱり、難しすぎてピンとこないですねえ」

「結局の所、俺たちが言いたいのもし自分の悪魔と向き合う機会があつたらしつかりとその話を聞いてやってってくれて事だ……自分を惑わす悪魔の囁きに聞こえるかも知れないが、付き合い方間違えなければきつと助けになってくれるからな」

と、ここまで話したところで事務所の扉が叩かれる……どうやら新しい依頼人がやってきたらしい

第5話、 追跡記録H―恋愛・パニック!― (B)

先程まで整理中だった書類の束を纏めて所長席の机の上に纏めた俺たち狩谷相談所の面々は新たに事務所にやってきた依頼人の対応をしていた。今回はかなり珍しい依頼人で男女一組……見たところカップルのようだ

「花菱タクトさん、それに音無アスカさん。お二人は恋人同士ですか？」

「はい、近々式を挙げる予定で……けど、その時になってポストにこれが――」

そう言つて花菱タクトという男性が見せてきたのはかなり汚い字で書かれた紙の束、そこには例外なく「自分だけ幸せになるなんて許さない」と書かれていた

「うわあ、酷いですね……これ」

「……これは一体誰が？」

「それが……わからないんです」

「わからないって、どういうことですか？」

「それは私からお話しさせてください」

花菱さんに代わつて事の経緯を話し始めたのは彼の恋人である音無さん。彼女が言う所にはこの手紙が入られるようになったのは今から二か月前、入れられている時間は決まって朝方

「多分ストーリーカードとは思うんですけど……」

「ストーリーカーならウチじゃなくて警察に行つた方が……」

「警察に行きましたけど、被害が出ていない以上動くことが出来な
いって言われて」

この感じだと警察には門前払いを喰らつたって感じなのか、それなら藁にもすがる思いでウチに来たのも何となくわかる……とりあえず今は依頼内容の確認に移るか

「それで依頼内容はこの手紙の送り主……ストーリーカーの特定って事で
良いんですか？」

「はい、出来ればこんな事をやめるように言っただけだと助かる

のですが――」

「流石にそこまでは、我々に出来るのはあくまでストーカーを見つけるまで……そこから先は警察の仕事ですから」

この手のストーカー事件つてのはこっちにも依頼回ってきてそれに対処したことも一度や二度ではないんだが、当たる依頼が悪いのかいっつもストーカーが重すぎる愛を暴走させがちなんだよな、普通の人間相手じゃドライバーは使えないからガンデフォンが限界だし、それも迂闊に撃つことはできないし……おかげで何度刺されかけた事か

「とにかく、よろしくお願いします！ この時期に……こんなことが起こるなんて」

花菱さんの言った言葉、あまり変なことは言っていない筈なのにそこには何か別のニュアンスが含まれているように感じた

そして依頼人の二人とわかれていざストーカー探しをすることになった我々なのだが、流石にあの手紙一枚で特定をするのは難易度高すぎないか？

「先輩、どうしましょう……ストーカーなんて簡単に見つかりませんよねえ」

「見つからないだろうな、一番堅実なのは依頼人の家の前で張り込む事だが……」

「一応まだ別々に住んでるんですよね、あの人たち……張り込みも別々は面倒ですよねえ」

「……なんか八乙女、いつになくテンション低すぎないか？ というか仕事に対するモチベーション低すぎないか？」

「いやー、別にやる気がないとかじゃないんですよ？ ただあの花菱って人モデルの仕事やってた時に言い寄ってきた人と似た雰囲気があった」

そういやすっかり忘れていたが八乙女って一応モデルやってるから芸能人の部類ではあるんだよな、というかモデルの仕事してた時に

言い寄ってきた男と似てるからやる気が出ないは流石に花菱さんに失礼すぎるだろ

「まあいいや、とりあえず聞き込みだな……行こう八乙女」

「わかりました、最初は何処でしたっけ？」

「とりあえず二人の職場からだな、そんなじゃ——危ねえッ!」

「へっ? きやっ——ッ!」

言葉が続けようとしたところで無数の針が俺たちの方に向かって飛んできた。何とか八乙女を抱えて避けることは出来た……でもさっきの攻撃、何か違和感があった気がする。なんて考えていると俺たちの目の前に現れたのはヤマアラシ……いや、ハリネズミか

「な、なんで急に襲ってきたんですか!? 私何もしてませんよ!」

「んなことわかってる……とりあえず、隠れてろ」

とりあえず周りに全然人通りが無くて助かった。人目を気にしないで思う存分戦う事が出来る

「よし、それじゃあ行くか」

『スパイダー』

【Deal】

スタンプ台にバイスタンプを一度押印し、今度は液晶に押印しようとした瞬間。目の前にいるハリネズミの悪魔がゆつくりと口を動かし始める

『……オ、ネガイ』

「えっ?」

『……オ、ネガイ、アノ……コ……——ッ!!』

言葉を紡いだのはそこまでで、目の前にいる悪魔は理性を失ったかのようにこちらに向けて針を飛ばしてくる。さっきの言葉が頭から離れきつていなかった俺の袖を針が僅かに掠る

『おい、油断をするな』

「わかってるよ——変身ッ!」

【Decide up】

デモンズへと変身した俺は横のホルダーに収納されていたオーインバスターのスタンプを地面に押印しながらハリネズミの悪魔へ向

かつて走り出す。押印された場所から出現したオーインバスターは自然と俺の右手に収まる。そのまま持つ武器を反転させて斧形態にする。とまずは一撃……目の前の悪魔に叩き込む

『アア——ッ!?!』

敵にダメージを与えるたびに漏れ出る苦悶の声に少しだけ戦意をそがれつつも攻撃を続けていく。正直引つかかる所はあるものの暴走してる悪魔はここで——

『……ア×カ……カ——』

「今、何て——」

確かに目の前の悪魔は、アスカって口にした……どういう事だ、コイツもI型なのか？ いや……でも、見た目は完全にC型……一体何が——

『坊主ッ!』

「——やっペッ!?!」

バイルの声で無理矢理現実を引き戻された俺は何かその場で体勢を整え直して目の前の悪魔と向き合い直す……だめだ、さつきから余計な思考が邪魔をしまくって戦いに集中出来てない

「今は戦いに集中しろ——目の前の悪魔を何とかしねえと」

『ア……アアアアアアア——ッ!!』

先程とは非にならない程錯乱した悪魔は俺の方に向けて大量の針を飛ばしてくる。直線だから避けることも出来るがそうしたら隠れてる八乙女に被害が行くかも知れない——それなら、迎え撃つ

「スタンプバイ!」

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

デモンズの必殺技に使うエネルギーを全て糸の生成に使ってネットのような形状で蜘蛛の糸を展開する。人間サイズの大きさであるため撃ちだされる針もかなりの大きさがある、升目がある程度小さくすれば受け止めることも出来る——そして受け止めた糸を

【オーイングスラッシュ】

斧形態にしたオーインバスターから放たれるエネルギーの斬撃で

粉々に砕いた。糸の残骸と粉碎した針が光の粒子になって消えていく中でさつきまで悪魔のいた方に目を向けるがそこには既に悪魔の姿はなかった

「……逃げられた、けど——」

さつきの悪魔、今までの悪魔とは違った。今までもうめき声を上げたりする悪魔とは戦って来たが……あそこまで明確に——いや、片言ではあったがそこまで人の言葉を話す悪魔とは遭遇したことがない、それにスタンプの力に頼らない出現ならいざ知らず明らかにスタンプを使つて暴走している様子もあつた

「一体、何がどうなってるんだ」

「先輩！ 大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……大丈夫だ、それより八乙女。早く聞き込みに行こう」

「え、でも手当てとか——」

「このくらいかすり傷だ、今は一分一秒が惜しい」

あの悪魔はアスカと口にしていた・それならもしかして今回のストーカー事件と関係があるのかも知れない……それに、俺がここで逃がした所為で他の人に被害が出るのは流石に勘弁願いたいからな

最初に向かうのはウエディングプランナーをしている花菱タクトが現在勤めているという会社、そこに向けて俺たちは歩き出した

第6話、 追跡記録H―友人の真実・悪魔の真実―
(A)

ハリネズミデッドマンの襲撃にあった俺たちは、花菱タクトの務めている会社まで向かった。会社自体はそこそこの大きさであったが俺たちは受付に座っていた女性に声をかける

「すみません、狩谷相談所の者なのですが」

「はい、ご用件は何でしょうか？」

「実は花菱タクトさんという方からストーカー調査の依頼を受けています。よろしければ彼の同僚から少々お話をお伺いしたいのですが」

「……少々お待ちください」

一応用意していた名刺を渡しながら受付の女性にそう言うと、少々お待ちください。という言葉が伝えられた後、どこかに連絡をした。数分だけ待たされた後受話器を置いた女性は改めて俺たちの所まで戻ってくる

「担当の者を及びしましたので少々お待ちください」

女性はそれだけ言うと元の業務に戻っていった。流石にずっと受付の前で待つわけにはいかなかったのでロビーの隅の方で担当が来るのを待つことにする

「……なんか、先輩メツチャ怪しかったですね」

「やっぱ、そうだよなあ」

正直言つててめちやめちや怪しいよな今の俺とは思った。だって急に会社に来て話を聞かせてくださいいは真面目に不審者でしかないからな……警察呼ばれたらどうしよう。等と考えていたのだがそんな心配は不要だったようで、俺たちの前に現れたのはスーツ姿の男性。彼は俺たちに軽く頭を下げる

「えっと、貴方たちが花菱の話を知りたいって言う？」

「はい、狩谷相談所の門原です」

「同じく八乙女です」

「花菱の同僚をしている村上です……ここでお話しをするわけにもいきませんし、とりあえずこちらに」

流石にこの場で話をするわけにはいかなかったのか、村上さんは俺たちを会社の中の応接室まで案内してくれた

「それで、お二人は花菱から依頼を受けているとのことですが——」

「ええ。現在彼からストーカー調査の依頼を受けていまして……最近彼の周りで何か不審なことが起きていたりしていませんか？」

「そう言ったことは特に……彼、本当に真面目なので」

「それじゃあ、仕事終わりとか、一緒にご飯行つたときに花菱さんが誰かに話しかけられたりは——」

「そう言ったことも特には……」

やっぱ簡単に尻尾を見せないか、正直ストーカー被害となると浮気調査とかと違って明確に犯人側の情報がないつてのが厄介……だからこそ、ストーカーキングの対象になってる人に張り付いて尻尾を掴むのが常套手段

「……やっぱ見張るしかないか」

「ですかねえ」

正直当たりを付けるのが難しいとは思っていたがやっぱ案の定か……それにあんま長く時間を取らせる訳にはいかないからこら辺で切り上げるか

「村上さん、最後に一つだけいいですか？」

「はい、何でしょうか？」

「覚えてる範囲で構わないんですけど、花菱さんに関して何か噂とか、会社の中で流れたりしませんでしたか？」

「噂……というと？」

「主に女性関係とか、それ以外にも身近で問題が起きてたとか」

「あまりそう言ったことは聞かなかつた……でも、そういえば——」

「そう言えば、何ですか？」

「少し前に、恋人が事故にあつたつて——」

「それつて、いつ頃とかわかりますか？」

「確か半年くらい前だつたような」

半年前に恋人が事故って事は……その事故がきっかけで知り合ったってことか。まあそれにしたって何とも言えない感じだな、人の縁ってのは何処で結ばれるかわからないもんだけどそんな切っ掛けがあるとは

流石にこれ以上は時間を取らせる訳にもいかない以上ここで切り上げて俺と八乙女は会社の外に出る

「半年くらい前に事故が原因で知り合ってたって……世の中わからないですねえ」

「そうだな……」

「どうかしたんですか？」

「……いや、なんというか、事故にあつた恋人って本当にアスカさんなのかね」

「そうじゃないんですか？」

何というか、こういうときにある違和感は案外宛てになるというか……とにかくなんか違う気がするんだよな

「とにかく、次はアスカさんの勤めてる会社に行ってみよう」

「そうですね、まずは情報収集！」

「八乙女も段々板についてきたな」

「そりゃあ、短いながらに濃い経験してますからねえ」

そう言えば、最近悪魔関係の事件が立て続けに起こってる気がする。今更ではあるが流石にこの頻度だと何か作為的な物を感じざる得ない――

「――つと、すいません！ 大丈夫ですか!？」

流石にボーっとしすぎてた、ぶつかってしまった人に対して謝りながら手を差し出す

「いえ、こっちこそすみません。少しボーっとしていて」

ぶつかってしまった人の手を取って立ち上がらせると、相手もその言葉と共に軽く頭を下げてる

「気にしないでください、ホントにすみませんでした」

「もー、何やってるんですか先輩」

「いや、ボーっとしてた」

ぶつかってしまった人に頭を下げて八乙女と一緒にアスカさんの勤めている会社に向かった

「ふーん、アレが門原ヒロト……仮面ライダーデモンズか」

門原ヒロトとぶつかった人物は立ち去っていく二人の事を見つめながら呟く。八乙女リサとさして変わらない年齢の少女は踵を返し二人とは正反対の方に向けて歩き始める——その手には、通常のバイスタンプとは異なる未知のスタンプが握られていた

アスカさんの勤めている会社に向かった俺たちだったが、花菱さんの勤めている会社と同様にこれと言った情報を手に入れることはできなかつた

「骨折り損……って訳でもないけど、殆ど収穫はなしか」

「ですねえ……スタンプのすの字もありませんねえ」

「あつたらあつたで問題なんだけどなあ」

結局の所何をするでもないからなあ、公にはスタンプを持つこと自体が違法な訳だし職場の同僚にスタンプを買いましたー！なんて喚いたら通報されかねない。けどここまでスタンプを買うきっかけになるような出来事もないとなると……気になるのはやっぱり事故の事か

「八乙女、今から少し警察行くぞ」

「えっ？ 警察ですか？ なんで……」

「半年くらい前の事故なら警察に記録が残ってるんじゃないかと思つてな……一応知り合っているし聞いてみようと思つてさ」

「その知り合いつて、もしかして」

「そう言うこと」

ガンデフォンを取り出して目的の人物——新見真人に連絡を取り、

警察署へとやってきた

警察署内で待つこと数分、ダンボールを一箱持ってきた新見さんが俺たちの前に現れた

「門原くん、八乙女さん、久しぶり……つと、ふうー重かった」

「お疲れ様です、新見さん……これが頼んでた？」

「そ、半年前の事故の記録。流石に全部見せるわけにはいかないけどね」

流石に事件の記録されてる資料を丸々見せるわけにはいかないというの当たり前か

「あの一、それで、見つかったんですか？」

「確か……花菱タクトって人の恋人が事故にあった記録ですよ。確かここに——」

そう言った新見さんはダンボール一番上に積まれていた資料を取り出しパラパラとめくる

「あつた、この人の事じゃないかな」

そう言つて新見さんが見せてくれたのは資料の中の一ページ、確かに事件の記録は半年前。被害者の名前は佐伯ヒロコ、事故にあった時刻は午後八時頃……通報者は彼女を車で轢いた張本人か

「この事件って、どうなつたんですか？」

「加害者本人が通報後反省の意思を見せた事で、示談が成立しています……ですが被害者の方が——」

「被害者がどうかしたんですか？」

「事故にあつた被害女性は現在植物状態なんです……」

被害にあつた女性が、植物状態？

「どういうことですか？」

「事故に遭つた際、打ちどころが悪く脳が損傷した……と、担当したお医者さんは言っていました」

事故に遭つた女性は植物状態なのに、恋人と思わしき男性——花菱タクトは新しい恋人を作つたのか……いや、何時目覚めるかわからな

い植物状態の恋人に対して縛り付ける訳にはいかないって事で親御さんが気をつかった可能性もあるが

「でも、ありがとうございます。おかげで事件の事は分かりました」

「気にしないでください。こちら悪魔関係の事件で門原さん達にはお世話になってますから」

「……えっ?」

とりあえず事件の事は分かったから警察署からお暇しようとしたところで、資料を読んでいた八乙女から困惑の声が聞こえてきた

「どうかしたのか?」

「先輩、この部分、見てください」

そう言っつて八乙女の見せてきたのは被害にあつた佐伯ヒロコさんのプロフィール……その勤務先の部分、俺もそこに目をやると思考が一気に冷え込み、纏まっつていく……でも、そうだとしたらあの悪魔と契約しているのは――

「先輩、この会社つて……そうですよね」

「ああ……この会社、アスカさんの勤めてる会社で間違いないと思う」

事故の被害にあつた花菱タクトの恋人と同じ職場であり、彼女が事故に遭つた半年前に恋人になつた女性。音無アスカが――悪魔の契約者……なのだろう

第6話、 追跡記録H―友人の真実・悪魔の真実―
(B)

警察署からの帰り道、思わぬ所から発見された繋がりを知った俺たちは何を話すでもなく事務所への道を歩いていた

「……あの、先輩」

「どうした？」

「仮に、仮にですよ。今回の依頼人の恋人が犯人だったとして……どうしてストーカー事件なんて」

「それは俺にもわからない、けれど悪魔の契約者は分かったならやる事は一つだ」

悪魔の契約者が判明したのなら、俺たちに出来ることは一つ――契約者からスタンプを回収する。その為にまずは彼女と話をする所から始めないといけない

「八乙女、明日早速アスカさんに聞きに行こう」

「わかりました」

「そのために、今日は一旦解散にしよう。英気を養うのも重要な仕事だ……俺はこれから事務所に戻って事のあらましを所長に伝えてくるから」

「私も一緒に行った方が――」

「心配はない、所長から受け取りたいものもあるからな」

今回ばかりは新しいバイスタンプも必要になってくるだろう。この前実験で使ったバイスタンプを狩谷から借りに向かう

八乙女と別れた俺が事務所に戻ってくると、眼鏡をかけた所長がデスクトップパソコンとにらめっこしていた

「戻りましたけど……所長何やってんすか？」

「お疲れ、門原くんこそどうしたの？ この時間ならもう帰ってる筈だけ」

「とりあえず契約者候補がわかったからその報告……それと必要そうだから新しいスタンプを借りにな」

「新しいスタンプって、どれのこと？」

「とりあえずモグラだけ貸してくれ」

「わかった、スタンプは明日渡すね……それと、もう一つ契約者候補がわかったって言ってたけどどういう事？」

「ああ、実は——」

そこから俺が所長に対して話をしたことはさっき仕入れてきた情報——花菱ヒロトの元恋人だった女性が現在の恋人、音無アスカの同僚であった事。元恋人が事故にあったタイミングがほぼ同時期であった事……このことから悪魔の契約者は音無アスカであり、彼女がスタンプの使用者であり悪魔の契約者である可能性が一番高い可能性である事

「……そっか」

「そうなんだよなあ、だから明日話が出来るか聞いてみる」

「わかった、一応こっちからも確認の連絡は入れておくよ」

「頼んだ……それより、狩谷の方は何をやってんだ？」

「ああ、えーつと……まあ、門原くんなら良いか、これ見て」

狩谷が見せてきたのはデスクトップの画面、そこに表示されたのは新しいシステムとバイスタンプのデータ。見た感じデモンズドライバーのアップデート情報みたいにも見えるが違うな、データの名前は

——O・V・E・R・ DEMONS

「……オーバーデモンズ？」

「うん、門原くんが今まで戦ってきて収集したデモンズのデータを基に新しいシステムを構築してるんだ名前はO・V・E・R^{オーバー}」

「O・V・E・R^{オーバー}って、何なんだそれ？」

俺の疑問に答えるように、狩谷は新しいシステム——O・V・E・R^{オーバー}の説明を始める

「デモンズドライバーって結局の所システムの中核にいるベイルに依存しちゃってるでしょ？」

「そうだな」

現状のデモンズドライバーはシステムの大部分をベルトの中の悪魔——ベイルに依存している。その分引き出される出力も大きい。結局の所デモンズドライバーからベイルが抜けると変身自体は出来るが出力は大幅にダウンしてしまう……一回で強大な力を発揮することの出来るデモンズだが結局の所、悪魔が居ないと万全な力を出せないのには違いない

「そのためのO・V・E・R。って事か？」

「うん。悪魔の代わりに人間の身体能力を飛躍的に高める強化エンジン……それがO・V・E・R。ってわけ」

「悪魔の代わりによって……人工筋肉みたいなもんか？」

「端的に言う……そんな感じかな」

あんまよくわかんないから多分の話になるがそのO・V・E・R。っていう強化エンジンを使うことでベイルの力を借りずに今と同等の力を発揮することが可能……という話らしい

「そのじゃあO・V・E・R。をデモンズドライバーに組み込むのか？」

「ううん、一応もう一台デモンズドライバーを作ってる所、基本的なシステムの構築とドライバーそのものは完成しているから後はO・V・E・R。を完成させて組み込むだけ」

思った以上に完成間近だったらしい。そこまで話を聞き終えた俺は一足先に帰宅することとなり……時は翌日まで進む

翌日の朝、俺と八乙女は音無アスカさんと会うために事務所にある喫茶店にやってきた。待ち合わせの時間は現在時刻より少し早かったが店の中に入ると既にアスカさんの姿があった。席に案内してもらおう来てくれた店員に対して待ち合わせである旨を伝えて二人でアスカさんの所までやってきた

「すみません、お待たせしました」

「いえ、私が早く来すぎただけですから……それで、話があるって所長さんから聞きましたけど……」

とりあえず話に上がってるなら話は早いから、いつまでも立っている訳にもいかなないので椅子に座ってから話を始める

「とりあえずあまり時間を取らせる訳にはいかなないので端的に……音無さん、佐伯ヒロコって人について知ってますか？」

彼女の名前を出した瞬間、音無さんの動きはピタリと止まる

「……訊いたことないですけど、誰なんですか？」

「花菱さんの元恋人です……あの人から何も聞いてないんですか？」

「あの人、昔の事とかあまり話すほうではないので……」

「それじゃあ会社で話に出たりとかなかったんですか？ 調べてみたら同じ会社だったみたいですけど」

さつきから音無さんは俺たちと目を合わせようとしていない。それに少し様子が変だ。あからさまに心当たりがあるって雰囲気醸し出しているがどう話を引き出したものか

「あの……音無さん」

さつきまで黙っていた八乙女が俺の横で話を始めた

「私も……いえ、私の友達もスタンプに手を出したんです」

「急に、何を——」

「ごめんなさい、正直な所。私は音無さんを疑ってます、もしかしたらそうなんじゃないかって……思ってます。それで、もしそれが合ってるなら、スタンプを渡してください……アレは簡単に手を出したら駄目なものなんだってわかったから」

八乙女のその言葉を聞いた音無さんが取り出したのはハリネズミのレリーフが刻まれているスタンプ、確かに俺たちが戦った悪魔の特徴と合致してるバイスタンプで間違いなさそうだ

「やっぱ、貴方が契約者だったんですね」

「……それは違うってハッキリ言えます。だって——そのスタンプ、私には使えませんでしたから」

スタンプが使えなかったって、どういう事だ？ そもそもそのシステムが破損していたから使えなかったのか……いや、見た感じ使用不可って事はなさそうだけど

「どういうことですか？」

「スタンプを使おうとはしたんです……けど、使えませんでした。スタンプの起動自体は出来ても悪魔との契約は出来ませんでした……」
スタンプ自体の使用は出来ても悪魔との契約が出来なかった、そう
なってくると思えるのはそのスタンプを使って別の奴が悪魔と
契約しているって事になる

「あの、音無さん……そのスタンプ、どこで手に入れたんですか？」
「彼女のお見舞いに行ったときに……病室で」

と言うことは、悪魔の契約者は音無さんじゃなくて……事故に遭つた佐伯さんって事になる。それじゃああの悪魔が発したのは音無さんに何かを伝えたかったから？ それならどうして俺たちを襲ったんだ？

「そう言えば、佐伯ヒロコさんと音無さんって、どういう関係なんですか？」

「……………親友、でした」

「親友？」

「ええ、彼女とは元々職場の同期で……一緒に仕事をすることも多かったんです。それで自然と仲良くなって……気が付けば一番仲良くなっていました」

「じゃあ、もしかして花菱さんと佐伯さんの事も？」

「——ええ、知ってはいました。けど……まさかヒロコの恋人がタクトだったとは思いませんでしたけど」

——音無さんは佐伯ヒロコと花菱さんが恋人だということを知らなかつた。けれど花菱さんの方は佐伯ヒロコから音無さんの事を知っていたとしたら。花菱タクトは何かの目的があつて音無さんに近づいた。そして佐伯ヒロコから生まれた悪魔はその事を伝える為に俺たちに襲い掛かった？

「だとしたら、悪魔は——」

——花菱タクトの命を狙う可能性も出てくる。俺の見た悪魔が暴走していて、音無さんを守るために本人の意志とは関係なく過激な行動に出る可能性は高い

「音無さん、花菱さんは今どこに？」

「今日は普通に仕事だったと思います」

「……八乙女、新見さんに連絡取つといてくれ。俺は花菱さんの職場まで行つてくる！」

八乙女にそれだけ言うと俺は喫茶店から出ていく。この場所から花菱さんの職場まではかなり距離がある、走ってる時間がないなら取るべき行動は一つ

『スパイダー』

「変身！」

人目につかない所でデモンズへと変身した俺は、能力を最大限使用し花菱タクトの職場まで向かった

デモンズ能力を使って職場まで向かうと、中からは騒音が聞こえてきている。状況はそれだけじゃない——会社の入口から逃げていく社員の姿を見る辺り、事態はかなり切迫している

「ベイル」

『何の用だ』

「悪魔の場所は何処か教えてくれ」

『……ビルの6階付近だ。それ以上はわからん』

「それだけわかれば上等だ」

会社の六階付近まで糸を飛ばしてガラスをぶち破って社内に入る……そこから物音が聞こえてくる方に進んでいくと、そこには襲い掛かる直前のヘッジホッグデッドマンと腰を抜かしている花菱タクトの姿があった

「やめろッ！」

『——ッ!?!』

「か、仮面ライダー!?!」

花菱タクトは驚いているがそんなのに構っている暇はない。近くの壁をぶち抜いて目の前の悪魔ともども外に出ると、そこからは単純な肉弾戦勝負。俺が放った拳を受け悪魔は少し吹き飛ばされたが、す

ぐに体勢を立て直してこちらに向かって針を飛ばしてきた。何とか避けることは出来たがそれも数発、残りの鮭きれなかった針が俺の身体に接触した瞬間爆発が起こった

「ぐっ——あああッ！」

正直変身が解除されなかったのが不思議なレベルの威力だったが、解除されていないなら問題はない

「なあ——」

『？』

「教えてくれ、アンタは何を伝えようとしてるんだ？」

『——』

「頼む、アンタは一体……何が——」

『ア、アアアアア——！！』

俺の言葉を聞いたヘッジホッグデッドマンは錯乱したように攻撃を仕掛けてくる。言葉が通じないのか……いや、悪魔と契約者である彼女の意識が混濁して自我が消えかかっているのか？ どっちにしろ時間がないのに変わりない

「少しの時間でいい、教えてくれッ！ アンタの願いを——思いをッ！」

『——ア、ワ——タシハ——私は、騙されて——た』

「騙されてた？」

『タク——トは、詐欺師だった。私は——騙されて——このままじゃ——アスカも……だか——ら——』

花菱タクトが詐欺師？ 目の前の悪魔は……いや、佐伯ヒロコは騙されてた……それで彼女は、アスカさんを助けようとして

『——お願い、アスカを——助けて』

「……わかった。絶対助ける……だからその代わり、アンタの元気な姿を彼女に見せてやってくれ」

その言葉に対して目の前の悪魔は軽く頷くと、再び苦しみ始めこちらに向かって針を放ってきた……けれど、その攻撃はもう受けない

『モグラ』

【Add】

【Decide up】

【モグラゲノミクス】

「俺の全身全霊で……アンタとの契約を遂行するッ！」

右腕に出現したドリルでこちらに向かっていた針を全て弾く

「ベイル、目の前の悪魔と佐伯さんの意識を切り離す方法……あるか？」

『普通に倒せばいいだろう、人間の意識が消えていないなら倒した所で害はない』

「そうか、それじゃあ一撃で決める！」

ベイルからの返答を聞いた俺はデモンズドライバーの両サイドをもう一度押し込む

【More】

【モグラデモンズレクイエム！】

エネルギーのチャージされたドリルで悪魔に向かって斬撃を放つ。

その一撃は悪魔に直撃し爆散した

ここからは、今回の事件の顛末だ

悪魔を倒した俺はその後、警察や消防、それにD・D・C・Uに連絡を取って後処理を済ませる。今回の事件で発生した会社側の損害は一応島の管理会社が請け負ってくれるらしく特に問題はないらしい

そして今回の依頼人である花菱タクトはこれまでもかなりの被害を出していたらしく目を覚ました佐伯ヒロコさんの証言も含めて詐欺罪で逮捕されることとなった、現在の恋人だった音無さんも最初は動揺したようだが時間が経つにつれて落ち着きを取り戻し現在では普通に生活をしているらしい

「なーんか変な気分ですねえ、契約者側が悪くなくて実は依頼人が悪かったなんて——」

「そう言うこともある……結局のところ、依頼人の事は本人しかわか

らないからな」

今回の一件は、俺にとつてもまだ新入りである八乙女にとつても良い経験になっただろう。そんなことを考えながら俺は目の前にある湯呑の中のお茶を飲みほした

第7話、 遭遇記録K―季節外れの幽霊―(A)

「あつちい――」

この前の依頼から大体二、三週間が過ぎたころ。少し早めの猛暑にみまわれている睦葉島、少し前に空調がぶつ壊れてから別にもう少ししてから直せばいいかと放置していたらこの有様である

現在事務所の窓を開けっぱなしにして扇風機を付けても暑さは全然しのげない

「せんぱーい……空調、どうして直しておかなかったんですか？」

「夏もうちよい先だから別に良かった……というかこういうの大体所長の仕事なんだけど」

「えーつと、実は――」

空調を直さなかった理由はあつちいと狩谷から語られた

「――空調の修理に使う予定だったお金、スタンプとかアイテムの開発費に使っちゃった」

「……それって、会社のお金ですか？」

「流石にそれは違うよ、自分のポケットマネーから出してるよ……ただ、最近色んなものを作り過ぎてお金が――」

洒落にならないくらい心当たりがある……直近で使ったスタンプにあからさまに時間がかかったらもうオーインバスター……それと絶賛狩谷が開発中のO・V・E・Rにもう一台のデモンズドライバー、確かに出費だけなら軽くうん十万はいつてる気がする

「……そこに関しては俺も申し訳ないとしか言えない」

「気にしないで、私も一人で戦わせちゃってて申し訳ないと思ってるし」

「それで、結局空調は――」

「今月末まで待ってもらえると助かるかなあ……」

結局しばらくはこの暑さで耐えないといけないつばいなあ――つと、お客さんか

「はいはい、今行きまーす……つて、先輩？」

「少し前ぶりだね、門原くん。それにみんなも」

扉の先にいたのは護衛事件の時に事務所に共同依頼を持ちかけてきたD・D・C・Uの隊長。烏野フタバ先輩。彼女がウチに来るのは基本的に共同依頼の話をしに来るかだけど、今日は一体何の用だ？

「今日は……また共同依頼とかですか？」

「依頼は依頼だけど、今日は個人的な依頼」

「珍しいですね……とりあえずずっと立ち話もアレですから中にどうぞ」

流石にお客さんを立ちっぱなしにさせる訳にはいかない……というこことで俺は先輩をソファアームまで案内することにした

「「幽霊を見つけて欲しい？」」

ソファアームに案内をした俺たちが先輩から聞いた依頼内容はビックリするくらい普段のそれとはかけ離れた内容だった。幽霊を見つけて欲しいとは眉唾な依頼と言うか……冗談にしてもビックリするくらい洒落にしかない内容だが――

「えーっと、先輩。とりあえずどういう事なのか説明して貰っていいですか？」

「わかった。事の発端は今から二、三週間前――」

――職場から家に帰る途中だった私の耳に、変な声が聞こえてきたんだ。うめき声みたいなので、疲れてたのもあって私としては幻聴かなくらいにしか考えてなかったんだけどそれが毎日続いて……それが外だけじゃなくて部屋の中でも聞こえるようになって

「それで幽霊だと？」

「ええ、極めつけは窓に人影まで見えるようになって……」

成る程、確かにそれは幽霊を疑っても仕方ない。

「――つーわけで、オレたちの依頼を受けて欲しいわけだ。頼めるか？」

「えっ?」

「わかった。依頼の件了解……と言っても、俺は何もできないけど」
「んなこたあわかってるよ、フタバは女でお前は男だからな……ある程度わきまえるのは当たり前って奴だ」

「そこら辺は私たちでフォローするから問題ないよ」

「えっ……いや、え?」

「……オイ、そのヤツさつきから固まってるが良いのか?」

「当たり前のように表に出てきたのはフタバ先輩の悪魔である——
クロハ、フタバ先輩との付き合いがだいぶ長くなってきたって事はコイツとの付き合いも長くなると思うこともありかれこれ高校時代からの付き合いだ」

「とりあえず八乙女、今日の前にいるのはフタバ先輩の悪魔のクロハだ」

「えっ? 悪魔って……ぱつと見フタバさんなんですけど」

「そりやそうだ、なんせ今のオレはフタバの中に存在する悪魔だからな」

「フタバさんの……中に?」

「ああ、フタバの家庭事情は少し複雑だから——ってこれはオレが話す事じゃねえな、簡単に言うとおレはフタバの悪魔であり防衛人格って訳だ」

「防衛人格……」

「まあ見ての通りの性格だし、普段あんま表に出てくることもないからそこら辺は気にしなくていい」

「逆に、今クロハが出てきたって事はコイツが前に出てこないといけない状況って訳なのだが——」

「——もしかして、フタバ先輩今回の一件で相当憔悴してる?」

「いや、ただ単に暑さで参っちまっただけだ。ウチのオフィスと違ってここはクソ暑いからな」

それに関しては、本当に申し訳ないと言えない

さて、というわけでクロハがフタバ先輩と切り替わるまで待つてから改めて幽霊捕獲の作戦を立てることにする……全員で熱さしのぎのアイテムとして買ってきたアイスを片手に

「それで、幽霊って具体的にどう捕まえるんですか？ あっ、ヒロト先輩そのアイス一口ください」

「はいよ持つてけ……正直見えないモノを捕まえるなんてのは完全に専門外だからな、そこら辺を解決しないと正直どうしようもない」

「だねえ、本当の方だとそう言う不可解な事件をメインに扱ってるお寺があるとか聞いたことはあるけど……わざわざ呼ぶ時間はないしね」

「そうですね。流石にこれ以上は仕事にも支障が出そうですし……こちらとしても早急に対処したいですね」

完全専門外だからマジでどうすることもできないってのがキツいんだよなあ

「私がフタバ先輩の家に泊まるってというのはどう？」

「狩谷が？」

「うん、幽霊が行動するってなると私がいても関係なしなのかそれともフタバ先輩だけをターゲットにしているのかはわかんと思うし」

「だそうですね、フタバ先輩は大丈夫ですか？」

「私は問題ないよ。むしろ一緒にいてくれた方が助かるかも」

じゃあ今日は狩谷がフタバ先輩の家に泊まる方向で決まりか、それなら俺はとりあえず家の外で張り込んでみるか

「じゃあ俺は家の外で張り込みでもしてます。もしかしたら人為的なモノかもしれないので……それで八乙女だが」

「私も参加しますよ？」

「いやお前はダメだろ」

「何ですか!？」

なんでって、今日一応平日だぞ？ マジでわかってないのかコイツ

「お前、普通に学校だろうが……っていうか最近事務所に入り浸ってるけど学業は大丈夫なのかよ？」

「流石にだいじょーぶですよ。これでも学校では秀才で通ってるの

で、後これでも学校では人気者なので」

「学業の方は問題なさそうだが……自称秀才の言葉を俺は信じていいのか少々不安になってくるが——」

「後お前」応寮生活だろ」

「ふっふっふ、心配無用ですよ先輩。ついさつき外泊届けを手に入れたんで」

「最近って外泊届けネットで出来んのかよ」

「はい、ガンデフォンで申請は出来ますよ。それでOK出ました」

「手が早いことこの上ないな、って目の前にいる八乙女とのやり取りに気を取られていたがフタバ先輩と狩谷の二人はこちらをジッと見ていた

「なんですか？」

「いや、仲いいなと思ってさ」

「そうですか？」

「うん、なんなら付き合い長い私よりも仲良さそうだよ？」

「狩谷からそう言われたが正直いまいち実感が無い……というか、何だかんだ言って八乙女との付き合いも最初の依頼で出会ってから数か月だもんな、時間の流れは長いようで短い気もする。まあ俺からしたら八乙女は——」

「まあ、手のかかる妹みたいなものですよ」

「妹……ですか」

「なんだよ、不満か？」

「いえ別に……よし！ それじゃあフタバさん！ 所長！ 買い出しに行きましょう！」

「買い出し？」

「はい！ お泊り会には何かと入り用なものが多いですから！ 早速行きましょう！」

「なんかやたらテンションの高くなった八乙女に連れられ、事務所から出て行った……一人残されてしまったが、どうしたものか

「……俺もとりあえず、張り込みの準備だけするか」

「夜は涼しくなると思うが流石にバイクで外に一人はキツそうだし、

車……借りにいくか。そんなことを考えながら立ち上がった俺はガンデフォンを使って中学時代からの友達である嵐山カズキに連絡を取ると、2コールで電話は繋がった

「ようカズキ、今大丈夫か？」

『普通に休憩時間だから……まあ大丈夫だな』

「よかった、突然で悪いんだが車貸してくれね？」

『車？ どうして急に——』

「仕事で張り込みすることになったから」

『——成る程、まあぶつ壊さないならいいよ』

「助かる」

『そんじゃ仕事終わったら鍵渡しにいくからそれまでどっかで時間潰しといてくれ』

「了解」

——とりあえずショッピングモール行くか。店多いし

ガンデフォンの通話を切った俺はショッピングモールに向かう方向で思考を纏めると、目的地の方に向かって歩き出した

第7話、 遭遇記録K―季節外れの幽霊―(B)

シヨツピングモールで時間を潰して何時間か経った頃、ガンデフオンにカズキからの連絡が来た

「もしもし、カズキか？」

『おう、今仕事終わって帰ってきたんだけど……車何処に持ってればいい？』

「いや、俺がそっち行くよ」

『そうか？』

「ああ、とりあえず待っててくれ」

『了解』

少し離れた場所ではあるものの、歩いていくのがそこまで苦でもない。シヨツピングモールで軽く土産を物色してからカズキの家に足を向けた

「よっ、久しぶり」

「おう」

俺がインターホンを押すと、中から出てきたのはスーツ姿の男――嵐山カズキ。軽い挨拶をした後に目の前にいる男に手土産を渡す

「これ、土産」

「サンキュー、中身は？」

「ちよつとした惣菜と菓子だな」

「惣菜は有り難い、今日晩飯なんにするか決めてなかったし」

適当に選んできたが正解だったらしい。俺はカズキから鍵を受け取り二人で車まで向かう、カズキの使っている車はコンパクトカーであるためそこまで幅も取らないから今回借りにきた次第だ

「なあヒロト、張り込みって言っても具体的に何をするんだ？」

「具体的にか……普通に相手の動向を観察するだけだから何をするってのはないぞ？ やるにしても相手が動いてからが本番だし」

「そう言うもんなのか？」

「そう言うもんなんだよ」

張り込みとかそう言うのに関しても他の仕事ならいざ知らず怪人関連だと相手方が動いてくれなければ何をするにしても動けないのが現状、そもそも相手がスタンプを持ってるかどうかを特定する所から始めないといけないわけだし

「とりあえずコレ、車の鍵な」

「サンキユなカズキ」

「いいって、それじゃあ仕事頑張れよ」

「おう」

車を運転するのも久しぶりだし、少し不安だがまあ問題ないだろう……とりあえず安全運転で俺は教えてもらった住所まで向かう、それにしても……やは冷房ってホント良いな、文明の利器さまさまだ

場所は代わり烏野フタバ先輩の家、着替えとか必要なものを持って集まった私たちは改めてこれからの流れをおさらいすることにする

「えーつと、それでこれからの流れは確か……」

「私たちは普通に過ごして幽霊が出るまで待機、それで門原くんが外に不審者居た場合の事を考えて待機」

「じゃあ私たちは基本的に普通にお泊り会で問題ないってことですか？」

「概ねその認識で問題なし」

フタバ先輩はそう言うのと私と狩谷先輩の分も持ってきてくれたコアに口を付けた……さてと、フタバ先輩のお墨付きをもらったお泊り会だけだ——

「それじゃあ、ボードゲームでもします？」

「……ただ待つてるだけなのもアレだしね、フタバ先輩。大丈夫ですか？」

「大丈夫、折角だしやろう」

そう言うのとフタバ先輩が取り出したのはいつの間にか買っていたのかもわからない人生ゲーム——もしかして、フタバ先輩結構今の状況楽しんでる？

張り込みを始めてから数時間、時刻は大体夜の九時を過ぎた頃……こっちは特に進展もないまま車の中で完全リラックスの体勢を取っていた。今回に關しては絶対に暇になる事を見越してタブレットやら充電器やらを持ち込んでよかった

「……カズキに車返す時ガソリン満タンにしとかないとな」

車を借りちまったし今はエンジンを切っているけどとりあえず借りてるわけだし返す時にはガソリン満タンにして返さないと友人としての面目が立たない……というかホントにやることなさ過ぎて暇だ

「やべえ、暇すぎて眠くなってきた——つて、ん？」

フタバ先輩の家に目を向けてみると何やら部屋の中の電気がやたらチカチカしている……つと、八乙女から電話？

「もしも——『ひ、ひひひヒロト先輩ですか!?!』うっさ、なに？」

『で、ででででした……幽霊出ました!』

「ホントか？」

「は、はい。部屋の中がチカチカしてて——息遣いも聞こえるし!」

身体を起こしてフタバ先輩の部屋の方を見てみるが不審者の姿は見えないが

『おい』

「ベイル、どうかしたのか？」

『悪魔の匂いだ』

「それ、どこだ？」

『あの女の居る部屋の中だ』

フタバ先輩の部屋の中って事は、もしかして幽霊の正体は本物じゃなくて悪魔だったって事か？ それなら——

「八乙女」

『な、ななななんですか?』

「少しフタバ先輩に代わってくれ」

『わ、わかりました』

なにやら八乙女さんから電話を渡される、さつきまでの話から考えると相手は門原君だろう

「門原くんか？」

『フタバ先輩、もしかしたら幽霊の正体がわかったかも知れないです』
「本当か？」

『はい、ベイルが先輩の部屋から悪魔の匂いがするって言ってるんです』

「悪魔の……ということとはもしかして」

『はい、先輩の部屋にいるのは幽霊じゃなくて——』

成る程、ベルトの中に封じられているとは言え悪魔であるベイルが言うのであればかなりの信憑性がある

『先輩、一番気配が気になるところに悪魔が居る可能性が高いです』

「……わかった、こつちでも確認してみる」

『俺もすぐそつちに向かいます』

それだけ言うとお話が切れる、成る程……この部屋に存在するのは幽霊ではなく悪魔だったか、そうかそうか

——おい、フタバ……なんか感情が荒ぶってるんだが

「気にするな……それより八乙女さん、これを返す」

「は、はい」

今までは暑さもあって中々元気が出なかったが、今ではそんなのが気にならないぐらい力に満ちている……そうかそうか、私の最近のストレスは全部悪魔の所為だったわけだ

——フタバ、暑い……精神がバカみたいに暑いんだが

私の中でクロハが何か言っているが何を言おうが今の私には関係ない……この苛立ちを、犯人を見つけて懺悔させるまではな

「狩谷さん、八乙女さん……犯人の正体がわかった、ガンデフォンを構えて部屋の隅によっておいてくれ」

「えっ？ ええっ？」

「あの……フタバ先輩？」

「いいいな？」

「は、はい……」

二人を部屋の隅に退避させたんだ……それじゃあこの部屋の中にあるゴミをしつかり掃除しないとなあ

先輩の部屋に悪魔がいる、ベイルがそう言うってから俺はベルトを巻いて先輩の部屋まで向かう、何かあった時すぐに逃げられるように先輩の部屋の鍵は閉めておかないという話になつているし到着して大急ぎで部屋の扉を開ける——と、そこには想像を絶する光景が広がっていた

「どこだ？ どこにいる？」

「あ、あの……先輩？」

「ああ門原くんか……濟まないが少し待っていてくれ、すぐに悪魔を見つけ出して討滅して見せるからなあ」

「ヒ、ヒロトせんぱあいッ！」

「門原くん！」

「狩谷、それに八乙女も……大丈夫だったか？」

「私たちは大丈夫だけど——」

「う、宇野先輩がおかしくなっちゃって」

「ああ……多分それは、幽霊の正体がわかったからかも」

とりあえずベイルの言っていたことを二人に伝えようとフタバ先輩のぶつ壊れ具合に納得したかのような表情になった

「と、とりあえず後の事は俺に任せて。ベイル、悪魔の場所は」

『目を瞑れ、俺が案内してやる』

ベイルの言う通り目を瞑ると、心臓の音がソナーのようになって部屋全体に広がっていく、壁をすり抜け場所は……寝室、そこに騒めきを感じた

「フタバ先輩、寝室ですー！」

「……！」

眼の色を変えたフタバ先輩は一直線で寝室に向かうと、そこにはサ

イのような見た目の悪魔が居た

「見つけたぞ悪魔！」

少しテンションが荒ぶっている先輩は怪人を見つけて早々にガンデフオンを放つと悪魔は地面に食い込むように避け、姿を消す

「待てえッ！」

『外だ、このままだと逃げられるぞ』

「わかった、先輩！ 窓開けますよ！」

「好きにしろッ！」

少しだけ高いが問題はない、外を見ると逃げようとしている悪魔の姿があった、姿が見えるならここから飛び降りればすぐに追いつける

『スパイダー』

「変身！」

そのまま飛び降りながらドライバーに押印すると蜘蛛の糸が俺の身体を包み込む

『仮面ライダーデモンズ』

デモンズの姿になった俺は飛び蹴りの体勢に入り悪魔の背中に思いつき蹴りを入れる

『~~~~ッ!?!』

「速攻で決めるぞ、なんか先輩の精神衛生上よくない気がするからなッ！」

着地と同時にオウインバスターを呼び出すためのスタンプを地面に押しして召喚してそのままガンモードで一撃をぶっ放しながら接敵する

「はあッ！」

『~~~~ッ!?!』

「もう一発！」

『アアッ!?!』

まずは拳を一発で続けざまに蹴り、何となくわかったがこの悪魔そこまで強くないな……この調子なら速攻で決められる

【スタンプバイ！】

【オーイングストライク！】

スタンプを押印して銃口にエネルギーをチャージしてなおも逃げようとする悪魔に向けて放つ、逃げることに集中しすぎていたのか悪魔はその一撃をもろに受けて爆散した

「門原くん！ 悪魔は!?!」

「倒したよ」

「そっか、倒せたんだ」

「これで一見解決ですね!」

「……いや、まだまだぞ。みんな」

一息ついたタイミングで未だ身体から熱気を放っているフタバ先輩が俺達の前に立つ

「契約者を見つけないければ悪魔は現れる……ならば契約者を見つけ、懺悔させねばなるまい！ 依頼は継続だ、悪魔の契約者探しをすろぞ！」

「……フタバ先輩は今回の件がよっぽど頭に來ているらしい、どうやらまだまだ、仕事は終わらないようだ」

第8話、 遭遇記録K―契約者探し―（A）

翌日、カズキに借りてた車を返した俺が事務所にやって来ると何やらげっそりした表情の八乙女と所長の姿が目に入る

「二人とも、大丈夫か？」

「ああ……うん……なんとか……」

「ヒロト先輩、今まで何してたんですか……」

「えっ？ 普通に車借りてたからそれを返しに――」

「それって、わざわざ就業時間中にしないといけない事だったんですか？」

「えっ、いや、それは別に――」

「ですよね!? それなのにわざわざ車を返しに行ったんですね！ 可愛い後輩であるこの私と！ 所長をほったらかしにして！」

「……なんかテンションおかしくないか？」

「私はいたって正常ですよ!? 正常です？ 至ってまともなんです!?」

いや、あからさまにぶっ壊れてるなコレ、もう駄目だ取り返しがつかない程にぶっ壊れちまつてる

「……なあ八乙女」

「なんですか!？」

「仮眠室、使うか？」

その一言を聞いた瞬間、さつきまで暴走特急みたいなテンションであつた八乙女の身体がピタッと停止する……と言つても俺一人で許可を出していいのかわからないし所長に許可は取っておく

「所長、仮眠室使つても大丈夫か？」

「……問題ないよ」

「だそうだ」

八乙女は無言のまま仮眠室まで猛ダッシュ、扉を閉めることなくベッドの中にダイブするとそのまま寝息が聞こえてくる……仮眠室のドアを閉めてどうして二人がこうなっているのかを考えると理由の検討はつく

昨日の夜、悪魔を倒した後にストレスを起点とした諸々の原因でぶっ壊れたフタバ先輩は所長と八乙女を伴い十時頃からまさかの調査を強行、一応会社としての権限でどうにかなる範疇ではあったらしくマンションの住人全員から事情聴取の後現状整理、そして終わったのが朝方らしい

「マジでウチが開店休業状態で良かったな」

「……聞こえてるよ」

「おつとすまん、軽率だった。それより所長も寝た方がいいんじゃないか？」

「……そうだね、とりあえずここで少しだけ仮眠を取らせて……それと……机の上に新しいスタンプ……おいて……ある……から……」

それだけ言い残すと所長もソファアの上で寝息を立て始めた、さてと……こうなると俺が普段から使ってるデスク代わりの場所がなくなるわけだが――

「そうだな、今日は所長の席借りるか」

丁度新しいスタンプが机の上に置いてあるとも言ってたし、丁度良いだろうそう思って所長の使ってるデスクまで向かうと小さいケースが一つ置いてあった。鍵もかかってないから中身を見るとそこには確かに新しいスタンプが一つ……このレリーフは

「コングスタンプか……だけど、今回の悪魔で使うか？」

言っちゃなんだが今回の悪魔は弱い部類に入る……偶然出来たんだろうけどわざわざ新しいスタンプを使う必要ない気がする。それこそオウインバスターを作ってくれたおかげで俺も戦いがだいぶ楽になったわけだし

「まあ、持っとくだけ持っとくか」

にしても、今回の仕事はフタバ先輩がぶっ壊れてるのもあるが相手が幽霊じゃなくて悪魔ならスタンプは回収しないといけない……そうなってくると契約者を探さないといけないわけだがSNSを駆使する八乙女も所長もダウン中……となると俺の取れる方法は一つ

「足を使って契約者を探すしかないか」

流石に寝てる二人がいるのに事務所をそのままにしていくわけに

もいかず事務所の鍵を閉めて看板を休業中にする。よし、これでオーケー……それじゃ早速契約者探しに向かうか、と意気込んで外に出たところで丁度フタバ先輩と鉢合わせた

「フタバ先輩、お疲れ様です」

「あ、ああ……お疲れ……その、二人は大丈夫か？」

「今はダウンしちゃってます、かなり疲れたみたいなんで」

「そ、そうか……申し訳ないことをしたな」

「そう思ってるなら後で謝ってなんか奢ってあげてください……それより契約者について何か分かりましたか？」

「いや、明確な目撃情報はまだない……正直私の方も、契約者には検討がつかない」

「そうですか」

この手の事件で大体契約者に判明するのは大体被害者の知り合
いって感じなんだが……フタバ先輩にも見当がつかなくなってなっちゃ
うと本当に全く知らん人が契約者って可能性が高くなっちゃうのが
キツツいな

「フタバ先輩、D・D・C・Uのデータベース使わせて貰う事って出
来ますか？」

「一応私の権限で使える所なら大丈夫だと思うが」

「それで大丈夫です、多分普通にスマホ使うより悪魔関連の情報は集
まると思うんで」

「そうか、それならついてきてくれ。オフィスに向かおう」

「了解」

不ABA先輩に連れられてやってきたのはD・D・C・U本部とい
うか別名高梨警備保障本社、相変わらず何度来てもあんまり慣れない
なこの場所は……とそんな感じで会社の中に入りエレベーターまで
向かっていくと――

「うおっ!？」

しまった、完全に周りへの注意が散漫になっちゃってた

「すいません、大丈夫ですか」

「あ、ああ……気にしないでください、大丈夫なんで」

「何をしてるんだ、後輩がすまない。迷惑をかけた」

「い、いえ、とんでもないです」

足を引っかけたままだった用務員さんに謝って改めてフタバ先輩のオフィスまで向かう。エレベーターに乗って地下に移動する……そう言えば少し聞いておきたいことがあったしこの際だから聞いてくか

「そう言えばフタバ先輩、鏑木隊員ってどうなったんですか？」

「鏑木か、彼は現在謹慎中だ」

「謹慎……」

「ああ、能力は優秀だったんだが今までもたびたび独断専行が問題視されていた……だがこの前の一件で本格的に問題が浮き彫りになってな、ほとぼりが冷めるまで自宅謹慎との処理を上層部が下した」

「それは何とも……」

こういうのを聞いてしまうとうちは個人経営でホントに良かったと感じてしまう。正直俺は独断専行とかしない自信ないし……最も、こういう会社に所属してたら俺が仮面ライダーやってることもないんだらうけど

「ついでに、ここが私のオフィス。ノートパソコンからもデータベースにアクセスできるようにしているから使うといい」

「ありがとうございます」

使用許可も貰った事だし早速データベースにアクセス、まず最初に調べるのはフタバ先輩が住んでいるアパート付近の監視カメラ映像。数日起こっているのだからわざわざ昨日の映像を見る必要はない

「先輩、具体的にいつから幽霊騒ぎ起こるようになったか覚えてます？」

「そうだな……確か二週間くらい前だった筈だ」

「了解です」

それなら大体二週間くらい前まで遡るのが良いか、ノートパソコンを操作して監視カメラの映像が保存されているフォルダを開く

とりあえず一番古い映像ファイルを2倍速で再生する——見た感じ不審者っぽそうな見当たらないな、同じアパートの住人っぽい人

たちがゴミ出しに来ている他には奥様方が井戸端会議をしているくらい

その次の映像があるを確認するが映っている映像はそこまで変わらない……こうなつてくると本当にアパートの近くに犯人はいないのか、その後もずっと映像ファイルに目を通してているが全然犯人らしい人物が見えない

「それらしい人たちは見つかったか？」

「いいえ、こつちは全然ですね……先輩は何をやってるんですか？」

「一応過去に恨みを買ってそんな人物の整理をな……しかし、こんな嫌がらせじみた方法を取るような人物は見当たらないな」

そう言っている先輩におそらく過去に捕まえたであろう人物の資料を見せてもらったが確かにいかにも凶悪犯ですって顔の人物ばかりだ……少なくともスタンプ使って幽霊騒動なんて嫌がらせをするような人物はいなさそうだ

「いつその事、別の視点で見えますか？　過去に恨みを買ったじゃないかって普通に同僚の犯行とか」

「考えたくはないがその線でも見てみるしかないか」

出口の見えない迷路に入ってしまったような感覚に襲われているが何にしる犯人を見つけなければどうしようもない……改めて気合を入れ直した俺はノートパソコンを使って監視カメラの映像を一から見直し始めた

第8話、 遭遇記録K―契約者探し―（B）

気合いを入れ直してからひたすら録画の早送りと巻き戻しを繰り返してみるがやっぱり不審者は愚か見知った人たちも見当たらない
「駄目だあ……ぜんっぜん見当たらない」

もしかしたら見つかるかも知れないと思ったがやはり不特定多数の人物の中から契約者一人を見つけるとなるとキツツイな、スタンプだつてそこまで大っぴらに出して歩くようなもんでもないしやっぱり見つけずらいのか？

「ん？」

「先輩、どうかしましたか？」

何かを見つけたらしい先輩に声をかけると手招きをして俺の事を呼ぶ。先輩のデスクに設置されているデスクトップのモニタを除くとそこに映っていたのは俺が見ていたのとは違う個所の監視カメラの映像

「先輩、これってどこの映像ですか？」

「アパートから少し離れたところにある監視カメラの映像だ……この部分を見てくれ」

進んだ映像を少しだけ巻き戻して再生を始める、ぱつと見だとそこまで変わった様子はないが映像を見てみると少し違和感を感じる

「なんかおかしいような……でもどこが？」

「……この部分だ、拡大するぞ」

フタバ先輩が違和感を感じた部分が具体的に何処なのかを確認するとそこに映っていたのは帽子を深くかぶった一人の少女と、彼女と話しをしている男の姿だった……映像が少し荒く確証は掴めていないが彼女は男から封筒のようなものを受け取ると、男にスタンプのよな形状のものを手渡した

「……これは」

「思わぬ収穫だ、顔はわからないが彼女がバイスタンプのバイヤーであるのに間違いはないだろう」

「それじゃスタンプを買ってるこの男が今回の犯人？」

「確証はないがその可能性は高いだろうな……門原くん、事件の方は君に任せても大丈夫かい？ 私はスタンプのバイヤーの方を当たってみたいんだ」

「わかりました、先輩の家の件は俺に任せてください」
「すまないが、任せた」

バイスタンプを売っている組織が何なのか、そもそも本当に組織であるのか、個人ではないのか……それを特定するのは俺たちにとっても重要な案件であるのには違いない。だから今回の一件は俺が一任してバイヤーについては先輩たちD・D・C・Uに任せよう

とりあえず後ろ姿ではあるが犯人の姿って言う証拠を掴んだ俺が次に向かうのは警察署、可能性を一つ一つ潰していくことを最優先にした場合次にすることは同じような事件が起こっていないかを確認すること

そもそも今回の事件自体フタバ先輩個人を狙った可能性が高い事件ではあるのだがそれを抜きにしても同様の犯人による事件が起こっていないかを調べてみることで大切だ

「お待たせヒロト君。ごめんねバタバタしてて」

「いえ、こつちこそわざわざ時間を取ってもらってありがとうございます」

「あはは……それで、今日は確かストーカー事件についてだったよね？」

「はい、スタンプを使ったストーキング事件とか怪物が部屋の中に居た系の通報って入って来てたりします？」

「ストーカーに関する通報はここ最近かなり来るけど、そういう通報はなかったかな」

「そうですか」

となるとやっぱり……というか案の定狙いはフタバ先輩個人って考えていいだろう。まあストーカーだからそれは当然だとは思っていたがもしかしたらがあるかも知れない……ってあれ？

「ストーカーに関する通報がかなり来るってどういうことですか？」
「ああ、ここ最近だと一番多い通報がストーカー事件なんだと、単純な件数だとバイスタンプ犯罪よりも上だね」

睦葉島の人口はそこそこ多いとは言え、人工的に作られた島である以上限界はある……そもそも単純な犯罪件数だけで見たら本島に比べたらかなり低いはずなんだ、まあバイスタンプ犯罪の件数が最も多いとか言う世紀末状態ではあるんだが、本当だって街によっては怪人が頻出したりするみたいだし、そこら辺は地域ごとなんだろう

そんなことはどうだっていいんだ。問題はストーカー事件の件数がバイスタンプ犯罪よりも多くなっているという事——

「新見さん、ストーカー事件の犯人について何か分かってることってあるんですか？」

「確か、一回だけ接近禁止令を破って捕まったことがあった気がする」

「犯人の写真とか見せてもらうことは出来ますか!？」

「流石にそれは無理だけど……名前くらいならまあ——」

「それなら、教えてくださいッ！」

「わ、わかったから落ち着いて」

そう言うと新見さんはペンを取り出して名前を書いてこちらに渡してきた

「山内^{やまうち} 慎^{しん}、それが名前だよ」

「山内……慎」

警察署からの帰り道、俺はフタバ先輩に連絡をする

「もしもし、フタバ先輩ですか？」

『門原くん……どうかした?』

「ストーカー事件について少し訊きたいことがあつて」

『訊きたいこと?』

「はい、山内慎って名前に聞き覚えありますか？」

『山内……どこかで聞いた事ある気もするんだが……すまない、思い

出したら連絡する』

「分かりました、お願いします」

フタバ先輩も山内慎の名前を何処かで聞いた事あるって言った、と言うことは少なからずフタバ先輩とどこかで知り合っているという事、新見さんの言つてたことを考えると接触禁止令が出されている人物が一人いる……かなり恐ろしい想像になるがもしかしたら頻発してるストーカー事件は——

そこまで思考を巡らせた所で、ふと変な気配を感じる

「ベイル、この気配は——ベイル？」

おかしい、ドライバーの中にいるベイルの気配を感じない……それだけじゃない、心の底が騒めくような奇妙な感覚は

「……なんなんだ、一体」

『それは君の心が感じてるからだよ、私の存在を』

「誰だッ!？」

気が付けばベイルとの繋がりだけじゃない、周りにいた筈の人も気が付いたら消えている——何がどうなってる

『そっか、まだ見えないんだね……あーあ、残念だなあ』

「見えない？ お前はさつきから何を言つて——」

『見えないなら仕方ないや、バイバイ……時が来たら、また会おうね』
それだけ言い残すと、俺に語りかけてきた何かの声が聞こえなくなり、気が付けば周りの音も、ベイルとの繋がりもしつかり感じ取ることが出来る

「ベイル」

『……なんだ』

「お前、さつきの聞こえてたか？」

『さつきの？ 一体何のことだ。お前が突然立ち止まっただけだろう』

ベイルも気付いてなかったって事は、さつき俺の耳に聞こえた声は悪魔じゃないのか？ そもそも……さつき聞こえてきた声は本当に俺が聞いたものだったのか？ 暑さにやられた幻聴って方がまだ説得力がある

「……いや、それよりも今はもつかいフタバ先輩のアパートだ。外に何かしらの情報が転がってるかも知れない」

そうして先輩のアパートまでやってきたわけだが、とりあえず昨日戦った場所から見に行ってみるか。アパートの裏手に回って昨日戦った場所を見してみるのだが戦闘の痕跡以外にはそこまで目立った証拠はなさそうだな

「確か昨日の悪魔はアパートの部屋からすり抜けて降りてきたんだよな」

契約者がこの下にいたって可能性もあるがそもそもここに契約者は来てなかったのか……って、アレは——

「これって、もしかしてカメラか？」

悪魔が降りてきた場所の近く、昨日は暗くて見えなかった場所にあったのはデジタルカメラ……もしかしたらこのカメラは犯人の持ち物ってこと——

「君、そこで何をしてるんだい？」

「えっ?」

声をかけられた俺が振り返るとそこに立っていたのはD・D・C・Uの制服を着ている一人の男だった……どうしてこんな所に

「D・D・C・Uの人ですか？」

「そうだが……君は一体」

「ああ、俺は門原ヒロトです。今は——烏野先輩に頼まれたことを調べてる最中で。そう言う貴方は？」

「俺は進藤だ、それにしても隊長に頼まれた要件とは一体なんなん——」

「あつ、すみません電話が」

この場所に唐突に現れた隊員を信用する程俺もお人好しじゃない、それに丁度いいタイミングでフタバ先輩から電話が来た……とりあえず電話を口実に進藤と名乗った隊員から離れてフタバ先輩の電話に出る

『もしもし、門原くんか』

「はい、お疲れ様です先輩……それで、どうかしましたか？」

『ああ、実は山内慎という名前を思い出してな』

「ホントですか？」

『ホントだ、一応ウチの部署で事務員をしている男だな。私も何度か話をしたことがある』

「……事務員をしている人、写真とか送って貰うことって出来ますか？」

『ああ、別に構わないが——』

『——坊主！ 後ろだ！』

急に聞こえてきたベイルの声で後ろを振り向くとさっきの隊員が鉄パイプをこちらに向かって振り上げていた。声で気付いたからなんとか避けることが出来たが声をかけてくれなかったら確実にぶん殴られてた自身がある

『門原くん、何があった!？』

「先輩、写真を送ってもらおう必要はないかもです……っ！ それより、進藤って隊員に——あぶねっ！ 聞き覚えあります?」

『進藤? それなら隊員の一人だが今日は普通にこちらに来てるぞ』

「——ありがとうございます、それを聞いて良かった。それじゃあ」

そう言つてフタバ先輩との電話を切ると、改めて俺に殴りかかってきた進藤大尉（偽）に対して向き合う……さて、おおよその予想はつくというかストーリーカー被害で一回捕まってる男がフタバ先輩の勤める会社で事務員をしてた男ってなったら——これはもう確定でいいよな、多分

「いきなり何すんですか!？」

少し白々しい気もするがとりあえず驚いてみるか

「いやあごめん、もしかしたらやっぱり君が不審者かも知れないと思ってるね」

「勘弁してくださいよ……ねえ、山内さん」

元々張り付けたようだった笑顔から無表情に戻る、そっちが本性つてことで良いんだろうな

「気が付いてたのか」

「そりゃあね、今D・D・C・Uはバイヤー探しの初動でてんでこ舞いでしようし。あの先輩が頼むって言ったのにこっちに増員寄越すとは思えませんかね」

元々フタバ先輩は信頼をした人物にはとことん信頼を置くし、信頼していない人物にはある程度の距離を保つタイプの人間だ……それに俺が仮面ライダーって事をあの人も知ってるからな

「それで、どうして襲ったんですか？ 山内慎さん」

「……君が隊長に付きまといっているからだよ」

「付き纏っているのはアンタの方でしょう」

「違う！ 俺はただ彼女の護衛をしているだけだ！」

あー、この人アレだ、話を通じないタイプの人だ

「バイヤーからスタンプ買って、悪魔を部屋の中に侵入させて……もう護衛じゃなくて犯罪者だよ」

「うるさい！ 大体お前こそ隊長の何なんだよ!？」

「高校時代の後輩だよ……それにフタバ先輩はウチの事務所の依頼人」

「なっ、名前で——お前もう許さないからな！」

『クロサイ』

自分にスタンプを押すと、契約書のようなものがパラパラと現れ際のような悪魔が姿を出現した

「やれっ！」

山内がそう指示をすると俺に向かって角を突き出して突撃してきた

「いくぞバイル」

『スパイダー』

『いいだろう——Deal』

ベルトのスタンプ台に一度目の押印をした後、突っ込んでくる悪魔を回し蹴りで飛ばし構えを取る

「変身！」

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

「スタンプ渡して、さっさとお縄につきやがれッ！」

こっちに向かって攻撃をしてきた悪魔——クロサイデッドマンの攻撃を受け止めてから空きの腹に蹴りを入れる。コイツの攻撃は基本的に突進攻撃が主だから対応しやすい。さっさと倒してフィニッシュutte——

「なんだコイツ!? 前より力が……強ええッ!？」

想像以上の力に押された俺に向かって突っ込んできたクロサイデッドマンの一撃を喰らって胸のアーマーに火花が散る

「ぐッ！」

そのまま押し倒されクロサイデッドマンの追撃をもろに受け続ける、一撃を受けるたびにアーマーが火花を散らし破片が飛び散る……かなり固い素材で出来てるデモンズのアーマーを砕くって、この前とは比にならないレベルで力上がってんじやねえかッ!

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

ベルトを操作して左腕にエネルギーをチャージして右わき腹に思い切り拳を叩き込むと、クロサイデッドマンは悲鳴を上げながら吹き飛び壁に叩きつけられるがすぐに立ち上がった

「マジか、アレ喰らってもまだ無事とか、前回とは攻撃力も防御力も段違いじゃねえか……」

『敵の力が上がってるのもそうだろうが……我々自体の出力も下がっている』

「出力が下がってるって、どういう事だ——あつぶねッ！」

『そのままの意味だ、俺と貴様の間にある契約が不安定になっている』
「どうしてそんな——」

もしかして、あの時の声が原因か……って今はそんな事よりも目の前の悪魔だ。攻撃をもろに受けまくった所為で左のアーマーは砕け

ちまつてるし右も胸のアーマーにもヒビが入ってあと一撃でも喰らったらヤバイのは目に見えてる

「ベイル！ どうすればこの状況打開できそうだ!？」

『契約者を叩け』

「それ以外で頼む!？」

『それなら、あの女が作ったスタンプを使え』

「そっか！ コングスタンプ!」

正直存在を忘れていたが、確かにアレなパワーで押せるかもしれない……そうと決まれば、早速使う！

『コング』

『Add』

『Decide up』

『コングゲノミクス』

エネルギーが両腕を巡り形成したのは籠手のような剛腕、何となくロケットパンチできそうな剛腕を軽くぶつけると向かってきているクロサイデッドマンを思い切りぶん殴る、拳は突進してきたクロサイデッドマンの角に辺りへし折り眉間にぶち当たった

「このまま——吹き、飛ばすツ!!」

思いつきり力を込めて振り切るとクロサイデッドマンは俺たちの戦いを見ていた山内の真横を通り過ぎてアパートの塀に叩きつけられた。何が起こったのか理解するのを拒絶しているであろう山内を無視してベルトを二度押し込む

「正直身体がだいぶきついから一撃で決める!」

【More】

【コングデモンズレクイエム!】

胸の前で拳を突き合わせてから全力で拳を突き出すと噴煙と共に拳が撃ちだされる……まんまロケットパンチになったその一撃は塀に叩きつけられていたクロサイデッドマンの身体にめり込んで爆発を起す

「ふう……」

完全に悪魔が爆散したことを確認した直後、デモンズの変身への変

身が解除された――

今回の顛末、悪魔を倒したあと慌てた様子で逃げようとした山内を取り押さえ警察に連絡、少し時間が経ってからやってきた新見さんにスタンプと山内の身柄を引き渡して今回の依頼は無事完了したのだが……

「はい？　山内がフタバ先輩のストーキングを始めたのはスタンプを手に入れた一週間前？」

「そうみたいなんだよね、今回に関してはストーキングじゃなくてバスタンプ犯罪での立件だからそこら辺の話を聞いたんだけど烏野フタバさんのストーキングを始めたのは一週間前で悪魔を使って侵入したのは君たちが依頼された日が初日らしい」

と言うことは二、三週間前からフタバ先輩が遭遇している幽霊騒動と山内は実質的に無関係と言うことになるのではないだろうか

「この件烏野さんには――」

「とりあえず伝えないでおきます……本人すっきりしてるみたいだし」

触らぬ神に祟りなし、今回に関してはこれ以上の深追いは止めておこう……何はともあれ、今回の幽霊騒動は一件落着いたのでとき

第9話、 配信記録B―動画と欲望と新ライダー―
(A)

あの幽霊騒動から二週間の時が流れたある日、俺は狩谷の研究室で検査を受けていた……というのも二週間前に起こった幽霊騒動から俺とベイルの間に結ばれていた契約が不安定になっておりそれがここ二週間でさらに悪化したからだ

「どうだ狩谷」

「門原くんの身体には異常がないね……時間がある時にデモンズドライバーの方も見てみたけどそつちも異常なし」

「……となると、本格的に理由はわからずか」

正直このままじゃ仮面ライダーとしての活動は愚か悪魔関係の依頼解決にまで影響を及ぼしかねない

「一番いいのは不安定になってる契約は安定する事なんだが――」

「不安定になった契約を安定化させる方法何て私も知らないしお姉ちゃんの資料にもものつてなかったし」

「打ち止め……だな」

進まない話をして至って仕方がない

「まあ今はゲノミクス一回で下がった分の出力は補えてるし、また何かあつたらその時考えよう」

「……そうだね」

不安そうにしている狩谷に対してグッドサインを見せると軽く笑っておく……正直俺もこれからどうなるのかわからないけどやらないといけない事は悪魔関係の事件を解決することだ。何か起こつたらその時に考えればいい

そんな事を話した翌日、俺が事務所に赴くと先にやって来ていた八乙女がソファに寝転がりながらガンデフォンを眺めていた

「おはよーっす」

「あつ、ヒロト先輩！ おはようございます」

「おはよう、門原くん」

「おはようございます所長、それで八乙女はさつきとそこを退け」

「えー、ここ最近色々あつて疲れてるんですけどー」

「じゃあ寝転がり直していいから一回起きろ、座れん」

その言葉を聞いた八乙女は一度身体を起こすといそいそと動き始めた。このソファ一応俺のデスク替わり何だから占領されると困る

「——つておい」

「何ですか?」

「どうしてこつちに頭を置く」

「別に良いじゃないですか……つていうか先輩の太もも固いですね」

「喧しい」

今までの多少可愛げのある後輩成分が完全に抜けて現在は小生意気な後輩となつてしまった八乙女に関してはもう何を言ったところでしようがないから放つておく、飽きたらそのうち動くだろ

「所長、何かやることます?」

「今は特にないかな」

細々とした依頼は無いがここ数日だとパツタリ依頼も来なくなり平和そのものだな最近……それにしても

「さつきから八乙女は何見てんだ?」

「なにつて、バイチューブですよバイチューブ」

「バイ……チューブ?」

「その反応、もしかして先輩使つてないんですか?」

「……いや、使つてるぞ。使つてるが……そんなずつと見るようなのがあるか?」

料理動画くらいしか見ないからわからないんだが……今どきの高校生が見るような動画——まああるっちゃあるのか?」

「ありますよお、これとか」

そう言つて八乙女が見せてきたのは男二人組が何かしらの企画をやっている動画。確かに高評価の所が何千とかになつてるから人気

あんま使わないSNSを使って適当に検索をかけてみるがそのまま気になる様子はなかったのだが唯一気になる単語が見つかる

「なあ八乙女」

「何ですか？」

「この迷惑系バイチューバーって何なんだ？」

「ああ、最近話題になってますよね……えーっとですね」

八乙女から迷惑系バイチューバーについて説明してもらった

——迷惑系バイチューバーは売名やらなにやらで再生数を伸ばすために他人に迷惑をかけることもいとわれない動画投稿者の事らしい……自分が稼ぐためとは言え叩かれることをいとわずに頑張るのは理解できんけど

「それで、そんなのが最近はやってんのか？」

「流行ってるって訳じゃないですけど、何だかんだ言っても固定ファンはいますよね……この人とか」

そう言っで見せてきたのは制裁系とタイトルに書かれている投稿者の動画だった。動画の内容を見ると最近ちよつと話題になったらしい迷惑系バイチューバーに制裁を下すという内容だった。まあやってることは迷惑系動画の投稿者に水ぶっかけたり小麦粉ぶっかけたりするようなやりすぎなイタズラって感じだが……こんなのが流行ってんのか

「こんなのが流行ってんだな」

「さっきも言っただけど流行ってるわけじゃないですよ。ただ結構話題に上がることが多いですね……ほら」

確かに話題になってるな、具体的に言うとな擁護派と否定派に分かれているみたいだな、件の投稿者が上げている投稿も見てみるが最新の投稿が少々気になった

「なあ八乙女、この一番最新のツイート」

「えーっと、ああこれですか——『次は生放送、いつもより過激に行きます』？」

何とも言えないがどうにも気になる、少し八乙女にも頼むか

「八乙女、どこで生放送が行われるか見つけることができるか？」

「えっと、SNSで探してみますね」

そう言つて八乙女に調べさせている間に俺もとりあえず狩谷に書き置きを残して社長のデスクからカバンからスパイダーバイスタンプとデモンズドライバーを取り出す

「ベイル」

『……なんだ』

「今の俺とお前の契約はどれだけ不安定になつてる？」

『今のまま行けば後何回か変身をすれば契約が完全に切れるだろうな』

「具体的に何回でダメかわかるか？」

『さあな……だが忘れるな、お前と俺の契約が不安定になる程、お前の身体に負担がかかる事を忘れるな』

「……わかつてる」

「あつ！ 先輩見つけましたよ！」

ベイルとの話をひと段落させるとそのタイミングで八乙女がこつちにガンデフォンの画面を見せてくる……場所は、少し事務所から離れてるな

「八乙女、生放送が始まって相手が移動しだしたら教えてくれ……嫌な予感がするから現場に向かう」

「わ、わかりました！」

カバンを背負つて事務所の下に降りてからバイクのエンジンをかける……なんか嫌な予感がするが、結局の所何かあった時は俺が止めればいい。そんな事を考えながらバイクにまたがったタイミングで一人の少女が目の前に現れた

「やっほー、門原ヒロトさん？」

「どうして俺の名前を——つてそれはどうでもいいか、とりあえず依頼なら上に人いるからそつちに」

「ううん、依頼じゃないよ。アタシは君と話に来ただけ」

「俺と？」

「そつ、君と話しに来たんだよ？ 仮面ライダーデモンズ」

その言葉を聞いた瞬間、咄嗟に身構える——がそれを見た少女は笑

顔を見せて言葉を続ける

「警戒してくれるのは嬉しいなあ、でもさ……今回はホントに挨拶しに来ただけだから安心して？」

「お前……一体何なんだ？」

「アタシ？ アタシは國本キミ……クリスパーのメンバー、かな？」

「クリスパー？」

「うん、君たちが解決してる悪魔を生み出すスタンプを売ってる組織の名前……アタシはその一員」

バイスタンプを売ってる組織の、一員……ってことはあの監視カメラの映像に映ってたのはコイツか

「それで、その組織がメンバーが一体何の用だ？」

「何度も言ってるでしょ？ 挨拶に来ただけ……君たちの組織じゃないけどあの大きい方も私たちの尻尾を掴んだみたいだし。どうせなら顔位は知っておいて欲しいでしょ？」

「そんなこととしていいのか、俺は普通に捕まえるぞ」

「無理だよ……今の君じゃアタシ達は捕まえられない、それじゃあね」
それだけ言い残すと車庫の壁に通常のバイスタンプとは違う……謎のスタンプを押すと蝶に包まれてそのまま姿を消す。それより少し後に八乙女の焦った声がスマホから聞こえてくる

『せ、先輩！』

「……どうした？」

『生放送始まったんですけど、ス、スタンプ持ってます！』

「わかった……それじゃあ急いで向かうから場所教えてくれ」

気になることが出来ちゃったがそれはそれとして今やるべきことはスタンプを出したって言う奴を止める為にバイクを走らせた

第9話、配信記録B―動画と欲望と新ライダー―
(B)

「八乙女、今どういう状況だ!?!」

『えっと、配信者さんが悪魔を出して……それで今はD・D・C・Uの人達と戦ってる所です!』

「配信、だったよな? 止まる気配はあるか?」

『そのうち消されると思いますけど、今すぐは無理です!』

「わかった、大急ぎで向かう」

八乙女にそれだけ言い残すとバイクに乗ったまま腰にデモンズドライバーを当てる。こういうときに本当有り難い自動装着機能でベルトが出現し固定される

『スパイダー』

【Deal】

「変身ッ!」

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

バイクに乗ったままベルトにスタンプを押印すると蜘蛛の糸が全身に巻き付き俺の姿を仮面ライダーデモンズへと変身させた。その直後に赤い電撃が身体全体を走るがそれを気にしている余裕はない

そのままバイクを走らせていると俺の耳に銃撃音と金属がぶつかるような音が聞こえてくる。ある程度目視できるようになった場所にバイクを止め悪魔に向かって走りだす

銃を構えている隊員たちの上を跳び越すとそのまま飛び蹴りを悪魔へと向けて放つ

『グアッ!?!』

「先輩、後は俺が」

「……わかった、我々は契約者の方に向かう」

少し離れた場所に居たフタバ先輩にそれだけ伝えると興奮した様子の悪魔……あの見た目的に、ウシ？ いやバッファローか。バッファローデッドマンに向き合うと構えを取る

『ウゝオゝオゝッ!!』

「雄たけびも荒々しいなッ！」

そうやってこっちに向かって攻撃を仕掛けてくる。初撃は——突撃か。その一撃をローリングで避けつつ地面にオウインバスターのスタンプを押印して武器を召喚すると蹴り上げてキャッチ。ガンモードをぶつ放す

『アゝアゝッ!!』

だがその攻撃を受けている内にダメージに慣れてきたのか銃撃を物ともせず真っ直ぐ進んでくる……この調子だとダメージ慣れるつてのは厄介だな、振り上げられた拳に蹴りをいれて弾きそのまま距離を取る

今の俺じゃあダメージを一撃でも受けたらアーマーがぶつ壊れかねない……その証拠に二週間の間にあったこまごまとした悪魔災害でも一撃喰らっただけでアーマー割れるは変身の維持が難しくなるは散々だったからな

「パワーにはパワーだな」

『コング』

『Add』

『Decide up』

『コングゲノミクス』

コングスタンプを使ってゲノミクスをすると両手に幽霊事件の時にも使った剛腕が現れる、軽く腕を振り回しつつ接近してきたバッファローをぶん殴る

「さあ、このタイマンもそろそろ終わらせよう」

契約者の方に向かったフタバ先輩たちが逃げようとしている契約者の事を捕まえているのを見た上でドライバーの側面を二度押し込む

【More】

【コングデモンズレクイエム！】

右腕の剛腕から煙が噴き出ると一步前に踏み出す。急加速した身体を使って右腕を前に突き出すとそのままバツファローデッドマンを殴り飛ばし、角の破片を吹き飛ばしながら爆散した

「……流石にこのまま変身を解くのはアレか」

先輩たちの方に近づこうと思ったがその前にガンデフォンを使って八乙女に連絡をする。さっきまで連絡を繋げたままだったこともあり二コール程で通話が繋がった

「八乙女か？」

『先輩、大丈夫ですか？』

「ああ、こっちは終わったよ……それよりも、配信の方はどうだ？」

『配信も切れました、何とか解決したみたいで良かったです』

「そうか、それなら一安心——」

一安心だな、と言葉を続けようとしたタイミングで俺の身体に悪寒が走る——いや、俺だけじゃなくてその場にいた全員がそれを感じていたと思う、それが特に強烈な方を見ると軽やかな足取りで歩いてきたのはさつき俺の前に現れた少女、國本キミ

「君、ここは立ち入り禁止で——」

「待てッ！」

國本に声をかけようとした隊員の側に駆け寄った瞬間、彼女はスタンプを地面に押印する。それと同時に辺りには蝶の鱗粉が吹き荒れる。寸での所で隊員を後ろに突き飛ばすことは出来たが鱗粉の攻撃をもろに受け……俺の全身に激痛が走る

「ぐっ——あああああああッ!!」

激痛と共に火花が全身を走り、ダメージに耐え切れなくなったのか変身は解け俺はその場に膝をついた

「あーあ、もろに喰らっちゃいましたか」

「お前……」

「門原ヒロトさん、今は貴方に用がある訳じゃないんですよ」

膝をついたまま動くことが出来ない俺の横を通り過ぎると先輩

たちと一緒にいる契約者の元に真つすぐ向かっていく
「と、止まれっ！」

隊員たちはいつせいに銃を構えるがそれをみた國本はつまらなさ
そうな表情を向けてスタンプを持った腕を振るう。瞬間——風の斬
撃ともいえる一撃が隊員たちを襲い吹き飛ばされる。辛うじてその
場にとどまる事の出来たのはフタバ先輩だけ

「あら、随分とタフな人もいるんですねえ」

「お前は……一体」

「アタシですか？ アタシはクリスパ、貴方達の探しているスタン
プのバイヤーって奴です」

「……そうか、ならばここでお前を拘束するッ！」

「無駄ですよ、只の人間じゃあアタシには勝てない」

そう言った瞬間、國本は手に持っていたスタンプを自身に押印する
『バタフライ』

その瞬間、スタンプから現れた無数の蝶が彼女の身体を覆い隠し、
はじけ飛ぶと同時に現れたのはデッドマンとも異なる……蝶を模し
た異形の化け物。その化け物はフタバ先輩を蹴り飛ばし目の前で怯
えている今回の契約者に向けて言葉をかける

「ねえ？ キミ……名前は何？」

「な、名前……日暮、ひぐれ円まどか」

「日暮マドカくんかあ……君の願望はなに？ 力を手に入れて何がし
たい？」

「きゅ、急に何を——」

「良いから答えて、君がしたくてスタンプを買ったの？」

「ぼ、僕は……有名になりたいくて——」

「有名になるかあ、いいねえ」

何となくだがこのまま会話を続けさせるのはマズい、オウインバス
ターを召喚した俺は銃口をあのかげ物に向けて一撃を放つ。背中に
当たった一発は火花を散らすダメージを与えられている様子はな
い

「……ごめんねえ、お話は少し後——先に片付けないといけないのが

出来ちやった」

そう言うところらを振り返った化け物は手を軽く払うと地面を挟りながらこちらに斬撃が飛んでくる。地面で視認出来たお陰でかわすことは出来た……ならこのまま——

「変身ッ！」

『デモンズ』

走ってあの化け物に向かって拳を突き出す化け物に当たる直前で風が障壁のようになり身体を弾き飛ばした

「あーあ、あのまま寝てたら何もしなかったのに」

「そうはいかないんだよ、あのまま話をさせてるとヤバい気がしたからな」

「……ふーん、それなら予定変更。ここで潰しちゃおっかな」

悠然とこちらに向かって歩みを進めてくる化け物を眼前に捉えつつ、俺が取り出したのはモグラのバイスタンプ……風の障壁を作るのが能力だとしたら貫通力で勝負をするしかない

【Decide up】

【モグラゲノミクス】

スタンプを使って毒々しい色のドリルを出現させ攻撃を仕掛ける。その一撃を避けようとしていなかった化け物だがその直前で腕に付いたドリルが高速回転しているのに気付いたのか身体を逸らす

「おっと危ない」

「避けたって事は、正解かッ！」

そのまま攻撃を続けていくが目の前の怪物はただ避けるだけでこちらに攻撃を仕掛けてこない……何かを狙ってるのか、それとも時間稼ぎが目的なのか……いや、そんなのどっちでも良い。相手が何かを狙っているうちに速攻で——

「——なにっ？」

ドリルを使い攻撃を当てようとした瞬間、自分の意思とは関係なしに回転が止まった

「どうして——」

「どうしてって、正解は……鱗粉でした、それに私の鱗粉はこんな事も

出来るんだ」

そう言った直後、化け物が指を鳴らすとドリルが爆発を起こした。腕が千切れてもおかしくない威力の一撃を受け腕の感覚がなくなる……それを気にした様子の無い化け物は風の斬撃を俺の身体に向けて放つ

「ぐっ……あ——」

攻撃を喰らった俺はその場で動くことも出来ず倒れると砕けるようにデモンズのアーマーも消滅する。辛うじて意識は残っているがそれでも身体を動かすことはできない——そんなことお構いなしな化け物は頭を潰そうと足を上げた瞬間、肩から火花が散る

「今度は何？」

少しイラついた声音でそう言った化け物が見ている方を見る

「——しよ……ちよう？」

少しずつ消えていく意識の中で最後に見たのは、ガンデフォンを構えた所長——狩谷ミサキの姿だった

「門原くん……ごめん」

八乙女さんが電話で何かはしている声を聞いた私は、そこで門原くんが悪魔退治に向かった事と、私たちの知らない何かと戦っていることを聞いた……それを聞いて嫌な予感がした私が門原くんたちの居る場所に向かうと……そこに広がっていたのは酷い光景だった

色々な場所に倒れているD・D・C・Uの隊員に壁に叩きつけられているフタバ先輩——そして、殺されかけている門原くんの姿

「はあ……また邪魔者、次から次へといい加減にしてくれないかな？」

「貴方が、これをやったの？」

「そうだよ。アタシはただ仕事をしに来ただけなのに邪魔者が多くて困っちゃう」

悪びれた様子もない化け物に対して、私の心に怒りの炎が灯る……けど、こういう場面だから怒りに身を任せるのはダメだ。一度深呼吸をしてから真っ直ぐ化け物の方に目を向ける

「それで、貴方もアタシの邪魔をしに来たの？」

「……そうだよ、私は貴方の邪魔をする」

「出来ると思うの？　ここでボロボロになってる門原ヒロトを見ても？」

「できるできないじゃないんだよ……やらないと、何も始まらない」

「はー、呆れた。只の人間が私に勝てるはずないでしょ？」

「只の人間……そうだね、それでも私は——貴方の邪魔をする」

そう言っただけで私が取り出したのは、もう一基のデモンズドライバー

「ッ!?　どうして、貴方もそのベルトを——」

「作ったから……私も誰かを守るために」

このベルトは悪魔の力を必要としない……もしも悪魔と別れないといけなくなつた時、人の力で人を守るベルトの最初の一步。強化エンジンO・V・E・Rを搭載したデモンズドライバー

ドライバーを腰に巻くと現れたホルダーに収納されているスタンプを手取る

『クワガタ』

【Deal】

スタンプを押印すると同時に出てきた機械仕掛けのクワガタが私の周りを飛び回り、目の前の怪物を門原君の近くから弾き飛ばす

「行動は身を結ぶ、門原くんがそう教えてくれた……見てて、お姉ちゃん！　変身ッ！」

【Delete up】

【Unknown】未知なる

【Unlest】混沌が

【Unlimited】超える

『仮面ライダーO・V・E・R DEMONS』

赤と青の波紋を放っていたドライバーにもう一度押印すると、私の周りに展開された電子的な空間の中で鎧を身に纏う。インナーは門原くんのデモンズを、そして装甲はお姉ちゃんが昔使ってたベイルのデータを参考にして作り上げた新しい鎧。それを身に纏い変身が完了すると同時に複眼が黄色く輝く。この姿が私の作った新しい仮面

ライダー

「行くよ、絶対に……あなたの好きにはさせないッ！」
仮面ライダー、オーバーデモンズだ

第10話、 配信記録B―無茶と欲望と仮面ライダー

―(A)

【Delete up】

【Unknown】☒未知なる☒

【Unlest】☒混沌が☒

【Unlimited】☒超える☒

『仮面ライダーO.V. E. RDEMONS』

「行くよ、絶対に……あなたの好きにはさせない！」

オーバーデモンズに変身した私を見て、目の前にいる化け物は少しの困惑と苛立ちを感じさせながら言葉を発する

「最悪、まさかもう一人いるとは思わなかった――なあッ！」

私に向かって放たれた風の斬撃、少しも見えずらいけどオーバーデモンズなら避けられる。バックステップから高跳びのようにジャンプをして風の斬撃を避ける――そして着地と同時に背中についてるアームを展開して化け物を掴む

「なにこれッ!？」

「はあッ！」

そのままこちらに引き寄せて思い切り、拳を叩き込むと同時に拘束していたアームを解除。そのまま落下させる

「っ!？」

「もう一撃ッ！」

そして落ちてきたところに蹴りを入れる

「ぐあッ――」

「このまま攻めきるッ！」

「そんなこと、許すわけないじゃんッ！」

「えっ――ぐ、うああッ！」

流星に連続で反撃をすることが出来ず、もう一撃喰らわせる前に光の粉のようなものが私の周りにまき散らされ、爆発を起こす。何とか防御の姿勢はとれたけどアレをもろに喰らってたらマズかった気が

する

「まったく……あんまりここにいるのも都合が悪いね。目的を達成できないのは惜しいけど——ここは退かせて貰おうかな」

そう言うのと彼女は地面にスタンプを押すと地面から大量の蝶が溢れ出し、あの化け物はそれに紛れて完全に姿を消す

「逃げた——ってそれよりも」

今は逃げた化け物の事よりも倒れたまま動かなくなってる門原くん達だ。倒れている人たちの息を確認しながら、私は病院に連絡をした

あれから少しして、病院に搬送されるのを見送ったけど……その中でも一番重傷だったのが門原くんだとお医者さんから聞いた。D・D・C・Uの隊員やフタバ先輩も意識は失ってたけどあくまでも強い衝撃を受けたことによつて意識を失っただけ、怪我自体が一番重いものでフタバ先輩の負つていた打撲

「所長、門原先輩……大丈夫ですよね？」

「それは……まだ、わかんない」

門原くんは未だに意識を取り戻さない。彼の負った傷で最もひどかったのが右腕の裂傷、外部からかなりの圧力を受けたみたいで意識を取り戻したにしてもしばらくの間は今まで通り動かすのも難しいって先生は言ってた

「そう言えば八乙女さん、今回の悪魔との契約者の子は？」

「後から来た新見さんがどうしてスタンプを使ったのか事情を聞いてます」

「そっか……よしっ、八乙女さん！ 今は私たちが出来ることをしよう」

「そうですね、それじゃ私も……怪物の心当たりがないかを探してみますー！」

「お願い」

やらなければならぬ事はかなりあるけれど、今優先すべきはあの

化け物が何を狙っているのか……今回の契約者に一体何をさせようとしているのか

「それを聞くためにも、話を聞きに行かなきゃ」

新見さんが事情を聞いているのは確か病院のロビーだって言うてたっけ。まだ話していると良いななんて考えながらロビーまで向かうと幸いなことに新見さんと話している男の子の姿はあった……高校生くらいの子を男の子って言うていいのかわからないけど、今はそんな事おいておく

「新見さん、少しだけ彼から話を聞いてもいいですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

新見さんの許可を取って私も椅子に座って男の子に話しかける

「初めまして、私は狩谷ミサキ。君の名前は？」

「……日暮マドカ」

「日暮くんね……何でスタンプをとかはそこの刑事さんに話したと思うから、省かせて貰うけど良い？」

「……良いよ」

「ありがとう。それでなんだけどあの化け物が君を狙った理由とかに心当たりはある？」

「ない、正直なんで話しかけてきたのかも理解できないのに……理由なんてわかるはずない」

やっぱりなんであの化け物は彼を狙ったのかはわからないか、それじゃあ切り口を少し変えてみよう

「それじゃあ、あの化け物と何を話したかとか覚えてる？」

「それは覚えてるけど……意味わからない事を聞かされただけ」

「意味の分からない事？」

「うん、願望は何とか……力が欲しいかとか」

願望はなにかに、力が欲しいか……もしかしたらそれが何かのヒントになるかも知れない。けどまだ足りない気がする

「他には、何か聞かれたことある？」

「……何がしたくてスタンプを買ったのかも聞かれた」

何がしたくてスタンプを買ったのか……駄目だ、まだ何かのピース

が足りない気がする。もつとこうガツチリと嵌るようなピースが欲しい、それに彼の口ぶりを見た感じだとやっぱり聞かれたことはそれで最後だと思う

「でも、何でスタンプに手を出しちゃったの？ スタンプを買えるだけのお金があるならもつと別の事だって——」

「別に金なんてどうでもいいんだよ」

「えっ？ ただ有名になりたかっただけ。最初の頃は動画上げれば何十万って視聴回数が付いたけど最近はそのが落ちて来てて……」

「もしかして、それでスタンプに？」

「……今は過激なことをすればするほど視聴数が稼げるんだ。炎上商法とか言ってくる奴もいるけど俺は世界に名前が売ればそれでいいし」

有名になりたい、その気持ちは少しだけわかる……私の場合自分
の事じゃなくて他人お姉ちゃんに有名になって欲しかったわけだけ。けどこんな事をして有名になったってきつと意味はないと思う

「君は、どうして有名になりたかったの？」

「そりゃ、有名になるってなんかいいじゃん。それに有名になれば楽しんで生きていけそうだし」

「……楽に生きていける道なんてないよ」

「は？ そんなのわかんねえじゃ——」

「わかるよ、きつとどんな人生だって必ずどこかに困難はある……楽して生きていける人生なんて、絶対はない」

私のお姉ちゃんが行方不明になってから大変だった。それまでは悪魔の事とか何も知らずに生きてきたけど。お姉ちゃんが居なくなつて、悪魔の事とかベイルとかデモンズとか……色んな情報が私の所にドバつときて、何回も全部捨てて私には関係ないって思おうかと思つた

「じゃあ、姉ちゃんはなんか苦労してんのかよ」

「してるよ、一杯……仕事の事とか、家族の事とか、一杯苦労してるし、今だって困難に直面してる所」

改めて考えると、門原くんには助けられてたなあつて思う所はたく

さんある、会社の従業員になってくれたのだってそうだし……何よりも仮面ライダーとして戦ってくれたこと。最初は成り行きだったけど、ベイルと契約して高校時代から今まで仮面ライダーとしてずっと頑張ってくれた。だから私はO・V・E・Rを作る事が出来たし、それ以上にお姉ちゃんの残した研究を進めることが出来た

「——そうだ、研究資料」

「えっ?」

「話聞かせてくれてありがとう! 新見さん、後はよろしくお願いしますー!」

「えっ? わ、わかった」

八乙女さんには正直悪いとおもうけど思いついたらすぐに行動するのが一番いい気がするから、ポケットから車の鍵を取り出しながら駐車場まで戻る……八乙女さんにはとりあえずチャットで連絡だけしておいて車のエンジンをかける。向かう先は我が家の地下研究室——きつとそこに何かの手がかりがあるはず

研究室まで戻って来た私が早速パソコンの電源を入れようとしたタイミングで、ガンデフォンに八乙女さんからの連絡が入る。悠長に耳に当てている時間も惜しいから通話を開始すると同時にスピーカーモードにしてパソコンの操作を始める

『所長!? どういう事ですか、行くところが出来たからって!』

「ごめんね、八乙女さん。でも正直今は八乙女さん呼びに行く時間すら惜しかったから」

『はつきり言いますね、でも一体何をそんなに急いで——』

「わかるかも知れないの、敵が何を狙っているのか」

『——本当ですか?』

「うん、だから今お姉ちゃんの研究室でバイスタンプ関係の資料を探してるどころ」

『それなら、私にも何か出来ることはありますか?』

「……八乙女さんは、今は門原くんが付いていてあげて」
『……わかりました、でも無茶はしないでくださいね!』
「うん、わかってる」

そこで通話は終わり、私は再びパソコンと向き合う……きっと、敵の狙いを解明する鍵はバイスタンプの研究資料の中にあるはず

第10話、 配信記録B―無茶と欲望と仮面ライダー
―(B)―

お姉ちゃんが残っていた資料は大まかに分けて二つあった、一つは門原くんの使っているデモンズの設計図と、お姉ちゃんが変身していた仮面ライダー――ベイルの基礎設計と戦闘データ。私がオーバーデモンズの完成まで辿り着けたのはこの二つがかなり大きい。そしてもう一つはバイスタンプの研究データ

「今回の事件の鍵はきつとこの資料の中にある筈」

バイスタンプの研究データの中にはスタンプを使うことによって召喚される悪魔の事も記載されていた。今回の相手はバイスタンプを製造し販売している組織、それならお姉ちゃんの行っていた研究と同じかそれ以上の情報を握ってる可能性が高い

「あった、バイスタンプと悪魔の関係の項目」

研究資料の中にある項目に目を通していく

――悪魔とは人間の心の中に潜むエネルギー生命体である。通常であれば現実世界に出現することは無いが。人間の中に潜むエネルギーを抽出し、生物のDNAと結合させることで実態を持った存在として現実世界に召喚することが出来る

「ただし悪魔を召喚する際には、使役するための対価を支払う行為――契約をしなければならぬ……うん、ここまでは知ってる」

悪魔を召喚する時に、必ずの契約者となった人間は必ず何かしらの対価を悪魔に支払わなければならない。悪魔に支払う対価もタイミングも人によっては違うけど大体の人は自分の寿命を対価として支払ってる

「けど、今重要なのはここじゃない」

次に私が読み始めたのはバイスタンプに関する研究資料だけど……ここも違う、記載されているのは古代生物のDNAを使用したスタンプ作成に関する考察が書いてあるだけで敵の狙いに繋がりそうな情報は載ってない……そうなってくると残りは姉さんなりに悪魔の

事を考察した資料だけ

——ここからは、悪魔と契約者を関係をこれまで私が戦ってきた経験をもとに考察していきたいと思う。まず悪魔と契約者はバイスタンプというある種の契約書によって結ばれている。私とベイルのように単純な契約関係ではなく、人間と協力関係のようなものを結んでいる悪魔も存在するけど。基本的にはバイスタンプを用いた契約というのが基本

「……ここじゃない」

——悪魔と人間の関係は、大まかに分けて三種類あると私は考えてる、一つ目は最も多いバイスタンプを用いた悪魔との契約関係。二つ目は私とベイルのようにバイスタンプを使用しない悪魔との共生関係、そして最後の一つは悪魔が人間、どちらかがもう片方を食いつくしその力を奪い取った関係

「……片方を食いつくす？」

片方を食いつくすって、どういうこと？

——私を見たものが本当にそうだったのかわからないけど、一度だけ似たような状況に遭遇したことがあるから一応書いておいただけ

似たような状況に遭遇したことがあるって……もしかして人間か悪魔がもう片方を食いつくしたってこと？

——私が見たのはとある事件で悪魔災害を解決しようとした時、イレギュラータイプになってしまった契約者が急に苦しみ出して見た目が怪獣みたいなのから特撮番組に出てきた怪人みたいな見た目に変わった。その時は辛うじて意識が残ってたみたいだけどその時のライダーシステムは未完成だから助けることが出来なかった

そこまで一度資料を読む手を止めて、天井を見上げる……お姉ちゃんでも助けられなかった人が居た事が衝撃で、少しだけ動揺してしまっただけ間違いない——

「——これだ、敵の狙いは」

実際にここまで敵が辿り着いてるのもわからないけど、前提条件としてI型の悪魔からさらに進化した例がお姉ちゃんの前で起こってる……というよりも実際に経験している、それに加えて敵は今回の契

約者である日暮くんに今まで以上の力を求めるか聞こうとしてたんだと思う

「だと、したら……敵はまた日暮くんを狙ってくる可能性が高い」

資料を探し始めてからどれくらいの間が経ったのかを確認するためにガンデフォンの電源ボタンを押すと、二時間くらいは時間が経っていた。とりあえず、八乙女さんに連絡して新見さん達がいるか確認しないと

『はい、八乙女です』

「もしもし、八乙女さん？」

『あつ、所長！ 何か分かりましたか？』

「うん、敵の狙いは大体……それより、日暮くんがまだ病院にいるか確認できる？」

『日暮くんって、今回の事件の契約者ですよね？』

「うん、確認できる？」

『えっと、ちよつと待ってくださいね』

そう言うのと八乙女さんとの通話が少しの間ミュートになってから少し経ってもう一度八乙女さんの声が聞こえてくる

『病院のロビーにはいませんね』

「そっか、ありがと……それと、門原くん大丈夫？」

『とりあえず峠は越えたみたいです、面会も許可されてますけど……まだ目は覚まさないです』

「そっか……ありがとうね」

そこまで言って電話を切ると、今度は新見さんに連絡をした

「もしもし、新見さんですか？」

『ああ、狩谷さん、どうかしました？』

「日暮くんって今一緒ですか？」

『ええ、彼はバイスタンプ犯罪を犯してしまったので今、署の留置所まで向かってる所ですけど』

「新見さん、敵の狙いは日暮君です……なので今すぐ安全な所に――」

そこまで言ったタイミングで、通話越しに急ブレーキをかけた音と何かが発発する音が聞こえてくる

「新見さん!? 大丈夫ですか!？」

『……すみません、襲撃みたいです』

「分かりました、今すぐ向かうので場所を教えてください!」

『あ、ああ……場所は——』

新見さんから場所を教えて貰うとデモンズドライバーが入ったカバンと車の鍵を手にとって急いで新見さん達の元に向かう。今新見さん達がいるのは警察署近くの繁華街、人が多い中で仕掛けてきたって事は敵はこちらを監視していた可能性だつて少なくない……逃げたと思つて油断してたこつちのミスだ

車を走らせて繁華街が近づいてくると、少しずつではあるが爆発音のようなものが聞こえてくる、車を降りてこちらに向かつて逃げてくる人たちとは反対方向に進んでいくと日暮君の腕を掴んでいる蝶の化け物とガンデフオンを構える新見さんの姿が見えた

「新見さん!」

「……狩谷さん、すみません。迂闊でした」

「いえ、こうなることを考えてなかったこつちにも非がありますから、それよりも今は——」

「ええ、日暮君を離せ!」

「離せって言われて素直にはいそうですかつていう人は居ないと思うなあ……それに、この子を抑えられた以上もう目的の半分以上は達成してるしね?」

日暮くんを掴んだまま化け物はスタンプを取り出した、多分あのスタンプは日暮君の使つてたスタンプ

『バッファロー』

そのスタンプを起動した化け物は、それを日暮くんを押すと、押し部分から溢れ出した契約書のような紙の束がバッファローデッドマンの形になってこつちに向かつて来た

「よしっと、ねえキミ。一つだけ聞かせて?」

「な、何ですか?」

「君さ……まだ有名になりたいって気持ちある?」

「それは……」

「うん、その目を見てわかった……少し弱いけど、使えなくはなさそう」

デッドマンに気を取られている間に、日暮君にあの化け物は何かを確認する……一体何を——

「悪魔くん……見せて、君の本当の力」

『バッファロー』

困惑したのも束の間、あの化け物がもう一度スタンプを起動させるとデッドマンにスタンプを押した、瞬間——日暮くんの身体は光の粒子になって悪魔に吸収される始める

「日暮くんッ！」

「もう無駄だよ、あんなつたら後は二択……悪魔を食うか食われるか」

日暮くんの事を完全に吸収した悪魔はまるで脱皮をするように真つ二つに割れ、新たな姿へと変化した……あれってI型？ でも、見た目が普通のI型じゃない——

「——けど、助けなきゃ」

どうして動かなかつたんだろうと、今になって思う……もう少し早く動けばあなる必要もなかつたはず——でも反省は後！

『クワガタ』

『Deal』

「はあ……また邪魔しないでよー！」

こつちに攻撃を仕掛けてきた化け物だけど、私の周りをまわっていたクワガタが攻撃を防御してくれた

「変身ッ！」

『Delete up』

『Unknown』☒未知なる☒

『Unleest』☒混沌が☒

『Unlimited』☒超える☒

『仮面ライダーO.V.E.R.DEMONS』

展開された電子空間の中で私の身体にオーバードモンスのアーマーが装着され、電子空間がはじけ飛ぶと同時に黄色の複眼が光ると同時に蝶の化け物に向かっていく

「はあ！」

「意味ないよ！」

まず放った拳は光の粉を使った障壁のようなもので守られた
「それならッ」

相手が障壁を展開している所以外なら攻撃は通る、そう考えて脇腹
に向かって蹴りを入れると確かな感触が足に伝わってくる

「ちっ！ 生意気ッ！」

けどその攻撃が悪かったのか化け物は右手に風を収縮させて私と
の間で爆発させる。ダメージこそあまりなかったけど距離は離され
てしまった……それだけじゃない、動きを止めたI型——I型だと元
のと被るから今はフェーズ2とかそれっぽい呼び方にしておこう

「二対一だね、どうする？ 諦める？」

「諦める訳ないでしょ……」

「そっか、なら潔く——あの世に逝っちゃえば？」

その言葉が切っ掛けになったのか、私に向かって襲い掛かってくる
フェーズ2のデッドマンと蝶の化け物。バツファローのスタンプを
使っているからか、フェーズ2のデッドマンには両腕に巨大な角が付
いている……って悠長に言ったけどデッドマンの振り下ろしてくる角
に加えて大ぶりの攻撃の隙を埋めるように蝶の化け物が攻撃を仕掛
けてくる

「どうしたの？ 諦める訳ないとか言っついて押されっぱなしじゃ
んッ！」

「くっ——」

デッドマンを攻撃しようにもあの状態で攻撃をしたら一体化し
ちゃってる日暮君にどんな影響が出るかわからない

「戦いの最中に油断は禁物だよッ！」

「しまっ——きやあああッ!?!」

腹部に放たれた一撃で宙に浮いた私の身体は追撃してきたフェー
ズ2デッドマンの角に弾かれて火花を放ちながら地面に落下する。
昨日は敵の動揺があったし一対一だから何とかなった……けど今は
二対一だし、対策も考えないといけない

「——うっ……」

必死に身体を起こそうとするけど身体に力が入らない

「あーあ、案外呆気ない幕引きだなあ。でもまあいいか、それじゃあ——
うっ、嘘」

私の近くまでやってきた蝶の化け物が何かを言おうとしたところで、言葉が止めて……何かに驚いている

「よお、クリスパー……地獄から戻ってきたぞ……」

聞こえてきた声は、私にとつてとても聞きなれたものだけど……今は絶対に聞くことのできない筈の声

「門原……くん？」

「遅れちまったな、所長……門原ヒロト、戦線復帰だ」

「何バカなこと言ってるんですか？ 起きて早々ボロボロの身体引き摺って病院抜け出すとか……私居なきや絶対失敗でしたよ」

「……それは言うな」

少しだけ力が入るようになったから少し同様している蝶の化け物に蹴りを入れて後退させると彼女と距離を取って声の聞こえた方向を見る。確かにそこには身体の色んな所に包帯巻いてて右腕に至っては動かせるのかわからないくらい重傷な門原くんが居た——八乙女さんの肩を借りた状態で

「……なんか締まらないね」

「それも言うな……口は動くが身体は結構ギリギリだ」

「そっか……ならここは私に——」

「いや、そう言うわけにはいかない……ここに来た時新見さんから現状は聞いた。助けるんだろ？ あの悪魔と契約してる少年のこと」

「……うん」

「なら、足止めは任せろ……呼びかけて、手を伸ばしてやれ——そうすりゃ救える気がする」

根拠のない言葉だけど、門原くんの言った言葉は今まで悪魔と戦ってきたから出た言葉——それなら、私は門原くんの言葉と……彼自身を信じてみよう

「門原くん、あの化け物の相手……お願いしていい？」

「任された、俺は大丈夫だから八乙女は新見さんのところ行ってろ」

その言葉を聞いた八乙女さんは頷くと少し後ろでどこかに連絡をしている新見さんの所まで向かっていった

「全く、片腕ボロボロにされたのに足止め出来る気では…無鉄砲通り越して愚か者だよな?」

「愚か者上等だ、むしろ愚か位じゃねえと仮面ライダー務まんねえんだよー!」

『スパイダー』

【Deal】

「俺の命を懸けて…お前の足止めをさせて貰う、変身ツ!!」

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

力強いその言葉と共に、蜘蛛の糸が身体を身に纏い、彼は仮面ライダーデモンズに変身した

第10話、 配信記録B―無茶と欲望と仮面ライダー
―(C)―

俺が目を覚まして一番最初に目に入ったのは真っ白な天井だった

「……………は？」

「先輩？ ヒロト先輩…………？」

「や……………おとめ？」

霧がかっていた意識が少しずつ覚醒していくと、自分がどういう状況なのかを思い出し始める。そうだった…………俺突っ込んだ結果片腕爆散して気を失ったんだっけ、顔を少しだけ動かして右腕を見ると包帯でグルグル巻きだけどくつついてた

「先輩ッ！」

寝ているこつちに抱き着いてきた八乙女を受け止めようとするが身体が動かねえ

「八乙女……………重い」

「お、女の子に重いは酷くないですか!？」

「後、喧しい……………それより、事件はどうなった」

俺がそれを聞くと八乙女は少し口ごもる……………これは現在進行形で何か起こってるみたいだな

「教えてくれ」

「……………今、所長が敵の目的を見つけ向かってる所です」

「狩谷が？ 無茶が過ぎるだろ――」

「そこは大丈夫です！ 所長も仮面ライダーになったんです。だから先輩は無茶しないでください」

狩谷が仮面ライダーになって事は、そうか……………もう一基のデモンズドライバーは結局狩谷が使ったのか――だがそれでも、無茶をしないってのは無理だな

「そうだな、じゃあ八乙女――肩貸してくれ」

「早速無茶しようとしてるじゃないですかあ！ 重傷なんですからジツとしててくださいよー！」

「それこそ俺にとつちや無茶以外の何物でもないな……心配すんな。この程度傷日常茶飯事——ッ！」

「見るからにダメそうじゃないですか！」

「大丈夫だって……いいから行くぞ」

腕についた針やらなにやらを引き抜いてベットから立ちあがった——ところで身体が倒れそうになるが八乙女が受け止めてくれた

「……無茶しすぎです」

「それでもないだろ」

「そうでしかないです……今回だけですからね」

そうして俺は八乙女の手を借りながら病院を抜け出して二体の化け物に追い詰められている狩谷の元まで辿り着いたというわけだ。着いてすぐ退避してた新見さんから情報を聞いて現在に至る訳だ

「はあ、万全の状態でぼろ負けした癖に私に勝てると思ってるの？」

「勝てる勝てないじゃねえ……勝つんだよ。行くぞ狩谷」

「……うん！」

右腕動かせるにしてもあんまガシガシ動かすとヤバそうだし。今回は左腕を庇いながら——ってちよつと待てよ、良いこと思いついた。そうと決まれば実行に移すだけだ、オウインバスターを召喚してガンモードで構える

それを見た敵二人はまっすぐこっちに向かってくるから銃撃で蝶の化け物を引き受ける。見てみるとデッドマンの方は突っ込んでいった狩谷との交戦を始めたみたいだしこっちはこっちで引き受けるだけだ

「どうする？　また私にボコボコに——うるせえッ！」ええっ!?!」

この前は気になつてなかったが、よくよく考えたらあの舐め腐った喋り方に腹が立つから手に持ったオウインバスターをブーメランの要領で思いつきりぶん投げる。回転しながら向かって来たオウインバスターを弾いたがそれに気を取られている間に顔面に目がけて蹴りを入れる

「はあッ！」

「あぶなっ!? キミなんかこの前と性格違くない!？」

「さあどうか——なあッ!」

蹴りが外れたなら続けざまに身体を大きく捻って回転を付けながら左腕でラリアットを決める。その一撃はもろに化け物の首を捉え身体を宙に浮かせる

「そおらアッ! そんなでもう一撃イッ!」

左腕を振りかぶって地面に倒れた化け物をこのまま逃がすわけにはいかない。キャッチしたバスターをアックスモードにして地面に思いつき斬撃を放つが当たる直前で風の障壁に阻まれる

「勢いで誤魔化してるけど……キミ、やっぱり万全な時ほど力を出せてないんだねッ!」

「ぐッ——」

やっぱり見破られるか……さてと、そうなつてくるとここから先が正念場。改めて気合いを入れ直しながら俺は狩谷の方に目を向けた

門原くんが蝶の化け物を引き受けてくれている間に、私はフェーズ2デッドマンの事を掴んで動きを止める

「日暮くん! 聞こえる!?!」

『——ッ』

私の声が全く届いていないように、デッドマンは掴みかかった私の事を振りほどくと腕に着いた角で私の事を貫こうとしてくる、先に突き出して来た右腕の角を腕で弾いて左腕に掴みかかる

「お願い! 聞こえてるなら返事をしてッ!」

『——ッ』

その言葉を聞いた瞬間、僅かに悪魔の動きが鈍くなる……この悪魔の中にまだ日暮くんは残ってる——それなら

「そう言えば、まだ君がどうして有名になりたかったのか、最初の教えてもらってなかったよね?」

私が彼から聞いたのはあくまでもスタンプを買った理由でどうし

て有名になりたかったのかを聞いていない

『——オ、オレ……は……俺は——ッ!』

彼の意識が少しだけ表に出てきたからか、目の前にいる悪魔は少しずつ苦しみ始める

『俺は、有名になつて——ッ! ア、アアアアアアッ!!』

もがいているデッドマンの両腕は急に発光しだして私の方に向かって電撃が放たれる……十分避けられる一撃だったけど、私はその攻撃を避けない

「ぐつ、う、ううううううッ」

痛いし身体中がしびれてる、正直意識を失いそうになるけど私はまっすぐ近づいて彼の腕を掴む

『ッ——俺は、俺は有名になつて……見て欲しかった、父さんや母さんに』

「お父さんやお母さんに?」

『……父さんも母さんも、弟ばかり気にかけて——寂しかった』

そうか、彼の心の底に会つたのは孤独……ご両親に自分を見て欲しいっていう、純粋な想いだったんだ

「大丈夫だよ……君はまだ若いんだから、真っすぐ向き合えば。きつとその寂しさを乗り越えられる……なんて、口で言うだけだと簡単だけどね、でも——そこから一步踏み出す勇気を君は持つてる」

『踏み出す……勇気』

彼だけじゃない、みんな色んな感情とおんなじくらい勇気を持つてる筈なんだ——ただそれに、今はまだ気づいてないだけ

「だから、約束……私があなたを助ける、だから貴方も踏み出して……勇気を出して!」

『——うんッ!』

その言葉を聞いた瞬間、フェーズ2デッドマンの身体にノイズのようなものが走り動きがどんどん鈍くなっていく

「マズい——」

「行かせるわけねえだろっ!」

「——この、邪魔ッ!」

「こいつの反応を見て確信した、狩谷！ 今なら悪魔とその少年を分離できるッ！」

「うん、私は絶対……約束を守って見せるッ！」

【Charge】

『デモンズフィニッシュ』

スタンプを押印してベルトの両サイドを押し込むと右腕に金色のエネルギーが集まっていく。私は動きを止めた悪魔に向けてその拳を思い切り打ち込んだ、その瞬間——拳を開き、悪魔の中に存在した日暮君の腕を掴み引つ張り出す

そして、分離した悪魔はそのまま数歩後退し爆風と共に消え去った。そこに残ったのはスタンプだけだったけれど、そのスタンプも地面に落ちると同時に粉々に砕け散った

狩谷が悪魔と少年を分離し、倒したのを確認すると俺は改めて蝶の化け物と向き合う

「どうする？ まだ続けるか？」

「……やめておこうかな、結局邪魔されちゃったし。それにキミもだいぶ辛そうだしね？」

「ああそうかい……それならさっさと投降しろ」

「勘違いしないでね？ 今回はあくまでも退却だから」

それだけ言い残すと目の前の化け物は地面にスタンプを押印し、そこから現れた無数の蝶と共に姿を消す。それを見届けると同時に俺の変身も解除されその場に倒れる

「門原君ッ！」

「せ、先輩！」

「あー……すまん、少し……寝る……」

流石に病院抜け出してここに来たのはダメだったのか、それだけ二人に伝えるとそこで俺の意識は完全に途切れた

今回の顛末、あの後日暮くんはバイスタンプの使用でしばらくの間保護観察処分という結果になった。今回の一件が彼のご両親にも伝わって、最初は何をしているんだって怒られたみたいだけど……彼の本心を聞いた事、そして彼が最初意外殆どあの化け物に利用される形になった事とか諸々を説明したら一応ご両親も彼に寂しい思いをさせてすまなかつたって言葉はかけていた

それが本心から出た言葉なのか、それともその場の気まずさから逃れる為に行っただけの言葉なのかわからないけれど……私は前者であると信じたい

「それではこれより、クリスパー対策会議を始める」

そして、あの事件を終えてから数日後……私はD・D・C・Uの本社で行われている会議に出席していた。今回の議題は私たちが遭遇したあの化け物——唯一向こうから接触された門原くんの話によると彼女は自身をクリスパーと呼称していたことから、スタンプを売買している組織と、彼女が変身した化け物はクリスパーと命名された「狩谷、今回の事件におけるクリスパーの目的が何だったのか説明してもらえるか？」

フタバ先輩の言葉を聞いた私は、立ち上がると端末を操作して画面にとある資料を映した。これはお姉ちゃんの推測していたことと私が見て、その上でどうなっているのかを考えそれを図にしたもの

「今回の事件におけるクリスパーの目的は悪魔に人間の存在そのものを捕食させることで誕生する悪魔——Irregular Type II。I2型悪魔の誕生だったと予想されます」

悪魔に人間の存在そのものを捕食させる。その言葉を聞いた瞬間D・D・C・Uの隊員たちの間に波紋が広がるが、フタバ先輩が手を叩くと再び静まる

「——話を続けてくれ」

「はい、悪魔は通常バイスタンプを介した人間との契約関係でなければ現実世界に存在することはできません。そしてその状態の悪魔を私たちはS型やC型と呼称し、更に上の契約をして悪魔と一体化した存在をI型と呼称していました……しかし、今回の事件に置いてクリスパーは悪魔側にバイスタンプを押印することで悪魔が人間を吸収し新たな姿に変化しています」

クリスパーが何の目的でI2型の悪魔を作り出そうとしていたのかわからないけれど、今回の一件だけで見れば完全にI2型を作り出そうとしていたのには違いない

「……狩谷、今後I2型が出現した場合、人間と悪魔を分離させる明確な手段はあるか？」

「……いえ、現状最も有効なのは仮面ライダーの使用する技による人と悪魔の分離だけです」

仮面ライダーが私たちだと知っているメンバーはこの中だとフタバ先輩しか知らない、悪魔災害に置いて仮面ライダーの存在は確実に有用であると言えるけど人類にとっても有用であるかと聞かれたらはいと答えることを……私は出来ない。実際にとある企業の作り出したシステムは、その企業解体後に海外へ設計データが流出……テロリストをはじめとしたさまざまな組織に悪用されていると聞いたことがある

それに、仮面ライダーの正体が露見したら絶対に技術を提供するようになんか組織が動き始める……個人的な気持ちになっちゃうけど、お姉ちゃんの研究が悪用されるなんてことに私はなって欲しくない
「そうか、それなら我々はこれから研究部門と提携し人間と悪魔を分離できる弾薬の研究を急がせるとしよう」

そこまで言うとな私の出番は終わり、これからはフタバ先輩たちD・D・C・Uが今後の対策を練る時間だ……もちろん提携先として今後の対応については協議しないといけない事もあるけど、今日一番の大仕事を終えた私は席に着き、気付かれないように息を吐いた

第11話、祝祭記録J―祭りの準備―(A)

あの戦いから数週間、島は平和そのもので俺もゆっくりと身体の療養に励むことが出来た。まあ右腕は他よりも圧倒的に傷が酷かったからまだ包帯を巻いてアームホルダーで吊るしている訳だが……まあ仕事をするのに支障はない、というかそもそもウチは所長以外で書類仕事をするのがないわけだからマジで問題はない

「おはよーございませす」

「あつ先輩。おはようございませす」

「おはよう、門原くん……それで早速だけど、ベルト出して」

「へっ?」

久々の出勤早々、所長から言われたのはベルトを出せ発言……えっ?もしかしてクビですか?」

とりあえず俺が首になるという誤解は解けた……というか所長からどうしてベルトを渡さなければいけないのかを教えてもらった。どうにも俺があ的事件で無茶して変身してぶっ倒れたのが原因らしい、そもそもあの抜け出しが無ければもっと早く退院出来たとか担当の医者から聞いた時はやっぱり気まずくなつた

「門原くんは仮面ライダーへの変身禁止です」

「えーっと、変身しないからベルトだけ持つとくつてのは――」

「持たせてたら絶対に変身するじゃん」

「うっ……」

「とうかわかつてる? 門原くんただでさえベイルとの契約不安定になつてる所為で変身する度に身体に負荷がかかつてる状態なんだよ。」

「えっ? 私それ初耳なんですけど……っていうかその反応、ヒロト先輩絶対知ってましたよね?」

遂に八乙女にもバレた、というか病院抜け出す時だつて身体に負荷かかること言つてたら絶対に抜け出しに手を貸すなんてことしない

だろうしなあ

「……すまん」

「はあ、ほら先輩。さっさと所長にベルト渡してください」

「い、いや——」

「拒否権はないよ?」

正直、逃げられる気がしない……仕方ない。俺は手に持ってたカバンからデモンズドライバーを取り出して狩谷に渡す

「はい、確かに受け取ったよ」

「……ってどうか一つ聞いて良いか?」

「なに?」

「仕事って基本的に俺と八乙女のコンビで受けてるよな」

「そうだね」

「じゃあベルトを持ってないと悪魔に対応できないんだが」

「ああ、それなら大丈夫。しばらくは私も一緒にきた依頼をこなしていくから」

成る程、こうなると本当に俺は現在進行形で仮面ライダーへの変身が禁止された訳か……いや確かに狩谷の事を信用してない訳じゃないんだがそれはそれとしてやっぱりベルトを持ってた方が安心するというか——

「やっぱりベルトを返してもらおうことは——「くどいよ、門原くん」すみません」

駄目だな、アレと長く付き合い過ぎたというか既に何年も手元にあった所為で近くにないと落ち着かない。なんて考えていると事務所の前が叩かれる……久々の依頼人か

「あつ、私行つてきますよ」

八乙女がそう言うと言務所の扉まで行って開けるとそこにいたのはツナギを着た一人の男性。その人は開け放たれた扉の前に突っ立ったまま微動だにしない

「えーっと……」

「所長、今うちの電化製品ぶっ壊れてたっけ?」

「壊れてないと思うよ?」

「失礼、ここが狩谷相談所で合ってるだろうか」
「どうやら依頼人らしい」

今回依頼にやってきた人物は睦葉島中央に聳え立つ管理施設“セントラルタワー”の管理会社に勤めているらしい川瀬宏伸さん。でも管理会社の人間ならセントラルタワー関係の依頼だよな？ 言いたかないがその手のデカイ依頼はウチみたいな弱小じゃなくて高梨警備保障とか点在しているもう少し規模の大きい会社に頼んだ方がいい気もするんだよな

「それで、依頼内容の方は——」

「近々睦葉島で行われる記念式典はご存じですよね？」

「はい、島の運営開始日を記念して行われる祭事の事ですよね……島全体を使った大きいお祭りになる」

「ええ、実はその記念式典関連で準備を進めていた我々の元にこんなものが届いたんです」

そう言って川瀬さんが見せてきたのはガンデフォンの画面。そこに表示されていたのは、犯行予告か？

——記念式典当日、セントラルタワーは我々のものとなるだろう

「これを、私たちが解決しろと？」

「はい」

川瀬さんのその言葉を聞いた所長は俺の方を見てくる。そうだな……正直俺たちには少し荷が重い気もするが——所長は狩谷な訳だしそつちの一存で決めて貰って構わないとの意思を目線で伝える
「……わかりました、お引き受けします」

少し悩んだ様子ではあったが所長が依頼を了承すると、川瀬さんは安心したように胸を下ろした……とりあえずここら辺で気になったことを聞いておくか

「あの、川瀬さん」

「はい、何でしょう」

「睦葉島ってウチ以外にも……それこそ大手だと高梨警備保障とかあ

りますよね？　なのに何でウチ依頼を……言っちゃなんですけどウチ警備会社って言うか何でも屋って感じですけど」

「……他の警備会社にも話を持って行ったのですが、どこも記念式典の警備で手一杯と言われてしまっただけ」

そう言葉を発した川瀬さんの表情を確認すると、何かを隠しているように見える……というよりもさっきの発言に嘘が混じってる——個人的に探りを入れるのは全然構わないんだが相手は依頼人だ。これ以上踏み込んで依頼がお釈迦になるのは会社としても、俺としても困る

「そうでしたか」

だからここは同調だけしておいてその場で引き下がる。その後の流れは成功報酬に関する相談だったりを所長と川瀬さんの二人がした後には帰っていった……事務所の扉が閉められ程なくするとビルから外に出て川瀬さんが歩いていく

「……良かったな、八乙女。祝日出勤決定だ」

「もう慣れましたよ……というかもう高校中退するんでここで雇ってくださいよ」

「高校中退したら八乙女さんでもクビだよ」

「だそうだ」

「……まあ進路に悩まなくてよくなつと考えると良しとしましょう」

なんか血迷った事を言っていた八乙女も所長のクビ発言で高校中退は諦めたらしい……それにしても今回の依頼人、どうにも胡散臭いな

「ねえ、二人とも」

「どうした？」

「何ですか？」

「今回の依頼、どう思った？」

「どうやら胡散臭いと感じていたのは俺だけではなかったらしい」

「……正直、胡散臭いかどうかって聞かれたら胡散臭い以外の何物でもないな」

「私も、なんか怪しいなって思いました」

「やっぱり、そうだよね」

正直何の目的があつてウチに依頼を持ってきたのかわからない……あの口ぶりを見るに他の会社にも話を持って行ったのは本当だろう。だが最終的に行きついたのがウチの事務所つてのは少々違和感を覚えざる得ない

「そもそも、ウチの島で一番デカイ高梨警備保障が人手足りないつてのは確実にないだろうしな」

「だよね、万が一の事も考えてフタバ先輩たちも動くだろうし……人手が足りないなんてことあるはずない」

「もしかしたら、あの人にとつては大きいところじゃなくて小さいところの方が都合がいいのかもしれないね」

「小さい所の方が都合がいい……ねえ」

正直どんな都合が良いのかわからないが今回の依頼に関してはずっと警戒して当たった方がいいだろうな……つと、そう言えば

「ベイル、の人から悪魔の匂いは感じなかったのか？」

『……奴から悪魔の匂いは感じなかった』

「ベイルの悪魔センサーにも以上なし」

「とりあえず、私は高梨警備保障の方に今回の件を確認しに行つてくる」

「じゃあ俺はとりあえずセントラルタワーまで向かつてみる、八乙女も来るか？」

「もちろん行きますよ！ 流石にここで一人お留守番はつてのは嫌ですからね」

とりあえず話がまとまったわけで所長はこれから高梨警備保障に今回の依頼の事を確認しに、俺と八乙女は当日に備えてセントラルタワーの確認に向かうことに決めた

睦葉島に存在するとあるバー、現在CLAUSEの看板がかかっているその扉の前に立った少女は、躊躇いなくノブを捻って中に入る
「やつほー」

「あら、キミちゃん。いらっしやい」

「アレ？ 今日ミツヤさん一人？」

カウンターに立っていたバーテンダー風の男——福沢ミツヤに対して國本は親し気に話しかける

「残り二人は奥にいるわ」

「オツケー、じゃあミツヤさんも早く来てね。お話始められないから」
「元々あなたが遅れたからワタシが待ってたんじゃない。まあいいわ、いきましょ」

その言葉と共にミツヤはグラスを動かして隠されていたスイッチを入れた。すると床の一部が盛り上がり地下に続く階段が現れる。慣れた足取りで二人が地下に降りていくそこにはもう二人。笑みを浮かべている女性、永倉キョウカと彼女の横に座っている男性、大崎レオは降りてきた二人に目を向ける

「ごめん、少し寄り道しちゃって」

「遅い」

「まあまあ……それより珍しいね、キミちゃんが寄り道なんて」

キミに対して少し厳しい物言いになっていたレオをキョウカがたしなめ、どうして遅れたのかを問う

「んふふー実は面白そうな人がスタンプを買いたって言ってきてね。それでちよつと遅れちゃった」

「あら、どんな人なの？」

「記念式典を滅茶苦茶にするんだって、面白そうな話でしょ？」

「……世間話はそこまでしろ」

「はい」

嗜められてから言葉を発していなかったレオがそう言うときミツヤの二人も席に着くと……レオは話を始める

「睦葉島に新たな仮面ライダーが出現した」

「ああ、オーバーデモンズとか言ったっけ？　オーバーって言う割には元のデモンズの方が強そうだったけど」

「戦闘経験の差でしょうね……デモンズの方はもう何年も戦い続けているわけだし」

「その通りだ……そして我々にとって最大の脅威であったデモンズは國本の手により戦線離脱を余儀なくされている」

レオがそう言うとき残りの二人に向かってキミがピースサインを出す

「だが油断はできない。我々は我々の目的の為に……行動する」

「当然……わかってるよ」

「ええ、そうね」

「……はい」

そう言った四人が目を向けた先に存在するのは悪魔の尻尾を思わせるスタンプと、その後ろに鎮座する棺のような形状の蛹

「わかっているな、我らの目的は——」

「『悪魔ディアブロの復活』」

「ディアブロ復活のエネルギーは着実に溜まりつつある……我々も、バイスタンプの売買を続けるぞ」

レオの言葉に頷いたメンバーの手の中にはそれぞれ別々のレリーフが彫られた特殊なスタンプが握られていた

第11話、祝祭記録J―祭りの準備―(B)

門原くんたちと別れた私がやってきたのは高梨警備保障、その警備部門の受付まで向かうと見慣れた受付さんが話しかけてきた

「あら、狩谷相談所の……今日はどういったご用件ですか？」

「今日は少し聞きたいことがあって」

「聞きたいこと……ですか？」

「はい――」

そこまで言った私は少しまえうちまで持つてきた依頼の事を警備部門の受付さんに聞いてみる

「少し受付履歴を調べてみますので、少々お待ちください」

「わかりました」

わざわざ受付履歴を遡って調べてくれるらしいので、少し離れたベンチに座って呼ばれるのを待つ……高梨警備保障は一日でも膨大な数の依頼がやって来るらしい、少し時間がかかるのを覚悟しながら待つことにする

「隣、良いか」

「えっ、ああフタバ先輩、どうぞ」

「ありがとうございます……大変そうだな」

「はい、そう言う先輩も随分疲れてますね」

「……記念式典で住民が浮かれているのかいつもよりバイスタンプ犯罪が多くなっているな」

「えっ？ そうなんですか？」

「ああ、まあ大抵がS型だから君たちに頼らなくても何とかかなっているが……こうも多いと流石に疲れる」

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「……問題ない、本当につらくなつた時は定期的にクロハに変わってもらっている」

確かに心なしかいつもよりフタバ先輩も疲弊している気がする……というか流石につらくなつたらクロハさんに変わってもらっては本当に休んだ方がいいと思うんだけど……

「狩谷さん、調べ終わりましたよ」

フタバ先輩と話しているとそんなに待つことなく調べものが終わったみたいだ。調べてもらった受付さんに話を聞いてみたけどやっぱりあの川瀬って人が高梨警備保障に依頼に来た記録はない……となるといくつかの会社に行ったのは本当だろうけどこの会社には依頼していない

「やっぱり……」

「狩谷さん、大丈夫か？」

「あつ、はい、大丈夫です」

「そうか？」

「はい、それじゃあ私はこれで。フタバ先輩もお仕事頑張ってください」

それだけ言うと高梨警備保障を後に私はガンデフォンを使って門原くんたちに連絡をする

「もしもし、門原くん？ そっちはどんな感じ？」

『こっちは収穫なしだな、特にこれと言った情報は手に入ってない』

「そっか、どうするようか、一度合流する？」

『その方がいいかもな、とりあえず合流する所は——』

そこまで言ったタイミングで通話の向こう側から爆発音が聞こえてくる

「門原くん!! 大丈夫!?!」

『——あ、ああ……大丈夫……とは言いがたいかも』

「何があったの!?!」

『奴さん向こう側からお出ましてみたいだ……悪魔が出た』

「場所は!? セントラルタワー!?!」

『セントラルタワー、近づけばわかると思う』

「わかった、急いで向かうから門原くんはそこで——」

『悪魔の足止めね、了解! それじゃ!』

「あつ、ちよつと——」

私の言葉を聞く前に門畑くんは通話をきる……このままだと、また門原くんが無茶をするのは間違いない。それがわかった私は急いで

セントラルタワーまで向かった

時は少しだけ遡り、俺と八乙女の二人がやってきたのはセントラルタワー。一部の区間は民間人の立ち入り禁止ではあるのだがそれ以外の区間は民間人の立ち入りが許可されている睦葉島の観光名所になっている

「それで先輩、今日は何処に向かうんですっけ？」

「とりあえず管理区画……には入れないから、管理区画の入口までだな」

「せっかく観光名所に来ても、私たちは結局お仕事ですかあ……」

「観光名所って言っても普段から来る機会もあるんだから物珍しいもんでもないだろ」

「そーですけどー、やっぱり少しは遊んでいきたいっつか……」

横でうだうだ言っている八乙女と共に歩いていると管理区画の入口までやってきた、とりあえず今日は話を聞くために来たわけだから……と言ってもアポを取ってるわけじゃないから入れて貰えるとは思えてないけど

「すいません」

「……どうかしましたか？」

「私たち狩谷相談所の者なんですけど、管理区間の人にお話を伺うことができませんか？」

「……失礼ですが、どういったご用件で？」

「川瀬さん、という人からご依頼を頂いたので、その件で……アポイントを取ってないんですけど」

「少々お待ちください」

受付の人は内線を使って連絡しているようだった。少し待っていると連絡を終えた受付さんがこっちまで戻ってきた

「すみません、本日は要件が立て込んでいるとのこと、また後日お越しただければ」

「わかりました、こちらこそわざわざ確認して頂いてありがとうございます」

そこまで言うのと受付を後にして管理区画の外に出る、やっぱりまた後日って感じになったか。正直すぐに話を聞けるとは思ってたから仕方ない気もするけれど

「追い返されちゃいましたね」

「今回ばかりは仕方ないだろ、アポも取ってない訳だし……というからお前、受付と話してる時一切口を開かないよな」

「だって私そう言うの得意じゃないですし」

「……けどお前、ウチに就職すんならこういうのもやってかないと駄目だからな」

「わかってますよー、それより先輩！ 時間まだありますよね!？」

「多少はな、所長から連絡も来てないわけだし」

「よっし！ それじゃあ遊んでいきま——」

そこまで言ったタイミングでガンデフォンが鳴る、画面を見るとそこに表示されていたのは所長の名前

「残念、時間切れだ」

「そんなあ……」

ガンデフォンの画面を軽く八乙女に見せた後に通話ボタンを押す

『もしもし、門畑くん？ そつちどんな感じ?』

「こっちは収穫なしだな、特にこれと言った情報は手に入ってない」

所長の口ぶりにあつちちはあつちちであまり情報を手に入れてないみたいだな、その後こつちと合流しようと言っていると、セントラルタワーの市街地付近から爆発音が起こる

所長との通話を続けながら爆発があつた場所までやって来るとそこにいたのは悪魔……なんだがそれはそれとしてあの見た目は、ジャツカルか？ まあそれはそれとして通話越しにすぐ向かうって言ってる所長が多分無茶をするとか言う前に通話をきる

「八乙女、民間人の避難頼む」

「わ、わかりまし——って先輩はどうするんですか!？」

「所長が来るまで足止め」

右腕は動かせないが右手に持たせるくらいなら出来る。だからガンデフオンをガンモードして悪魔の方に向かっていく、ベルトは取り上げられてるがそれはそれとしてスタンプは持つてるわけだし足止めするくらいなら十分

「よしっ、こつちだ悪魔!」

ガンデフオンを悪魔に向かって一発撃つと相手の意識がこつちに向いた……ある程度近づいてわかったがアイツI型の悪魔か

『お前、俺の邪魔をするのか?』

「ああ、邪魔をする……だからスタンプを捨ててくれると助かるんだが——」

『邪魔をするなら消えろッ!』

「知つてたよッ!」

こつちに向かってくる悪魔にガンデフオンで銃撃をするがやつぱり威力が足りてないか——飛び上がってきた悪魔の攻撃を避けると一旦右手でガンデフオンを持って空いた左手でスタンプを取り出す

「時間稼ぎをするなら、相手の動きを止めるのが一番だよな」

『スパイダー』

『CHARGE』

ガンデフオンにスタンプを認識させると、銃口に紫色のエネルギーが集まり始める……このまま撃つたら普通のエネルギー弾だが——画面を少し操作して、引き金を引けば

『スパイダー CHARGE BLAST!』

放たれる一撃はエネルギー弾じゃなく……粘着弾へと早変わり、これの原理は純粋なエネルギーとして撃ちだすんじゃないやなくてエネルギーを固有の能力に変換させて云々みたいなのを言ってたが、今はそんなこと置いておく

ガンデフオンで狙っているが相手が縦横無尽に動き回る所為で中々とらえることが出来ない

『無駄だッ!』

少しずつ距離を詰めてきた悪魔が俺に向かって爪を振り下ろそうとする……この距離じゃあ僅かに間に合わない。でも——

『ぐあぁッ!』

「お待たせ、門原くん」

——俺は一人で戦ってるわけじゃないからな、こちらに向かつて差し出された手を掴んで立ち上がると、差し出してきた仮面ライダーの手を軽く叩く

「タツチ交代、後は任せた」

「うん、任せて」

選手交代した仮面ライダーは悪魔と向き合い互いに戦闘姿勢を取る……先に動いたのは悪魔、さつき俺に見せたような動きで移動しながら仮面ライダーの方に向かっていくが、早々やられるほど我らが所長も甘くない、一体多ならともかく今回は一対一、相手に集中出来ているからかとびかかってきた悪魔の腹に蹴りを入れてそのまま後退させる

『ぐうッ』

「追撃、行くよ!」

今度は逆にこつち側から悪魔に向かって攻撃を仕掛ける、怯んでいる隙にまずは膝裏に蹴りを入れて相手の体勢を崩してそのままもう一撃を相手に加える……ひえー、見ててなんだがひどい戦い方だな
流石にあんな風に相手の動きを制限した上でボコボコにするやり方は俺ですらやらんが……まあ敵を倒すなら一番手っ取り早くはあるのか?」

『さつきから好き勝手にやりやがってッ!』

「くっ——」

だが流石にやられっぱなしって訳でもなかった悪魔は救い上げるように一撃を仮面ライダーに向かって放つと距離を取った

『お前は今こゝで俺が——』

「はいそこまで、少し冷静になりなよ、ジャツカルくん?」

尚も攻撃を続けようとした悪魔だったが仮面ライダーと悪魔の間に挟まるように現れたクリスパーの女、國本キミがそれを制した

「クリスパー……ッ!」

「やつほー仮面ライダー、それに門原ヒロトも……その様子だとホン

トに戦線離脱状態みたいだね」

「お前、わざわざ出てきて何が目的だ？」

「目的も何も、アタシはこのジャツカルくんを回収しに来ただけだよ。それじゃあね」

そう言うのと俺たちと話す事などないと言った風にスタンプを地面に押印し、後ろにいた悪魔ともども現れた大量の蝶と共に姿を消した。完全に姿が消し、彼女がいた場所に残っていたのは一枚の紙きれ

「これって……」

「どうした所長？」

「これ見て」

見せて貰った紙切れに目を通すとそこに書いてあったのは

——記念式典当日、ジャツカル君が式典を滅茶苦茶にする……止められるのなら、止めて見せて？

そう書かれていた

「これって間違いないよね」

「ああ、間違はなくこれは——」

——俺たち対する挑戦状だ

第12話、祝祭記録J―祭りの裏側―(A)

セントラルタワーを狙ったデッドマンの襲撃とそこに現れたクリスパー・國本キミによる宣戦布告、どうして彼女がそんなことをしたのかわからないがそれはそれとして今俺たちがやらなければならぬ事は、記念式典を無茶苦茶にするという敵の思惑を阻止することだが――

「――正直、俺達だけでどうこう出来る問題でもないだろ」

「敵が一人……とは限らないもんね」

「デッドマンだけじゃなくてクリスパーが襲ってくるかも知れないもんね」

「デッドマンとクリスパーの二体、それを同時に相手するのはキツくないか?」

「……でも、ベルトは渡さないからね」

「そんなこと言ってる場合じゃなくないか? 流石に今回は一人でつて訳にはいかないだろ?」

最初にクリスパーと戦った時だつて一人で戦つてたら劣勢に追い込まれただろう……まあだからって俺が加わつてどうにかなつたわけでもないんだけどそれでもいいよりはマシだつた筈だ

「大丈夫だよ、今回の事件だつてこうなつちやつたらフタバ先輩たちにも協力してもらうつもり」

「けど、もしI2型が出た場合どうするんだ? 流石にこのままつて訳には――」

「いかない、と伝えようとしたがそれを狩谷は制止する。流石にそのまま伝えてもこのまま話は平行線だろう……最近はこんな話ばかりだし」

「――いや、やっぱやめとく。そんな時はそんな時か」

「……………」

「大丈夫だつて、もう無茶はしない」

「……………信じるからね」

少しジト目をしているウチの所長様に対して、少し苦笑いになって

しまったが笑顔を返した

翌日、私と八乙女さんの二人は狩谷警備保障にあるフタバ先輩の部屋までやって来ていた。要件はシンプルで昨日の事件の助力を先輩たちから得るため。正直疲れている様子のフタバ先輩に頼るのも少々申し訳ないが、もしもの時は先輩から手を貸してくれそうな会社を紹介して貰えればと考えてやってきた次第だ

「わざわざすみません、忙しいのに」

「気にしなくていい、丁度昨日で仕事は片付いて暇になった所だ……それよりここに来たって事は、昨日の件か？」

「昨日の件って事は、先輩も知ってるんですね」

「あれだけの騒ぎになればな」

やっぱり知っていたかと思いつつ、そうだよねと納得する。あの場所には門原くんと八乙女さん以外にも民間人がいた。その中には当然悪魔災害だからって理由で通報する人もいるし、何よりも悪魔関係の事件は大体関係者の耳には入る訳だし

「それで、今日は協力の打診に来たんだらう？」

「……お見通しですね」

「最近は今までよりも君たちに頼られる機会が多いからな、その分我々も君たちに頼る機会が多いのだが」

そう言うつとフタバ先輩は苦笑いを浮かべて私たちの方を見た

「……そう言えば、門原君はいないんだな。今日は」

「先輩は今日は一人で現場を調べに行ってます」

先輩の問いに答えたのは私じゃなくて、一緒に来ていた八乙女さん。基本的には門原くんとバディを組んでいるような扱いになっている彼女だけ、今回に限っては門原くんがもう一度現場を見に行きたいって言ったから八乙女さんには証言するために一緒に付いてきてもらった

「とりあえず、協力をするのはやぶさかではない……元々式典には警備保障として仕事を請け負っていたからな。悪魔の警戒をすればい

いんだらう?」

「はい、お願いできますか?」

「ああ、警備をする分には構わないが……流石に悪魔探しに手を貸す余裕は我々にもないぞ」

「大丈夫です、悪魔探しが我々がやります」

今回の一件に関しては悪魔……いや、クリスパーから挑戦を受けたのは私たちだ。それならこの事件は私たちで解決しないと……それに、私もすっかり戦えるって所を門原くんに見せておかないとまた無駄茶するかも知れないし

そんな風に考えていると、フタバ先輩は少し怪訝な表情で私の方を見てくる

「……どうかしました?」

「いや、何でもない。それより八乙女さん、悪魔の情報を聞いてもいいか?もしかしたらウチのデータバンクに似た悪魔の記録が残っているかも知れない」

「わかりました」

そう言うと八乙女さんはフタバ先輩の近くまで行つて悪魔の特徴を話し始めた……ホント、最初は依頼人だった筈なのにすっかり成長したな。今じゃもう立派に事務所の一員だし——そろそろ渡しても大丈夫かな

所長と八乙女の二人はフタバ先輩に協力を求める為に会社まで向かい。俺は一人昨日、悪魔が襲い掛かってきた場所に向かっていた。昔の刑事ではないが現場百遍という言葉もある通り何度も向かえば何かしらの手がかりが見つかるかも知れないからな

「つと、やっぱり現場は閉鎖されてるか」

悪魔災害のあった現場は基本的に殺人やら事故やらが起こった時と同じように立ち入り禁止の黄色テープで封鎖されている、もちろん警備員はいるから勝手に入る事が出来ない訳なのだが今回に限っては所長の方から入れるように取り計らって貰っているから問題はな

い

「さてと、昨日の悪魔は一体どこから出てきた……？」

確か悪魔が最初に出たのは市街地の方向からこつちに来てたはずだ。なのにも関わらずここまでやってきた、そもそも何を狙ってきたのかもまだわかっていない以上何を考察するにも考察する材料が少なすぎる

「あの悪魔を最初に見たのは、確かこの辺りだったよな」

地面にはヒビが入り、少しだけ動きずらくなっている地面をうまい感じに移動してあの悪魔が立っていた場所までやって来ると、奴の見ていた景色を目に焼き付ける。目の前に広がっているのはセントラルタワーの管理棟があるだけ、こうしてみるとあの悪魔は管理棟を狙ったもんだと思うんだが……

「……なんか引つかかるんだよな」

あの悪魔は“お前、俺の邪魔をするのか”と言った直後に“邪魔するなら消えろ”と言っていた。明らかに意思疎通できるあたりI型であるのには違いなさそうなんだがそうなつてくるとあの悪魔……いや、契約者の狙いは一体何なのかという話になる

「あー、駄目だ。わからん」

『行き詰ってるみたいだね』

頭を悩ませていた俺の耳に聞こえてきたのはいつごろかに聞いたあの時の声、その声が聞こえてきた方を振り返ってみるとそこにいたのは蜘蛛の柄が入っている着物を身に纏った一人の少女

「君は……？」

『ああ、今度は私の事が見えるんだ……少しずつだけ戻って来てるみたいだね』

「今度は見える？戻って来てる？それって一体どういう——」

『ごめんね、今は疑問に答えてる時間はないんだ。今日はただ君の顔を見に来ただけ』

顔を見に来ただけって事は、俺は目の前にいる子と面識があるってことか？いや、でもそれならどこかしらで記憶に残っている筈だ……

何処だ、どこで俺はこの子に出会ってる？昔の記憶を掘り返していくとノイズのかかった記憶にぶち当たる

——中学二年の頃……俺は……巻き込まれた——
巻き込まれた？

何に巻き込まれた？

そうだ、中二の頃に俺はこの島にあったデパートの火災に巻き込まれて……そこで煙吸って意識を——

どういう事なのだろう、不思議と自分の記憶に自信を持つことが出来ない。そもそも本当に俺は火災に巻き込まれたのか？あの日どうして俺はデパートなんか居たんだ？どうして俺は——

『はい、そこまで』

記憶のドツボに陥り始めていた俺の耳に届いたのは目の前にいた少女の声、ハツとして目の前を見るとそこには微笑みを浮かべた少女が立っている。彼女はそんな俺の様子を見た直後に軽く頷いて背を向けて歩き出してしまふ

「待ってくれ！君は——」

『一つだけヒントをあげる』

俺の言葉を遮るように少女は口を開くとこちらを向くことなく言葉が続ける

『行き詰ったら、その生物の特徴を見てみると良いよ』

生物の特徴を見る？

『それじゃあね、今度会うときはもっといっぱい話そうね』

その言葉を最後に、あの少女は消えた。瞬きをした一瞬で……本来そこに少女がいた筈の痕跡は何もなくなっていた

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側―(B)

「その生物の特徴を……か」

事件現場で現れたあの子が言った事をずっと考えているが……この場合の生物の特徴ってなんだ？ その生物の生態で良いのか？

「……っと、連絡だ」

ガンデフォンを取り出して画面を確認するとそこに表示されていたのは所長の名前、どうやらあっち側の用事も終わったらしい

「もしもし？」

『あつ、門原くん。そっちはどう？』

「目立った収穫はなし……そっちは？」

『会場の警備は助力して貰えてるけど、悪魔探しまでは余裕ないみたい』

「そうか、ならやっぱ悪魔探しはこっちでやるしかないか」

人手はあると言っても式典には島の中だけじゃなくて島の外からも人が来る以上悪魔探しに人手を回す余裕はないか……それでも警備をあっちに任せられるのは好都合だな、ウチの事務所に警備をする余力がある訳でもないし

「とりあえず、俺は現場をもう少し見回ってみる。何かしらの手がかりを見つけられるかもしれないし」

『わかった、私たちも出来るだけ早くそっちに合流するから、無茶だけはしないでね？』

「わかってる、また後で」

さてと、電話を切ってから最初にやる事……と言ってもどうしようもない

「情報は足で稼ぐ……それ以外にないか」

門原くんとの連絡を取り終え、改めて近くで電話を聞いていた八乙女さんと顔を見合わせる

「無茶はしないって言ってたけど、先輩なら絶対に無茶しますよね」

「絶対に思うと思う……けど、それがわかってるなら私たちは私たちが早く合流しよ?」

「そうですね」

早く合流するなら今は自分たちがやるべきことをこなす必要がある。そう思っていると少し大きめの地図を抱えたフタバ先輩がやってきた

「すまない二人とも、待たせたな」

「いえ、大丈夫です。それよりその地図が?」

「ああ、警備する式典会場の地図だ……広げるぞ」

テーブルの上に広げられた地図にはいくつかの一般参加者の入場口や要人専用の裏口などに赤い印が付けられていた。恐らくこの場所が特に警備の集中する所なんだろう

「やっぱり警備は入口に?」

「ああ、記念式典は参加者、スタッフ問わず人の出入りが多いからな。否が応でも警戒せざる得ない」

「でも、それじゃあ嫌でも手薄になる場所がでるんじゃないですか?」

「……確かに、八乙女さんの言う通りかも」

「その懸念は最もだが問題ない、提携してる警備会社にも協力を要請している。当日は十分な人員で行う予定だ……だが、あくまでも十分というのは警備面での話で悪魔探しに割ける人員は残っていない」

「ですよね」

悪魔探しに割ける人材が残っていないとなると、任せられるのは手荷物検査でバイスタンプを持ち込もうとする人がいないか警戒してもらっただけ

「思ってたんですけど。そもそも、いくら会場の警備強めてもそれより外から入られたらおしまいなんじゃ——」

「それは、私たちが最も危険視してる事態だな、悪魔そのものが超常の存在。警備をかいくぐる以前に強襲をかけられた時点で終わりだ」

「……そうなった場合は、私たち——いえ、私が対処します」

今は門原君に頼る事は出来ない。その分私がかしらないとい

けない。その為に最も確実な方法は——ある、けど……

「狩谷、どうかしたのか？」

「……いえ、何でもありません」

流石にこの考えを実行するのは気が引ける……悪魔が襲撃をかけるまで待機する、この方法を使えば確実に悪魔を相手どることが出来るけど参加者を危険に晒すことになる、それは論外だ

「ともかく、一番いいのは記念式典を襲わせずに悪魔を倒す……ですよね！」

「ああ」

「そうだね、頑張らないと」

出来るだけ被害を抑えながら、悪魔を倒す。その最善を掴むために……私が頑張らないといけないんだ

「あの、すみません。どつかでこのスタンプと似たやつ持ってる人見かけませんでした？ いや俺じゃなくて……」

恐らく所長たちが会議をしているであろう頃、俺は一人でこの辺りに住んでいる人、この辺りをよく訪れる人に聞き込みをしていた。スタンプを見せながら

「あー、全然駄目だ……なんの情報も転がってない」

「大変そうだね」

「ああ、いかんせん情報が全く……って、お前——!？」

流石に手詰まりとベンチに腰掛けていると、結構近くから声をかけられる。普通に返事しちまったがまず気にしないといけないのは何故この子が——風待シイナがここに居るのかな気もする。想定外の事で思わず声を上げそうになったがそれは彼女の手によって止められる

「静かにして、周りに気付かれる」

「す、すまん……それよりお前、どうしてこんな所に？」

「記念式典で一曲歌ってって頼まれた。だからここに居る」

「成る程、そう言うことね」

「うん、隣失礼」

シイナは隣に座ると手に持っていたペットボトルのお茶を差し出してきた

「どうぞ」

「それじゃ……遠慮なく」

「それで、何に悩んでたの？」

「いや、仕事の事だから流石に……」

「今更でしょ？」

「……それもそうか」

確かにシイナは悪魔の被害にも合ってるわけだし俺が仮面ライダーだったことも知ってる。そこまで知ってるなら俺が悪魔関連の仕事をしてるのだから知ってるわけだし本当に今更か

「じゃあ話をさせてもらおうが——」

俺がそこからシイナに話をしたのは、今俺達が追っている悪魔の事、敵が悪魔の名称をジャツカルと言っていたこと、出会った少女から行き詰っているならその生物の特徴を参考にすれば良いと言われたこと、そうは言われてもいまいちピンと来てない事。そこまで話を終えるとシイナは軽く頷いた

「成る程、それで行き詰ってるんだ」

「そう言うこと、何が何だかって感じだ」

「……敵は、ジャツカルって言ってたんだよね？」

「ああ、そう言ってた」

「……ジャツカル、か」

少し考え事を始めたシイナを見て、彼女が何かしらの心当たりが出たのかと思いき少し待ってみると。彼女はゆっくりと話しを始めた
「ジャツカルは、オスメスでペアをリーダーに、子供とか兄弟を含めた群れを作るんだって」

「そうなのか……って言うかよく知ってんな」

「動物番組に出る機会があって、少し調べた……それで、リーダーが狩りを、他は子守りとか役割を分担する」

ジャツカルの習性……というか群れの習性になるのかわからんけど、それに何の関係があるのか――

「――って、待ってくれ。オスメスのペア？」

「ん、気付いた」

「今回の悪魔は……一体じゃない可能性がある……いや、違う、そもそも前提が間違ってるのか、俺は今まで悪魔と契約者が一組しかいないと思ってた。けどオスメスでペアを作るなら犯人は男女……そうじゃないにしても二人組でスタンプも二つある可能性が出てくる」

「バラバラだったピースが少しずつだけ繋がっていく感覚に襲われた

「そうだ、そもそもあの予告場も複数を指してた」

――記念式典当日、セントラルタワーは我々のものとなるだろう

犯人が一人でなら我と書く、それじゃないにしても悪魔が出てきた時点で契約者と悪魔の一組を指して我々だと考えていた。けどその前提も間違ってたとしたら

「シイナ！ 頼む、ジャツカルの生態とか……知ってることを全部教えてくれ！」

「ん、いいよ。その代わりに……今度何か奢って」

「わかった、だから早く頼む！」

そこからシイナにジャツカルの生態とか、色々なことを聞いた。その中で最も必要だと思ったのは一つ

――ジャツカルは巣穴で暮らす。子供を安全な場所に隠すために、自分たちだけが入れる巣穴を使って大型動物の侵入を防ぐ

「悪魔をリーダーのペア、契約者を子供だと仮定すれば、契約者の姿が何処にも見えない事の説明もつく。悪魔が二人いるのに一人しか姿を見せなかったのも偵察なら一人で十分だと契約者が判断してたから……よし、なんか点が線になった感じがする」

「迷いは晴れた？」

「ああ、助かった」

「良かった、それじゃあ早く行ってあげて、頑張って守って」

「ありがとう、この礼は絶対にする」

こつちに微笑みを向けてくるシイナに対して頭を下げると俺はその場から駆け出す。全力で走りながらガンデフォンを取り出して所長にコール。複数の事を同時にこなしながら向かうのは――高梨警備保障だ

第12話、祝祭記録J―祭りの裏側―(C)

私と八乙女さんはフタバ先輩から警備に回す人員の割り振りについて聞いていた

「フタバ先輩、この場所なんですけど。警備に回す人員が少ない気がするんですけど」

「そこは主にスタッフが利用する場所だな、そこから少し行った場所……ここだな、この場所が当日参加する要人たちの入場口になるから自然と警備が薄くなるんだ」

フタバ先輩が地図を指でさしながら説明してくれたお陰で合点がいった。確かにスタッフ用の入口と要人たちの入場口なら後者を優先するのは自然なことだ

「じゃあ八乙女さん、私たちは当日スタッフ用入口に重点を置こう」

「わかりました、先輩にも伝えておきます?」

「そうだね、これから合流するつもりだしそれからでも――」

私が言葉を言い切る前にガンデフォンの着信音が鳴り響く。画面を確認すると表示されていたのは門原ヒロトの文字、なんともタイミングが良いというか狙いすましたようにも感じつつ私は電話に出る

「もしもし、門原くん?」

『狩谷! まだフタバ先輩の所か!?』

「う、うん、そうだけど……どうしたの?」

『そうか、まだ居てくれて助かった……早速で悪いんだが、式典会場の地図を見せてくれるように聞いてくれないか?』

「式典会場の地図なら、丁度今見てた所だけど……ホントにどうしたの? 息も切らしてるし」

『詳しいことは後で話すが、確かめたいことがある』

まだ所長たちが双葉先輩の所に居てくれて助かった、これで幾分か体力の消費を抑えられる

「詳しいことは後で話すが、確かめたいことがある」

『確かめたいことって……まあ良いけど、フタバ先輩。これ見せても大丈夫ですか？』

『こっちはマズいな、警備状況とかも書いてあるし……確か、もう一枚予備を貰ってるからそれを取ってくる』

電話越しに聞こえたフタバ先輩の声と足音、恐らく所長たちの見た地図には社外秘な情報がいくつか書かれてたんだろう

『フタバ先輩が予備の地図取りにいった、少しは時間も出来たと思うから……話してくれる？』

「ああ、確かに丁度良いな」

走りながらではあるが少なからず頭の中で情報を纏めることが出来た。後はそれを所長たちに共有するだけだ

「それじゃまず、念頭に置いて欲しいのはこれはあくまでも俺の推測以外の何物でもないってことだ」

『うん、それは了解』

「じゃあ一つ目、今回の事件は犯人が単独犯だと俺達は考えてた」

『そうだね、現に出てきた悪魔も一体だった』

「けど、その前提条件が間違ってた可能性がある」

『間違ってたって、犯人が単独犯じゃなくて複数犯だったって事？』

「ああ、クリスパーは敵の事をジャッカルと呼んでた。だから俺は犯人の使ってるスタンプがジャッカルであると仮定して考えて……それでその生物の特徴を考えて、ジャッカルの群れはオスメスのペアがリーダーになって形成されるらしい」

まだ確証がある訳じゃない、けどこの可能性を考慮しておけば少なくとも二人同時に襲撃をかけられるって自体は避けることが出来る

『けど、オスとメスのペアが群れを作るって言うのと、式典会場の地図に何の関係があるの？』

「巣穴だよ、契約者が潜んでる巣穴が式典会場の中にあるかも知れない」

『……成る程、だから式典会場の地図が見たいんだね』

「ああ、もしかしたら巣穴が会場の中に作られてるかもしれない」

あくまで推測以外の何物でもないが、それでも可能性を潰しておくに越したことはない

『すまない、待たせた』

『大丈夫です、門原君。フタバ先輩戻ってきたよ』

所長からそれを言われた後、通話がビデオ通話に切り替わり画面上に地図が映し出される

「これが式典会場の地図か」

『うん、ここが入口で——』

そこから所長に式典会場がどういう構造になっているのか、当日はどこから参加者や要人が会場に入るのかを聞いていく。聞いた感じだと人員は足りてるし集中すべき箇所の割り振りもしっかりしてる

『……どう？ 何か分かった？』

「いや、画面越しで少し見づらいから何とも言えないが……変な所はないよな」

画面越しだから自然と大きっぱになっちまうが確認しても変な所は特にならない。メインホールにスタッフ用の搬入口、要人用の入口に中庭、やっぱ大雑把に見ても変な所はない——

「——あれ？」

『どうかしたの？』

「いや、メインホールから伸びてる通路の先なんだけど……控室ってそこなのか？」

メインホールから舞台裏を通る形で作られている場所に一つだけある部屋、恐らくそこが控室になってるんだろうけどそこは当日誰が使う予定なんだ

『控室ってこの場所？ フタバ先輩、ここって当日誰か使うんですか？』

『……その部屋は、誰かが使う予定はなかったはずだ』

「なら、当日はその場所を警戒しといたほうがいいかも知れないな」

未だ犯人が誰かはわかっていないが、それでもこの場所を使う可能性が高いと考えるのが自然だろう

『じゃあ、門原君は当日その控室を見張る？』

「ああ、そうした方がいいだろうな」

一番敵が潜んでいそうなのは控室なのに違いはい。犯人が複数犯だったとしてもどちらか一方がここに来るのは間違いないだろう。今の俺は変身することは出来ないが、それでも今出来ることを精一杯やるだけだ

そして時は流れて記念式典当日、多くの参加者で賑わっている会場内を所長、八乙女と並んで三人で歩く

「じゃあ、今日は手筈通りによろしくね」

「はい、先輩が控室の見張り、私と狩谷所長で手薄になってる入口の警備ですよね」

所長は兎も角あんまり悪魔やらと戦ったことない八乙女に任せるのは少し怖くはあるが、そこは今更言っても仕方ないだろう。時間も時間だしそろそろ持ち場に行こうかとしたところで

「相談所の皆さん、お疲れ様です」

「あつ、川瀬さん。お疲れ様です」

こちらに声をかけてきた川瀬さんは、少し不安そうな表情を浮かべながら改めて口を開く

「あの……それで、襲撃犯は、見つかりましたか？」

「手がかりは掴んでるんですけど、肝心の犯人はまだ……」

「そうですか……」

所長のその言葉を聞いた川瀬さんは露骨に落胆の表情を浮かべる、この人……依頼に来た時も嘘をついてるって感じたが、今も何か重要なことを隠してる気がする。それは一体なんだ？

「あつ、すみません。私から話しかけたのにそろそろ仕事に戻らないと」

「いえ、犯人は絶対に見つけますから、川瀬さんも仕事に集中してください」

去っていく後ろ姿を見送りながら、改めて所長と八乙女の方に目を向ける

「それじゃあ、私たちも持ち場に行きましようか」

「そうだね」

「……ああ、そうだな」

まずは自分の仕事をする、気になる事はそれからだ

少し離れた所から、式典が始まった音がする。出来る限り影になっている部分に身をひそめながら控室に目を向ける。スタッフも会場に集中しているのか人通りはビックリするほどない

「……本当に、これで良いのか？」

静かな空間で、ふと冷静になった瞬間俺の中に現れた微かな違和感、オスメスのペアになっている、これは恐らく間違いないだろう。そうになると襲撃を仕掛けてくる悪魔の数は二体、次に犯人は何処かを巣穴として使用している、これも恐らく間違いないだろう……だが巣穴が何処にあるのかを掴めていない

「二人いる筈なのに一体しか姿を現さなかった悪魔、どこに存在するのかわからない巣穴、そして川瀬さんが隠している何か……この三つを繋げることが出来れば——」

自分が遠回りをしているのではないか、そんな感覚に襲われながら、俺は思考を続けた

門原君と別れた私と八乙女さんの二人は、すっかり人通りの少なくなった裏道に視線を向ける、背後からは式典開幕の音が聞こえてくる

「式典、始まりましたね」

「そうだね……気合い入れないと」

悪魔が襲撃をかけてくるならそろそろの筈だ。頬を軽く叩いた直

後、カバンの中からペイルが声をかけてくる

『おい、悪魔の匂いだ』

「ペイル、それホント？」

『貴様等を騙す必要はないからな、近づいてきてるぞ』

ペイルがその言葉を発した直後、少し離れた所から歩いてくる警備服を来た男の人の姿が見えた

「あれ、あの人……先輩と来た時に見た」

「八乙女さん、それホント？」

「はい、管理区画に行つたときに対応してくれた受付の人です」

八乙女さんからそれを聞いた直後、警備服の男の人は私たちに挨拶をして通り過ぎようとする、悪魔の匂いがするって言われた直後に来た人がこの人……ならこの人が犯人なんだ。そう思った私は咄嗟に彼の腕を掴む

「……なんですか？」

「すみません、会場に入る人には念のため不審な物を持ってないか確認をさせて貰ってるんです」

「私、ここの職員ですよ？」

「念のためですから、ご協力お願いします」

私がそう言うと、警備員さんは少し動きを止めて、すぐさま私の腕を振り払って来た道に戻っていく

「待て！」

「所長!? 私はどうすれば——」

「フタバ先輩たちに連絡をお願い、契約者みたいな人を見つけたって！」

「わかりました！」

八乙女さんに連絡を任せて私は契約者の後を追うと、少し広い場所に出た瞬間立ち止まってこちらに振り返る。その手には確かにスタンプが握られている、少し睨み合いになった後、私は口を開く

「……どうしてこんな事をするんですか？」

「俺は、ただこのスタンプを渡されただけだ、これを自分に押すだけで

金が手に入るって——」

「渡されたって、じゃああなたが脅迫状を送った犯人じゃないの？」

「お、俺じゃない。俺はただ写真とスタンプを渡されて、その写真の男が来たらこれを使って襲えって言われただけだ！ 脅迫状なんて知らない！」

「どういうこと？ 写真とスタンプを渡された？ その言葉を聞いた瞬間、私の中で一つの考えが浮かび上がる。まるでこの事件そのものが裏にある小さな一を隠すためのカモフラージュみたいだって……けど、今はそれよりもあの人の持つてるスタンプを優先しないと貴方が脅迫状を送った犯人じゃないなら、スタンプを渡してください」

「……無理だ」

「どうして、理由を教えて——」

「無理なものは無理なんだ！ こうする以外……何も出来ないんだよ！」

『ジャツカル』

私の目の前で、あの人はスタンプを押すと溢れ出した契約用紙に身体が飲み込まれ、その姿をジャツカルデッドマンに変質させた

「……わかった、悪魔の契約者はそつちに出たんだな？」

『はい、今は狩谷所長が後を追ってます』

「そうか、持ち場を離れるのは危険な気もするが俺も一旦そつちに合流す——ッ!?!」

言葉が完全に発せられるより前に、ゾクリと嫌な気配が身体中を襲い咄嗟にその場所から退くと、視界に映ったのはこの前対峙した悪魔だった

「……悪い八乙女、合流遅れそうだ」

『えっ？ 先輩、それってどういう——』

「詳しくは後で話す、じゃあな

『えっ？ ちよ、せんぱ——』

八乙女との電話を切つてすぐさまガンデフォンをガンモードに切り替える

「…………お前、誰だ？」

『……………』

「言葉は、なしかッ！」

悪魔に向けてガンデフォンの引き金を引いた

『ッ！』

「あぶねッ」

一射目を避けた悪魔は壁や天井を使い俺の方に突撃してきた、流石にこつちも積んできた経験があるから何とか避けられたが、動きが変に機械的だ

「式典は始まつてるぞ？ 滅茶苦茶にしに行かないのか？」

『…………』

「答えはなしか」

わかっちゃいたが、この前襲つてきた奴に比べて口数が少ない。同一人物じゃない……………って考えた方が妥当だな

「先輩ッ！」

「！ 八乙女、なんで——」

「これ、受け取ってください！」

急に出てきた八乙女を見て少しだけ、思考が固まりそうになったがすぐに彼女が投げてきたものを見てそれを掴み取る

「デモンズドライバー…………」

「本当は使つて欲しくないけど、今回は致し方なしです！ 戦つてく
ださい、先輩！」

「助かる…………よし」

掴み取ったデモンズドライバーを腰に巻き付け、スパイダーバイスタンプを取り出した

第12話、 祝祭記録J―祭りの裏側― (D)

互いに異なる場所、同じ姿の悪魔と対峙したヒロトトミサキはドラ
イバーを腰に巻き付ける

『デモンズドライバー』

「ふう……行くぞ、ベイル」

「私が、貴方を止めます」

『スパイダー』

『クワガタ』

『Deal』

二人はドライバー上部のスタンプ台に押印した。ベルトから出現
した機械仕掛けのクワガタがミサキの周りを飛び回り、ヒロトの周囲
には蜘蛛の糸が展開される

「変身！」

【Decide up】

【Deep】深く

【Drop】落ちる

【Danger】危機

『仮面ライダーデモンズ』

【Delete up】

【Unknown】未知なる

【Unlest】混沌が

【Unlimited】超える

『仮面ライダーO^{オー}V・E^{イー}・R^{アール}・D^{ディー}・E^{エム}・M^{モン}・O^ズ・N^ズ・S^ズ』

同じ姿をした悪魔の前に、異なる鎧を纏った戦士が立ちはだかった

「俺の全力で、アンタを倒す……だがその前に、お前を此処から連れ出
す！」

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

ベルトを一度押し込み、スタンプを画面に押印する。エネルギーが腕に集まり目の前の悪魔に巻きつけそのまま外に出る

「八乙女、万が一の事があつたら——」

「わかってます、フタバ先輩にですよね！」

「わかってるならいい」

外に出た俺と悪魔の二人は一度地面を転がってから体勢を立て直す。互いに少しの睨み合いの後、走り出す

「はあッ！」

『ッ！』

すれ違いざまの一撃を加える、やっぱり普段よりも動きが重い。ベイルとの契約が不安定になってる影響を変身する度に実感するが今は気にするだけ無駄だ、だからその分は別で補う

【オーインバスター50】

『モグラ』

【Add】

【Decide up】

【モグラゲノミクス】

片腕にはモグラのゲノミクスで出現させたドリルを、もう一方の手にはガンモードのオーインバスターを召喚して構える……が、すぐに動かない。相手がこちらに向かって攻撃をしてきたタイミングで、斬る

「そこだッ！」

『ぐうッ！』

「もう一撃！」

モグラのドリルを使って一撃を相手に与えてすぐ、オーインバスターの引き金を引き銃撃を浴びせる

『ッ!!?』

「もう一撃——ッ!?!」

続け様に攻撃を仕掛けようとしたがそろそろリミットらしい。維持できなくなったゲノミクスが消滅し、その隙について一撃を喰らってしまう……いや、それだけじゃない。少しずつだがデモンスの姿を維持できなくなってきてる

「……次の一撃で、決める」

それしか手はない。モグラバイスタンプをオーインバスターに押し印して、銃口にエネルギーを集中させる。それに気づいた悪魔は縦横無尽に動いて狙いが定まらないようにしながらこちらの隙を狙い始めた

「……………今だッ!」

悪魔が次に向かう場所を予測し、そこに銃口を向けた——だが悪魔の方が一枚上手、銃口を構えたタイミングで身体を急旋回させてこっちに向かって来た。それを見たのならやることはシンプルだ

手に持ったオーインバスターを投げ捨て、すかさずベルトを二度押し込む

【デモンズレクイエム】

悪魔の攻撃が直撃するスレスレの所で避け、悪魔に蹴りを叩き込む。集中していたエネルギーは一気に悪魔の中へと流れ込み。爆発した

デモンズがもう一方の悪魔を撃破する少し前、ミサキの変身したオーバーデモンズもまた、ジャツカルの姿をした悪魔——ジャツカルデッドマンを相手にしていた

「そこっ!」

『ぐあッ! 畜生! これならどうだ!』

一撃を喰らい怯んだジャツカルデッドマンはエネルギー弾をオーバーデモンズに向けて放つが、彼女はそれを避けると再び接敵し悪魔

の顔面に掌底を叩き込む

『があッ——』

その一撃を受けて意識が飛ばしかけているジャツカルデッドマンを見たオーバーデモンズは、すかさずベルトを深く押し込み、ドライバーの正面にスタンプを押印する

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

エネルギーを集中させた拳を悪魔に向けて叩き込むとジャツカルデッドマンはその場で爆発を起こし、契約者の男は完全に分離した
「良かった、助けられた」

「その人は……ね？」

安堵するオーバーデモンズのすぐ後ろ、唐突に現れたソレは彼女に話しかけた。一体誰が話しかけたのか、それを確認するため後ろを向くとそこに立っていたのはクリスパーの少女——國本妃美

「クリスパー……」

「やつほ、仮面ライダーちゃん？ その人は無事助けられたみたいだね。いやあ、良かった良かった」

警戒を緩めないオーバーデモンズを気にすることなく、彼女は友人と話をするかのような口調で言葉を紡ぎ続ける

「一体、何が目的なの？」

「別に、今回に関しては君たちを煽るのが目的だよ。実際の所記念式典を襲撃するなんて言うのも真っ赤な嘘だしね」

「……じゃあ、何で——」

こんな回りくどいことを、そう聞こうとした瞬間、國本妃美の表情を見て言葉を詰まらせる。彼女の表情はこれまで見せた事のない程の笑顔であり、オーバーデモンズ——否、狩谷ミサキが今まで見てきた中でも最も邪悪な表情をしていたから

「簡単だよ？ 潰すため、邪魔な存在である仮面ライダー……正確に言うと、門原ヒロトくんをだけど」

「門原くんを……じゃあ最初からあなた達の狙いは」

「そ、凄いよね彼、伊達に何年も仮面ライダーをやってるだけの事はあ

る……今回も自分に制限時間があるのを分かったうえで差し向けた悪魔を倒しちやったし……ああでも安心して？　今頃彼は、もう死んじやってるから」

それだけ言い残すと、國本妃美はその場から姿を消した……そしてそれから程なくして、ミサキはリサから連絡を受ける

——内容は、門原ヒロトが意識不明の重体だというものだった

デモンズとオーバーデモンズが悪魔と戦った後、記念式典はつつがなく進行し、これと言ったトラブルもなく大盛況のまま幕を閉じた。しかし、今回の事件は狩谷ミサキと八乙女リサ、二人の心に深い後悔を残した

「私の所為で……門原くんが……」

「所長の所為だけじゃないです、私もベルトを渡さなければこんな事には……」

変身を禁止した、と言っても結局彼はデモンズへと変身し、悪魔と戦った。そしてその結果瀕死の重傷を負い、今も意識を取り戻していない

「二人とも、今大丈夫か？」

「……フタバ先輩」

「無責任に思われるかも知れないが……今回の一件、君たちが責任を感じるのは必要はない」

「けど、門原くんは変身したから——」

「それは違う」

ミサキの言葉をきっぱりと否定したフタバは、手に持ったタブレット端末を二人に見せる。そこに映っていたのはデモンズと悪魔が戦っていた場所の付近と思われる監視カメラの映像

「これって……」

「この映像には、門原くんをこの状態にした犯人が映っている」

フタバが映像を再生を開始する。映像はデモンズが悪魔を撃破した直後からスタートし、悪魔を倒したデモンズは契約者を探すためにその場所から移動をしようとする場面だった、そんな彼の前に現れたのは今回の依頼人——川瀬宏伸だった

「川瀬さん？ まさか犯人って——」

「ああ、そのまさかだ」

映像の中の川瀬はスタンプを取り出すと、それを自分に押印する。するとその姿は氷雪に包まれ悪魔とは異なる、白獅子の怪物へと姿を変えた。デモンズはその怪物と戦おうとするが彼が動くよりも早く怪物は腕に装着された巨大ななぎ爪で斬撃を放つと、デモンズの鎧を粉碎し噴き出す血液と共にヒロトは地面に倒れ伏す

それを見た怪物は人の姿へと戻り、その場から姿を消した

「川瀬さんが……今回の犯人」

「じゃあすぐに捕まえれば！」

「……無理だ、セントラルタワー管理会社に川瀬宏伸という人物は在籍していたが、あの男ではなかった」

そう言いながらフタバが差し出した写真に写っているのは、少し頭頂部が寂しい中年の男……本物の川瀬宏伸だった

「じゃあ、あの男は一体」

「……クリスパー、なんじゃないかな」

ミサキの言葉を聞いたフタバは少し思考を巡らせた後、返答をする
「その可能性が高いだろうな」

「じゃあ、追う手立てはないって事ですか？」

「……現状は、そうなるね」

「私たちの会社でも、クリスパーは最重要警戒対象に入っている。これから私も警察と協力体制を敷けるよう社長に掛け合うつもりだ」

フタバはそう言うと、見舞いの品と現状掴んでいるクリスパー関連の資料を二人に渡して、去って行った

「ホントに、何なんでしょうね……クリスパーって」

「わからない、けど、倒さないといけないって思っているのは間違いないと思

う

こうして、記念式典を巡る事件は幕を閉じた、苦い結果を彼女たちの心に残しながら

2クール目

第13話、邂逅記録M―懐かしの母校へ―（A）

クリスパーが本格的に動き出したことを実感してから数日、あの事件で重傷を負った門原君は未だ目を覚ますことはなく私たちの事務所も閑古鳥が鳴いていた

「所長、今日も先輩のお見舞い行くんですよね？」

「うん、いつ目を覚ますかわからないから――つと、これで今日中に纏めないといけない書類は終了」

「お疲れ様です」

今日の分の書類整理も終わったし、そろそろ病院に行こうと思った所で事務所の扉が叩かれる

「お客さんでしょうか？」

「そうだと思う、八乙女さん。悪いんだけど対応してもらえます？」

「わかりました」

とりあえずお客さん対応の方は八乙女さんに任せて、私は誓約書や注意事項の書かれた書類を取り出してファイリングしていく。依頼を一つの仕事として締結させるためにはこういう書類を使う必要がある

「所長、お客様をお連れしました」

「ありがとうございます」

ファイリングした書類を手にお客さんの方まで向かうと、ソファに座っていたお客さんは立ち上がり頭を下げてきた

「狩谷相談所の狩谷です」

「小桐 秋子おぎり しゅうこです……あの、この事務所って化け物関係の依頼も受けてくれるんですよね？」

「はい、そう言った依頼も受けています」

「それなら、お願いします！ 息子を助けてください！」

今回の依頼人、小桐秋子さんはこの島に住む五十代の主婦らしい。

現在は島の住宅の並ぶ場所で夫、現在大学生の娘と高校生の息子と暮らしている四大家族。家族仲は良好で、生活も困窮している訳ではない、話を聞いた限りだと何処にでもいる一般家庭と言った感じだ

そして今回依頼されたのは彼女の息子さんである、小桐 おぎり 忠さんただしが学校でいじめを受けていると言った内容だった。それが普通のいじめであるなら私たちも下手に手を出すことはできなかつたが息子さん*を*いじめている学生はスタンプを持っていると周りに言いふらしているらしい

「それで、今回は私の事務所に依頼を……」

「はい、得体の知れない怪物を呼び出すスタンプを使うなんて……警察が信用してくれるはずもないですし」

確かに、スタンプを用いて悪魔と契約し事件を起こす、私たちが当たり前のように受け入れてしまっている事件の多くも、普通の人から見たら一つ一つが異常な物であり、恐怖を抱くには十分な事件なのだ……それに加えて、現状仮面ライダーの力を使う以外悪魔に対応する手立てはない

「わかりました、その依頼お引き受けします」

「っありがとうございます！」

そこから小桐さんには誓約書や注意事項などに同意をしてもらい、正式にこの依頼を受けることになった

「小桐さん。息子さんの通っている高校の名前を教えてくださいいただけますか？ 調べるにしても情報がないことには何もできませんので」

「分かりました、息子が通っている高校は——こくりつ ろくようこうとうがっこう国立六葉高等学校です」

彼女の息子さんが通っている学校、それは私と門原君が通っていた学校であり、私たちが初めて出会った場所でもある

小桐さんが帰った後、私と八乙女さんの二人は病院まで向かいながら今回の依頼で調査に向かう高校について八乙女さんに伝えておく「へえ、それじゃあその六葉高校って言うのが先輩と所長の通った学校なんですね」

「うん、だから今回は卒業生としてお世話になった先生へ挨拶に来たって体で中に入れるのがありがたいかな」

「……けど、それじゃあ私はどうしましょう。まだ高校生ですから入る卒業生扱いで入るって訳にもいかないですし」

「そこも大丈夫、私たちがスタンプを使った事件を追ってることを知ってて、色々手助けしてくれてた人が今そこで教師をしてるの、それに高校時代お世話になった先生もいるし」

スタンプを使った悪魔はいつ出現するかわからなかった。当然途中で授業を抜けないといけないことも多かったし最悪の場合は仮病を使って休むなんてこともざらにあった。そんな私たちをサポートしてくれたのが当時の友人たちであり、高校時代の恩師だ……それだけじゃなくて当時から色んな人にお世話になってる

「だから大丈夫、心配しないで」

「それなら安心しますけど……っと、着きましたね」

病院に着いた私たちがいつも通り受付で門原君のお見舞いに来た旨を伝えて病室に向かう途中で、彼の病室から出てくる一人の少女とすれ違う、光の当たり具合によって紫にも見える黒髪を持った彼女は私たちの方に少しだけ視線を向けたが、特に何を言うでもなく立ち去ってしまった

「今の人、先輩の知り合いでしょうか」

「どうなんだろう、少なくとも私は見たことないかも……妹さんがいるとか聞いた記憶もないし」

「じゃ、じゃあ……恋人、とか？」

「それもないと思うよ、高校の時は興味ないみたいだったし」

今がどうかはわからないけど、少なくとも当時はその手の話題になった時も興味なさげだった、もつと言うと恋人作らないのか友達と話してた時もいらぬの一点張りだったし……というか、一瞬だけ目

が合ったさつきの子、変な感じがした

「所長？」

「え？ あつ、何？」

「病室、着きましたよ？」

「あつ、ホントだ」

流石に思考の意識を割き過ぎたのか病室の前を通り過ぎそうになっていた。一回思考を始めると他の事が見えなくなる悪癖は、最近収まりを見せていたが完治はしていなかったようだった。気を付けないと

そんなことを考えながら、今日も意識を取り戻さない門原君のお見舞いにやってきた

第13話、邂逅記録M―懐かしの母校へ―（B）

依頼を受けた翌日、私と八乙女さんの二人は青春を過ごした母校“国立六葉高等学校”の校門前にいた……というか最近八乙女さん、平日も学校に行ってる様子がないけど大丈夫なのだろうか

「八乙女さん、そう言えば学校大丈夫なの？」

「え？ ああ、まあ、元々モデルの仕事とかで休みがちでしたし……何も無い日に補習を受けてるので大丈夫です」

「……本当？」

「本当ですよ、流石に高校は卒業したいですし」

まあ本人がそう言っている以上信じる他ないけど……まあそれについては改めて八乙女さんと面談をする必要がある気がする

そんなことを考えていると、校舎の方から長身痩躯の男性が歩いてきた、かつちりとしたスーツを来たその人こそ私たちの恩師であり当時の担任――大蔵 おおくら 宗一 そういち 先生だ

「久しぶりだなあ、狩谷。それにそっちの子が言ってた八乙女か」

「お久しぶりです、大蔵先生」

「初めまして、八乙女リサです」

「初めまして、俺は大蔵宗一、詳しいことは連絡貰ってるからそこら辺の話は校舎に入ってからだ」

大蔵先生にそう言われた私と八乙女さんの二人は、彼を先頭に校舎の方に歩きます

「そう言えば大蔵先生、来丘さんがこの学校で教師やってるって聞いたんですけど」

「ああ、正確にはまだ教育実習だけどな、確かにここに居るぞ」

「そっか、時間が合ったら会いたいかも」

「あの、来丘さんって一体……」

「昨日言ってた私と門原君を色々手助けしてくれた人だよ……私が転校してきて、門原君が成り行きで仮面ライダーになってから活動する為に嵐山くんとか来丘さんが色々助けてくれてたんだ」

当時は今と違って学校もあつたから自由に時間も使えなくて、それ

でも私たちの事情なんてお構いなしに悪魔は出て、いつも通り門原君は無茶するし私は私でお姉ちゃんが残したデータの解析とかに追われててすっごい大変だったけどあの二人がいたから無事卒業出来たんだよね

「俺も門原が化け物と戦ってるのを知ったのはだいぶ後だったからなあ、よく職員会議でも議題に上がったよ。問題児四天王」

「問題児四天王?」

「狩谷と門原、それにさつき話に出た嵐山と来丘の事だよ。無断欠席に早退、遅刻は日常茶飯事。けど普段の素行は全員良いほうだし成績も良かった……当時は他の先生方と一緒に何度頭を抱えた事か」

「その節は本当にご迷惑をおかけしました……」

「気にすんな、お前らの事情が知ってた後は俺もちよつと融通は効くように動いてたし……それに何だかんだ言っただけは楽しかったからなあ」

大蔵先生はそう言うと言われ、私たちに苦笑いの混ざった笑顔を見せてくる。こうして考えると本当に私も門原君も環境……というか友人や恩師には恵まれてるなあ

「それじゃあ、俺は入館証貰ってくるから二人は来賓用の入口から校舎に入ってくれ」

「わかりました」

大蔵先生が去っていったあと、私たちも来賓用の入口で靴を履き替える

「それにしても、所長も問題児だったんですねえ」

「……言わないで、当時はホントに色々大変だっただけなの」

「けど、なんか羨ましいなあ。大蔵先生と話してる時の所長、ホント青春に思いをはせるって感じがして」

「八乙女さんもまだ高校生でしょ? 青春する機会なんてまだまだあるよ」

「だと良いんですけどねえ」

来客用のスリッパに履き替えた私たちは入館証を持ってきてくれた大蔵先生と合流すると、階段を上がって今回使わせてもらう部屋

……は……

「先生、ホントにここですか？」

「ああ、お前らも学生時代よく使ってただろう？」

「そ、そうですけど……何とかいうか、当時を思い出して拒否感が……」

「ここ、補習室ですよ、ホントに大丈夫だったんですか？」

「疑問を持たないで、ホントに大丈夫だったから……よ、よし！ 入りましょう！」

高校時代、出席日数不足やらで散々お世話になった補習室。当時の事を思い出して本能が拒否感を露わにしているが今の私はもう大人、大丈夫、私は大丈夫。何とか自分の中の自分を納得させて補習室の中に入り、大蔵先生から話を聞く

「そ、それで……大蔵先生、電話でお話したことなんですけど……」

「ああ、確か小桐忠君についてだったな」

「はい、学校での彼の様子をお聞きしたくて」

「俺は受け持つてる学年が違うから詳細はわからないんだが、彼のクラスの担任によるとクラスだと特にいじめは受けていないと言っていたな」

大蔵先生はそう言った、学校全体でいじめを隠蔽したいのであればそもそも私たちを学校内に入れるなんてことはしないだろうし、目の前の大蔵先生の反応を見る限り嘘をついている様子もない……そうなってくる

「小桐くんの担任が嘘をついている可能性はありませんか？」

「……それは、完全には言い切れないな」

「？ それじゃあわざわざ聞いた意味ないんじゃないか……」

「ううん、意味はあったよ。仮に嘘をついてるなら今回の大蔵先生が聞いてくれたことで学校側に認知されるかもしれないって相手に思わせられたんだから」

「成る程」

「もう一つの可能性として考えられるのは、そもそもイジメている側が学校側にバレないよう巧妙に隠している可能性だな」

けど、その場合だったら学校側はイジメている場面を抑えない限り

動くことが出来ない

「後者の可能性が高いですかね」

「実際にイジメが起きているのなら、可能性が高いのは後者だろうな」

「小桐くんの担任の先生からお話を聞くことって出来ないんですか？」

「今からは難しいな、話をするならまた後日になる」

「そうですね……それなら少しだけ学校を見てまわっても良いですか？ 卒業生なので人目につかない場所にも心当たりありますし」

「そうだな、それくらいなら構わないぞ……私も着いていきたい所だが生憎とこれから処理しないといけない業務がいくつあつてな、申し訳ない」

「気にしないでください、それじゃあ私たちは失礼します」

大蔵先生と別れた私たちは、二人で学校の中を見てまわる、授業中ってだけあつて生徒は全員教室で授業を受けている

「それで、所長。最初は何処に行くんですか？」

「そうだねえ、とりあえず体育倉庫かな」

「まあ、定番ですねー」

そこから一目……というか教師の目に付かない所を色々と見てまわったけど不審な痕跡は特になかった

「空振りですかねえ」

「多分、それに回った感じ私たちの時と違って教師のチェックが入つてる場所もいくつあつたし」

「……よくわかりますね」

「まあ……たまに作戦会議で使つたりしてたから」

「やっぱり所長たちって不良」

「違うよ!? 勘違いしないで——ッ!」

話を続けようとした直後、急に嫌な感じが身体中を襲い八乙女さんの手を引いてその場から少し飛び退くとバシンッ! という音と共

に土煙が上がる

「……八乙女さん、離れてて」

「まさか、学校の中でですか？」

「うん、問題のいじめっこかわからないけど……この学校でスタンプを使ってる人がいるのは間違いないと思う」

土煙が晴れ、私たちの前に姿を現したのはムカデの意匠を身体の至る所に刻み込んでいる悪魔、ぱつと見の特徴で相手がムカデである事は理解した。悪魔が右手の触手を鞭ように動かし、私の方にダメージを与えようとしてきた

「あぶなっ——」

その一撃を避けながらデモンズドライバーを腰に巻いてホルダーにセットしてあるスタンプを手に取る

『クワガタ』

【Deal】

スタンプを押印台に押印するとベルトから現れた機械仕掛けのクワガタが私の周りを飛び回り、こちらに向かつて放たれた触手を切り裂いていく。思わぬ一撃でダメージを受け、後ずさる悪魔を捉え——
「変身ッ！」

——ベルトの正面にもう一度スタンプを押印する

【Delete up】

【Unknown】未知なる

【Unleest】混沌が

【Unlimited】超える

『仮面ライダーO.^{オー}V.^{バー}E.^デRDデモンズEMONS』

機械仕掛けのクワガタが、装甲へと変わり、エネルギーに包まれる私の身体を覆い、頭部のアンテナがガシヤリと音を立て装着され、複眼が黄色に輝き、オーバーデモンズへの変身が完了する

「行くよ」

私がそう言うのとダメージを受けた悪魔は一步後ろに下がろうとするが、少し動きを止め力無く項垂れたかと思えば、こちらへ向けて急に走り出してくる

『アアッ!』

「ッ!」

まるで理性を失った獣のようにこちらに向けて放たれた一撃を受け止め、悪魔の腹部に拳を一発叩き込む、本来であれば痛みを感じて怯むはずの一撃だが悪魔は気にした様子もなくこちらに攻撃を続けてくる

「痛みを感じてない!? どうして……けど、それなら」

それなら戦い方を変える、まずは悪魔が放ってくる触手を受け流し触手を伸ばしている腕——右腕の肩に掌底を叩き込む。ゴリツと言う音と共に悪魔の片腕はだらりと力を失う。痛みを感じなくても異常を感じたらしい悪魔に対し次は左太ももに一撃、ガクンと身体を落とし落下する悪魔の腹部にボディブローを叩き込み悪魔を空中に浮かべる

「ごめんね、でも……これで終わらせるから少しだけ耐えてね!」

【Charge】

【デモンズフィニッシュ】

ベルトにスタンプを押印した後、両サイドを思い切り押し込むと右腕にエネルギーが集まっていく——そしてそのエネルギーが拳に収束した瞬間、落下してきた悪魔に拳を叩き込む。悪魔に拳が叩き込まれると同時に余剰エネルギーがクワガタの牙を形作り悪魔を挟み込んだまま爆散する

「ふう……」

少し肩の力を抜いた私は悪魔の契約者を探そうとすると、一人の女子生徒を連れた八乙女さんがこちらに近づいてきた

「所長」

「八乙女さん、その子は?」

「さっきの悪魔の契約者みたいです、これも持ってましたし」

そう言いながら彼女が見せてきたのはムカデのエンブレムが刻まれたモノクロのバイスタンプ

「貴方がこのスタンプを?」

私がそう聞くと、少し怯えた表情を見せた女子生徒はこくりと頷

く、どうやら本当に彼女が悪魔の契約者で間違いないようだ

「それは――」

「所長後ろッ！」

八乙女さんの声で後ろを向いた私は女子生徒を庇いつつ迫りくる触手を何とか回避する。改めて後方に視線を向けるとそこにいたのはさつき倒した筈のムカデ型悪魔。それも今度は一体だけでなく三
体

「これは、一体……」

「見ての通りだよ、クソツ人様が卒業して何年かしたらこの有様か」

私の疑問に答えたのはD・D・C・Uの隊員を二人ほど引き連れたフタバ先輩――否、クロハだった

「クロハさん？ どうしてここに」

「こつちも仕事だよ、全員構え、眼前の悪魔を掃討、そして契約者の捜索に入る……もう無理だろうがこれ以上騒ぎを大きくすんじゃねえぞ」

「了解！」

悪魔と交戦を始めた隊員たちを見てすぐ、クロハは私の方を向く

「悪いが協力をお願いする、話はそれからだ」

「……わかりました」

改めてオーバーデモンズに変身した私は、隊員たち共に眼前の悪魔と交戦を始める

第14話、邂逅記録D―学校に潜む影―(A)

現れた悪魔の掃討を終えた私は、八乙女さんが捕まえてくれた契約者と一緒にクロハさんの後に付いてD・D・C・Uの所属する車両までやってきた。車両の扉を開けて中に入るとクロハさんは奥に腰をかける

「お前らも座れよ」

「それじゃあ、失礼します」

私と八乙女さんも車の中に入り席に座る

「さてと、そんな話をするならこっちからだな」

クロハさんはそう言うと、カバンの中からとある書類を私たちの方に渡してくる。そこに書かれていたのは……スタンプ売買組織？

「クロハさん、これってクリスパーの事ですか？」

「いや、アイツらとは違う組織だ。本格的に動き出したのは最近だがもの凄い勢いで勢力を拡大して気が付きやクリスパーよりも活動が活発になってるな」

「それじゃあ、最近の悪魔事件でスタンプを渡してたのは」

「ああ、クリスパーじゃなくこの組織って事になる……逆にクリスパーは不自然なほど沈黙を貫いてるな」

そうなるとクリスパーは自分たちが動かないで誰かにスタンプを流してデータを集める方向にシフトした可能性もある

「でも、今まで自分たちで動いていたはずなのにどうして急に周りくどい方向に舵を切ったんでしょう」

「多分だけど、今までよりたくさんデータの集める為じゃないかな」
「たくさんデータのたつて悪魔のですか？」

「うん、敵が何を狙ってるのかわからないけど、バイスタンプをばら撒いてるって事は悪魔に関係する事だと思うんだよね」

本当に何を狙っているのかまではわからないけど、大量の悪魔のデータが必要なのはまず間違いない……とは思うんだよね

「まあ何はともあれだ、俺達が追ってる組織のバイヤーがこの学校に潜んでるらしい……あくまでも疑惑だったが大量のムカデ悪魔のお

陰で確信に変わったよ」

そこまで言うとかロハは腕を組みなおして私たちの方に視線を向ける

「さてと、俺は今回の仕事について話した、お前らの事だからなんかしらの依頼でここに来たんだろ？」

「……そうですね、少しいじめの調査に」

「へえ、慈善事業か？」

「いえ、ただ今回依頼で調べるのはいじめている側です、どうにも自分はスタンプを持つてるって言いふらしてるみたいで」

「成る程な、そいつの名前はわかるか？」

「いえ、そこまではまだ」

「なら、わかったら俺らにも連絡頼んだ。何となくだがこっちの仕事とお前らの受けた依頼は繋がってそうだからな」

「わかりました……でも、それならクロハさんも何か情報を手に入れたらこっちに共有してくださいね」

「出来そうだったなら」

その後すぐ、クロハさん達と別れた私と八乙女さんの二人は事務所への帰り道を歩く

「……何というか、以外でしたね」

「クリスパー以外にもスタンプをばら撒いてる組織があった事？」

「それもありますけど、それ以上に……自分が思ってた以上に普段の生活の中に危険がある事が以外でした」

見た感じいつもと変わらないようだけど、それでも少しだけ憂いが帯びているように見える

「やっぱり世の中、知ろうとしないと知らない事って多いんですね。多分先輩や所長と会えなかったら悪魔の事も怖いなーくらいにしか感じなかったって思うんです。悪魔と契約した人の事とか、悪魔と戦っている人の事とかも、どこか遠い世界の事だっと思ってっちゃってたんだらうなーって」

八乙女さんが話をしたのはもしもの話、きっとそれは私も、門原君も同じなんだと思う。もしも私がお姉ちゃんの研究を継がなかったら、もしも転校した先で門原君と出会わなかったら、そこにあったのは今とは全然違う未来

「けど、今はこうして一緒に歩いてるんだし……あんまり深く考える必要はないと思うよ」

どれだけ考えた所で、もしもはもしもでしかない。結局こうして私たちが生活している時間が私たちにとっての現実な訳だし……それ以上に門原君はそんな事考える暇があつたらもつと別の事を考えろとか言いそうだし

「そうですね、結局……もしもの事を考えても不安が募るだけですもんね」

そんなことを考えながら私たちが事務所への道を歩いていると、一人の少女が私たちの前に現れる

「初めまして、貴方達が狩谷相談所の人達？」

「そうですね、えっと、貴方は？」

「私？ 私は……えーっと、まあ、狩谷相談所で働いてる人の知り合いですって所かな？ 知ってるでしょ、門原ヒロト」

ここで私は思い出した、目の前にいる少女は私たちがお見舞いに行つたときにすれ違つた少女だ

「門原君の知り合い、もしかして従兄弟とか？」

「当たらずとも遠からず……かな、少なくとも小さい頃はずっと一緒だったから。幼馴染って言つた方が近いかも」

「先輩の、幼馴染」

「うん、でもビックリしたよ。やっと会えるようになったから会いに行つたのに彼、重傷で寝ちゃってるんだもん」

今この場にいない彼を慈しむように、でもその中に呆れとか怒りとか色々な感情が混ざってる不思議な表情で私たちと話を続ける……けど、なんというか、話をしていくうちに彼女に対して変な違和感を覚える

けど、私が何とも言えない表情を見せていることをお構いなしに八

乙女さんは目の前の少女と談笑を続けている

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。私は無衣、よろしくね」

「はい、私は八乙女リサって言います。それでこちらが……って、所長？ どうしたんですか？」

「……うん、何でもない。私は狩谷ミサキ、よろしく」

「そう、よろしくね。八乙女さん、狩谷さん……つと、そろそろ行かないと、またね」

それだけ言い残して、無衣さんは私たちの元から去っていった

「所長、少し様子変でしたけど……大丈夫ですか？」

「うん、無衣さんの事が少しだけ気になっただけ」

「ああ、綺麗でしたもんね。無衣さん」

そこから特は何があるというともなく、数日が過ぎた後……大蔵先生から連絡が来た。内容は小桐くんの担任の先生から話を聞けるらしい